

福岡県八女市
管の谷窯跡群

—八女古窯跡群調査報告 Ⅲ—

塚ノ谷・釘崎・童男山古墳

1971

八女市教育委員会

序

八女市の北部丘陵地一帯は先史時代の遺跡の宝庫といわれるところであります。その一部が最近の社会の変ぼうと経済的要請により県営パイロット地区に指定され新たな目的の土地造成がはじめられました。

市は遺跡等の確認保存のため、これまで塚ノ谷、中尾谷の窯跡群を継続調査をおこないましたが、このたびは引続き管ノ谷窯跡群及び塚ノ谷古墳の緊急調査をおこないました。

調査は県当局の財源援助と九州大学考古学研究室の熱心な研究指導並びに地元住民の御協力を得て所期の目的を果たすことが出来ました。

ここに調査結果をまとめた報告書を刊行するに至りましたが、執筆にあたりしめされました、調査員の方々のご熱意に、心から敬意を表したいと思います。

昭和 46 年 3 月

八女市教育委員会 教育長

松 延 一 男

本文目次

第1章 調査の経過	(小田富士雄)	1
I 窯跡地域の調査		1
II 塚ノ谷・釘崎・童男山古墳の調査		2
第2章 管ノ谷第1号窯跡の調査	(真野和夫)	4
I 窯跡の立地		4
II 窯跡の調査		5
第3章 塚ノ谷窯跡地区凹地の調査	(小田富士雄)	15
第4章 塚ノ谷・釘崎・童男山古墳の調査		18
I 塚ノ谷古墳	(黒野 肇 小田富士雄)	18
II 釘崎第3号古墳	(小田富士雄 真野和夫)	23
III 童男山古墳	(小田富士雄 真野和夫)	36
第5章 総括	(小田富士雄)	42
付・九州発見古硯出土遺跡地名表・追補	(小田富士雄)	43
塚ノ谷古窯の磁気年代学的考察	(渡辺直経)	44

図 版 目 次

- 図版第一 塚ノ谷遠望
- 図版第二 管ノ谷窯跡(一)
(上) 管ノ谷第1号・第2号窯跡遠望 (下) 管ノ谷第1号窯跡遠景
- 図版第三 管ノ谷窯跡(二)
(上) 灰原の状態(横断面) (下) 天井部残存状態
- 図版第四 管ノ谷窯跡(三)
(右) 窯内全景(下方より) (左) 窯内全景(煙出し上方より)
- 図版第五 塚ノ谷凹地
(上) 塚ノ谷凹地全景 (下) 塚ノ谷凹地NW-E Sトレンチ
- 図版第六 釘崎古墳(一) 鏡鑑・工具・砥石
(上) 仿製平縁四乳文鏡 (下) 鉈・刀子・砥石
- 図版第七 釘崎古墳(二) 環頭太刀・直刀
(上) 環頭太刀・直刀 (下) 環頭太刀柄部・銀銅飾板部分
- 図版第八 釘崎古墳(三) 鉄鏃
(上) A類 (下) C類
- 図版第九 釘崎古墳(四) 鉄鏃
(上) B類 (中) F類 (下) E類
- 図版第一〇 釘崎古墳(五) 鉄鏃・馬具
(左) 鉄鏃A・G・H・I・J・K・L類 (下) 引手壺・鏡板
- 図版第一一 釘崎古墳(六) 馬具
雲珠・辻金物・木製鉄張鑑・鉸具
- 図版第一二 釘崎古墳(七) 馬具(轡三種)
- 図版第一三 釘崎古墳(八) 土器
- 図版第一四 塚ノ谷古墳(一) 石室の構造
(右) 前室・羨道の床面敷石の状態 (左) 塞道部閉塞状況
- 図版第一五 塚ノ谷古墳(二) 石室の構造
(上) 前室内よりみた閉塞状況 (下) 前室、羨道の壁面構築状況
- 図版第一六 塚ノ谷古墳(三) 石室の構造
(右) 前室西壁と後室袖石の構築状況 (左) 後室奥壁の構築状況

- 図版第一七 塚ノ谷古墳(四) 石室の構造
(上) 後室、前室の西壁側構築状況 (下) 後室北西隅部の石積構造
- 図版第一八 塚ノ谷古墳(五) 前室遺物出土状態
(上) 上方より望む (下) 後室より望む
- 図版第一九 塚ノ谷古墳(六) 遺物(刀子・須恵器)
- 図版第二〇 童男山古墳(一)
(上) 古墳の外観を東側山丘より望む (下) 石室入口付近の景観
- 図版第二一 童男山古墳(二)
(上) 前室正面より後室を望む (下) 前室北西壁と屍床
- 図版第二二 童男山古墳(三)
(右) 後室南東隅部の石組 (左) 後室より前室南東部を望む
- 図版第二三 童男山古墳(四)
(右) 後室北東部壁面の上半部から天井までの石組
(左) 後室内通路天井石から後室天井までの石組
- 図版第二四 童男山古墳(五)
(上) 後室正面石屋形全景 (下) 石屋形北西側内部

挿 図 目 次

第 1 図	塚ノ谷・管ノ谷地形図	……………	2
第 2 図	管ノ谷第 1 号窯跡発掘風景 (小田富士雄撮影)	……………	3
第 3 図	同	地形実測図 (真野和夫・青崎和憲実測、真野製図)	4
第 4 図	同	実測図 (真野・青崎実測、真野製図)	6
第 5 図	同	出土須恵器実測図 (真野測図)	8
第 6 図	同	出土須恵器実測図及び拓影 (真野測図・手拓)	10
第 7 図	同	出土須恵器拓影 (真野手拓)	11
第 8 図	同	出土布痕土器及び瓦拓影 (真野手拓)	12
第 9 図	熊本県城南町阿高出土の蔵骨器 (「古代文化」より)	……………	13
第 10 図	塚ノ谷凹地NW—E S トレンチ土層実測図 (小田富士雄測図)	……………	15
第 11 図	塚ノ谷凹地トレンチ出土須恵器実測図・拓影 (小田測図・手拓)	……………	16
第 12 図	塚ノ谷古墳石室実測図 (黒野肇・米田鉄也・小田・真野・青崎実測、真野製図)	……………	18—19
第 13 図	塚ノ谷古墳閉塞状況 (小田撮影)	……………	19
第 14 図	塚ノ谷古墳閉塞状態実測図 (黒野・米田実測、真野製図)	……………	20
第 15 図	塚ノ谷古墳出土須恵器実測図・拓影 (小田測図・手拓)	……………	21
第 16 図	塚ノ谷古墳出土刀子実測図 (小田測図)	……………	22
第 17 図	釘崎第 3 号古墳付近地籍図 (小田製図)	……………	24
第 18 図	釘崎第 3 号古墳地形実測図 (大久保設計測量事務所実測、小田製図)	……………	25
第 19 図	釘崎第 3 号古墳出土鏡鑑断面実測図 (小田測図)	……………	26
第 20 図	同	環頭太刀・直刀実測図 (小田測図)	26—27
第 21 図	同	環頭太刀装具実測図 (小田測図)	27
第 22 図	同	鉄鍔実測図 (小田実測、真野製図)	29
第 23 図	同	馬具実測図 (小田・真野実測、真野製図)	30
第 24 図	同	馬具実測図 (真野測図)	32
第 25 図	同	鉈・刀子及び砥石実測図 (小田・真野測図)	32
第 26 図	同	土器実測図 (真野測図)	34
第 27 図	環頭柄頭参考例 (樋口隆康・小田撮影)	……………	34—35
第 28 図	童男山古墳付近地形図	……………	37
第 29 図	「童男山窟中之図」 (矢野一貞「筑後国史」下巻より)	……………	38
第 30 図	童男山古墳石室実測図 (小田・真野実測、真野製図)	……………	38—39

第1章 調査の経過

八女市忠見区を中心にすすめている八女古窯跡群の調査は昭和43年度にはじまり、今回で第三年度目をむかえるにいたった。これまでに塚ノ谷・中尾谷の窯跡を調査して報告をまとめてきたが、今回は管ノ谷の窯跡の調査と、塚ノ谷地域にのこされている横穴式石室古墳の調査を行なった。調査日程と調査団の構成は次のとおりである。

調査日程 昭和46年1月4日～12日

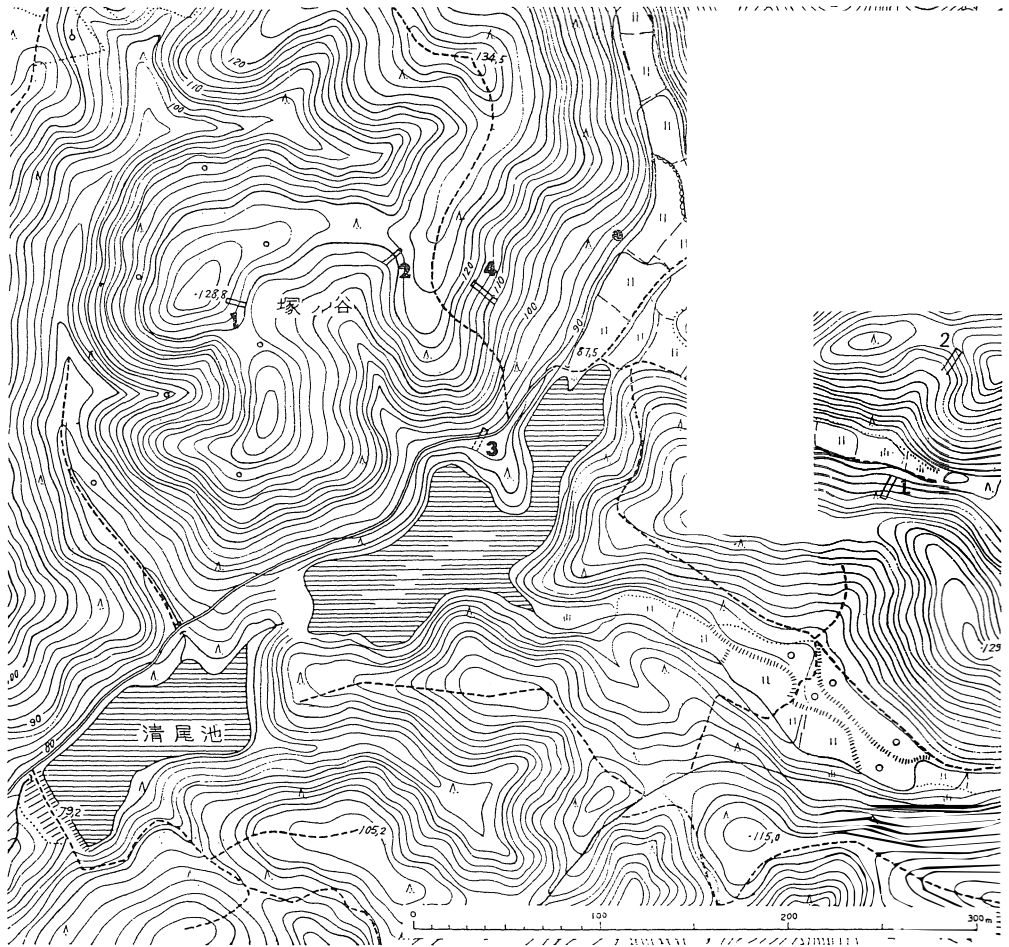
調査員	九州大学文学部助手	小田 富士雄
	九州大学文学部大学院学生	真野 和夫
	九州大学文学部聴講生	黒野 肇
	〃	米田 鉄也
	別府大学文学部学生	青崎 和憲
	八女市教育委員会 社会教育課長	平島 忠太郎
	社会教育主事	江下 淳
	〃	松延 繁太
	中央公民館主事	渡辺 勲

調査にあたってはこれまでと同じく、忠見区の方々に人夫として連日労働力を提供いただき、後半には県立八女高校社会学部学生達の援助があった。また、調査中は例年の如く教育委員会の方々をはじめ、中央公民館管理人星野明御夫妻の食事その他にわたる御世話をいただいた。記して謝意を表する次第である。以下、窯跡と古墳調査の経過概要を記しておく。

I 窯跡地域の調査

今回の調査で予定された作業は三項目であった。まず、第一年度に調査した塚ノ谷第4号窯跡の南に隣接するところに、窯跡が存在するかに思われるので、この地域を調査すること。その二は塚ノ谷第1号窯、第2号窯の立地する斜面を下った最下部があたかも盆地の底をなすような凹地を形成していて、窯跡に関連する何らかの遺構の存在が想定されるので、この凹地を探索調査すること。その三は、塚ノ谷の東方に細長くのびる低湿地の南北にそびえる管ノ谷の山丘斜面に発見された窯跡の発掘調査を行なうことであった。

塚ノ谷第4号窯隣接斜面の調査には真野・青崎両調査員があたり、1月5日で終了した。ここでは斜面等高線にそったトレンチ三本を設定して窯跡の探索にあたった。第4号窯跡と発掘地の間には鞍部斜面がみられ、第4号窯跡灰原末端を切断する仮道に灰原の一部とみられる断面がのぞいていたので候補地としてあげられた。この斜面に設定した三トレンチは下方からA(長さ16.2m)・B(2.3m)・C(7.6m)とし、1～2mの深さに及んだが窯跡の存在は確認できなかった。いずれも0.5～1mの深さで岩盤にあたり、仮道にのぞいた灰原は第4号窯跡関係灰原の小ブロックが遊離したもの



第1図 塚ノ谷、管ノ谷地形図 (□ 窯跡、● 古墳)

であろうと考えられるにいたった。塚ノ谷凹地の調査には小田調査員があたり、他地域調査の進行と調整して1月9・10日の両日に実施した。

管ノ谷第1号窯跡の調査には真野・青崎両調査員があたり、1月6日から10日まで実施した。この調査によって八女古窯跡群中、はじめて八世紀代に下る須恵器窯跡が確認された。これは現在までのところ、八女古窯跡群における最下限の窯跡となった。

Ⅱ 塚ノ谷・釘崎・童男山古墳の調査

八女古窯跡群で生産された須恵器がどのように供給されているかという問題は、窯跡群の調査に関連しておくる重要な問題である。われわれも八女古窯跡群の調査を手がけてより、大きな関心を払ってきたのであり、先ず最も近いところにある八女古墳群出土の須恵器資料の蒐集を心がけてきた。すでにそれらの一部については調査報告Ⅰ及びⅡに公表してきたが、さらにすすんで窯跡調査によって積みあげてきた須恵器編年の成果を尺度として、八女古墳群の一つ一つを編年的に位置づけることを企図してきた。ところが、八女古墳群の古墳石室についてはこれまで正確な実測図もない現状である



第 2 図 管ノ谷第 1 号窯跡発掘風景

から、露呈している石室構造の記録づくりからはじめなければならない実状であった。そこでまず研究上重要な古墳を選んで実測図作成をすすめてきた。勿論、なんらの予算的裏付けもなく、行政当局に申し入れても緊急調査以外は対象としてとりあげてくれない現状であるから、われわれの自発的企劃と、八女市教委の御理解ある援助によって細々と続行しているのである。本書に収録した成果はこのような経緯のもとに行なった童男山古墳の石室実測と、不測の事故によって遺物だけをとりとめた釘崎第 3 号古墳遺物の整理、さらには今回の塚ノ谷、管ノ谷窯跡地域の調査と平行してすすめた塚ノ谷古墳調査の三古墳についてである。

童男山古墳の石室実測は昭和 45 年 11 月 3 日から 5 日まで小田・真野両調査員が実施した。

釘崎第 3 号古墳は昭和 45 年 3 月、開墾によって連絡の手違いから不幸にも未調査のままに湮滅した前方後円墳であり、注目すべき遺物が多く出土した。昭和 45 年 9 月の中尾谷窯跡群調査にあたって実見する機を得てから本年の管ノ谷第 1 号窯跡の遺物整理までの機会を利用して小田・真野両調査員が整理を行なった。

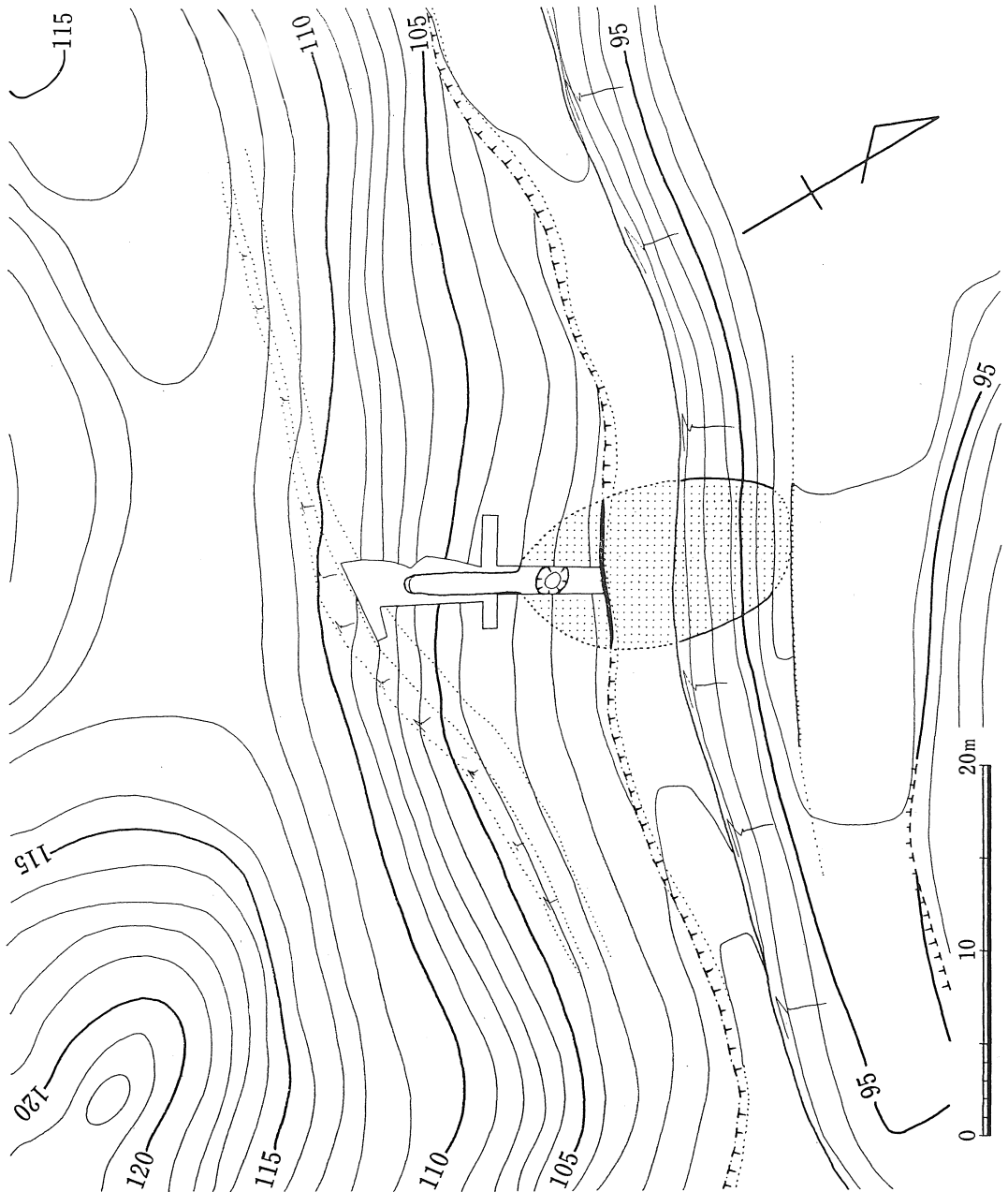
塚ノ谷古墳は塚ノ谷第 4 号窯跡の立地する塚ノ谷東斜面の麓に開口する小円墳である。清尾池につながる谷地形の中に確認されている唯一の古墳であるところから、塚ノ谷窯跡群となんらかの関連を有するものではないかという予測がもたれていたが、県営パイロット事業によって塚ノ谷第 4 号窯跡を含む塚ノ谷東斜面が保存されにくいという見通しが明らかになってきたので、この古墳が埋没されるのではないかと考えられ、今回調査対象としてとりあげられた。調査には黒野・米田両調査員が 1 月 5 日からあたった。当初開口していて横口式単室古墳と思われたが、調査のすすむにつれて未掘の前室と閉塞状態完全な羨道が確認されて後半から、小田・真野・青崎三調査員も合流して 1 月 12 日に終了した。

(小田 富士雄)

第 2 章 管ノ谷第 1 号窯跡の調査

I 窯 跡 の 立 地 (図版第二、第 3 図)

管ノ谷第 1 号窯跡は八女市忠見区大字本字姫豊に所在する。44年度に調査の行なわれた塚ノ谷古窯跡群の東南約 300 m のところにある。付近は入り組んだ小谷によって分割された標高 130 m くらいの



第 3 図 管ノ谷第 1 号窯跡地形実測図

低丘陵が一带に続き出入りの多い複雑な地形となっている。管ノ谷は灌漑用池である清尾池に隣接する谷で現在は水田として使用されている。窯跡は谷をはさんでほぼ東西に延びる二つの丘陵斜面に1基ずつ発見され、今回はそのうち谷の南側丘陵上の1基が発掘された。従って今回発掘された窯跡を第1号窯、未調査の分を第2号窯としたのである。1号・2号窯跡は谷をはさんでほぼ向い合う位置に構築されており、どちらも丘陵が鞍部となった斜面を使用している。窯は丘陵北側の斜面で標高104~108 mのあいだに築かれており、水田面との比高は約20 mほどである。なお窯跡の存在する付近は46年度の県営パイロット事業によって大規模に削平され茶畑、あるいはミカン畑として生れ変わる。

Ⅱ 窯 跡 の 調 査

(1) 窯 の 構 造 (図版第三、四、第4図)

窯の全長は約5.2 m、巾はほぼ均一で1 m前後をはかる短かくて変化に乏しい構造である。窯の天井がはじまる焚口付近で地表下1.4 mあり、くりぬき式の窖窯である。したがってスサ入り粘土の使用はみとめられない。窯体主軸の方向は N30°E である。焼成部上半において天井部が残存していたが作業中の崩壊をおそれて写真・実測ののち取り除いた。

焚口 巾約1 mあり天井が築かれた位置から1.2 mほどで急に左右に広がってゆく。この位置から灰原方向へ約4 mまでは緩傾斜をなし、いわゆる前庭部と称すべき状態で灰層の厚さは約20 cmである。前庭部やや焚口よりのところで、長径約80 cmほどの楕円形のピットが発見された。ピット内では底面に近く高台付塊の破片が出土したが遺物は非常に少くまた純粹の炭層も少い。暗茶灰色を呈する焼土と灰の混在する層が主体をなす。この部分では地山に風化した絹雲母片岩を含んでいる。窯体天井部の焚口における高さは側壁の状態から推して約50 cm前後であったとみられる。

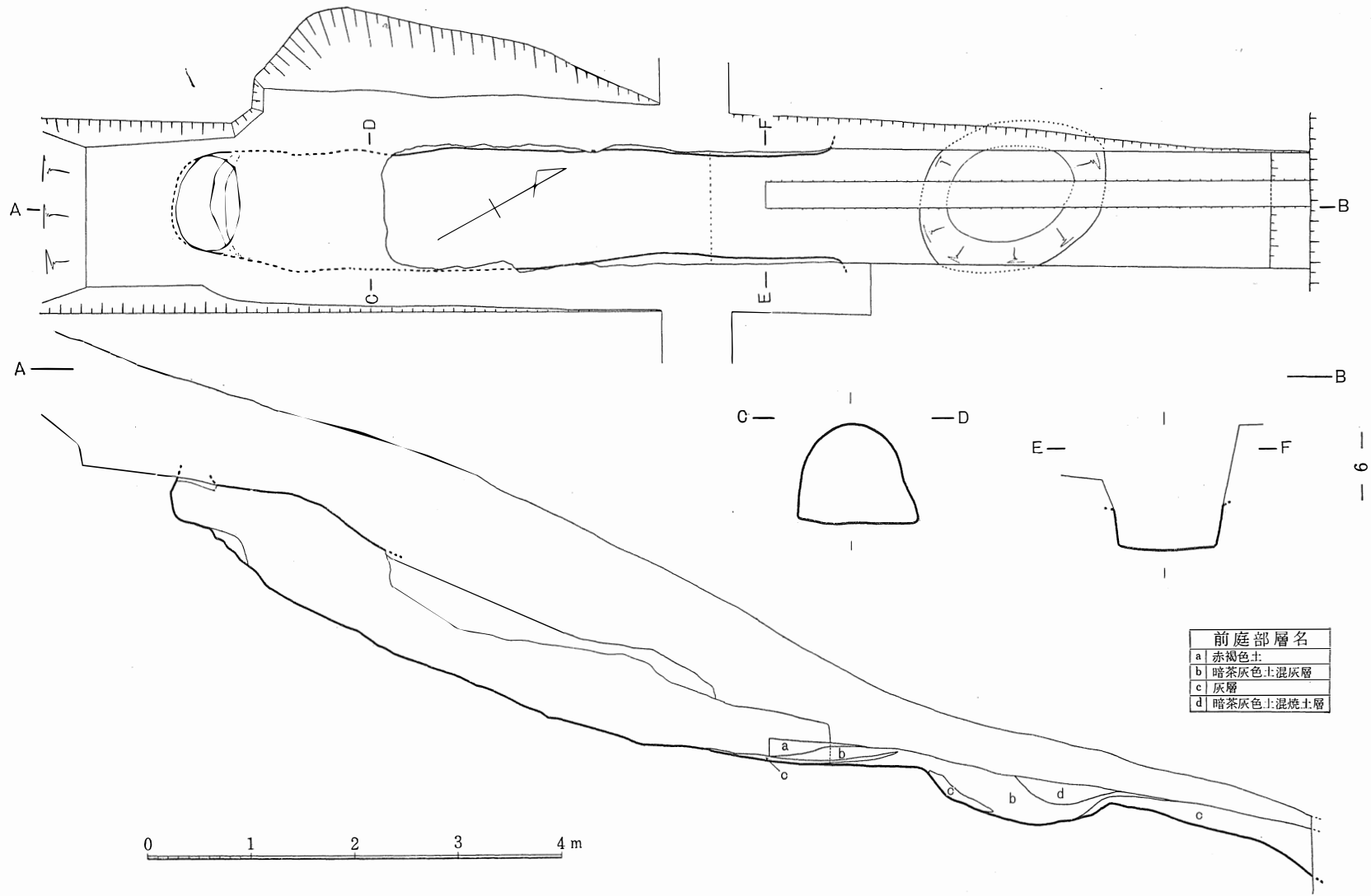
燃焼部 縦断面でみて焚口から約80 cm付近で床面の傾斜が変化しており、このあたりを中心として前後の位置が燃焼部と思われる。壁は窯体中央部に比較してややせまらる程度で特に注意すべき変化はない。窯内での遺物の出土はこの床面傾斜の変わる位置から焚口にかけてであり、窯廃棄後の早い時期に焼成部あたりからずり落ちて堆積したのであろう。

焼成部 燃焼部との境界が判然としないが約3.5 mあまりの長さを占める。最大巾1.2 m、床面傾斜は中央部で約22°をはかる。煙出部にいたる過程で若干その巾を減じ勾配を増す。煙出しから焚口方向へ約1.5 mの間は天井部が遺存しており、この部分で天井の高さは94 cmであった。断面形は丈の高い蒲鉾形を呈す。

煙出し 煙出しは奥行35 cm余りの緩傾斜の床をなし、奥壁は直立して現在40 cmほど残っている。この部分で地表まで1.3 cmあり楕円形の煙道が煙突状に地表までくり抜かれていたとみられる。

(2) 灰 原 の 調 査

前庭部のすぐ北ちょうど灰原の中央部を横断するかたちで巾約3.5 mの道路がはしり灰原の主要部



前庭部層名	
a	赤褐色土
b	暗茶灰色土混灰層
c	灰層
d	暗茶灰色土混焼土層

第 4 図 管ノ谷第 1 号窯跡実測図

分をカットしている。道路のり面に残る灰層の中は約8m、深さは最も深い中央部で約50cmの堆積である。道路際から谷までは勾配の大きい斜面をなしており傾斜のせいか灰層の堆積はきわめて浅い。このようにして灰原の範囲は前庭部を含めて長径15m短径8mの長楕円形をなすことが観察された。前庭部から道路崖面までは主軸に沿った巾1mのトレンチ内において、また道路下の傾斜面においては全面をめぐってできるだけ多くの遺物を採集するよう努めた。しかし前庭部においても灰層中に含まれる遺物が少いうえ、傾斜の大きい道路下の部分ではもともと堆積することすらむずかしい状態で採集した遺物は窯の発掘調査としては非常に少いものであった。灰層中に土器片の包含される割合が小さいということは、製作過程における製品の失敗度の多少に大きく左右されることはいうまでもないが本窯跡の場合その使用期間がかなり短かったということも推察されよう。

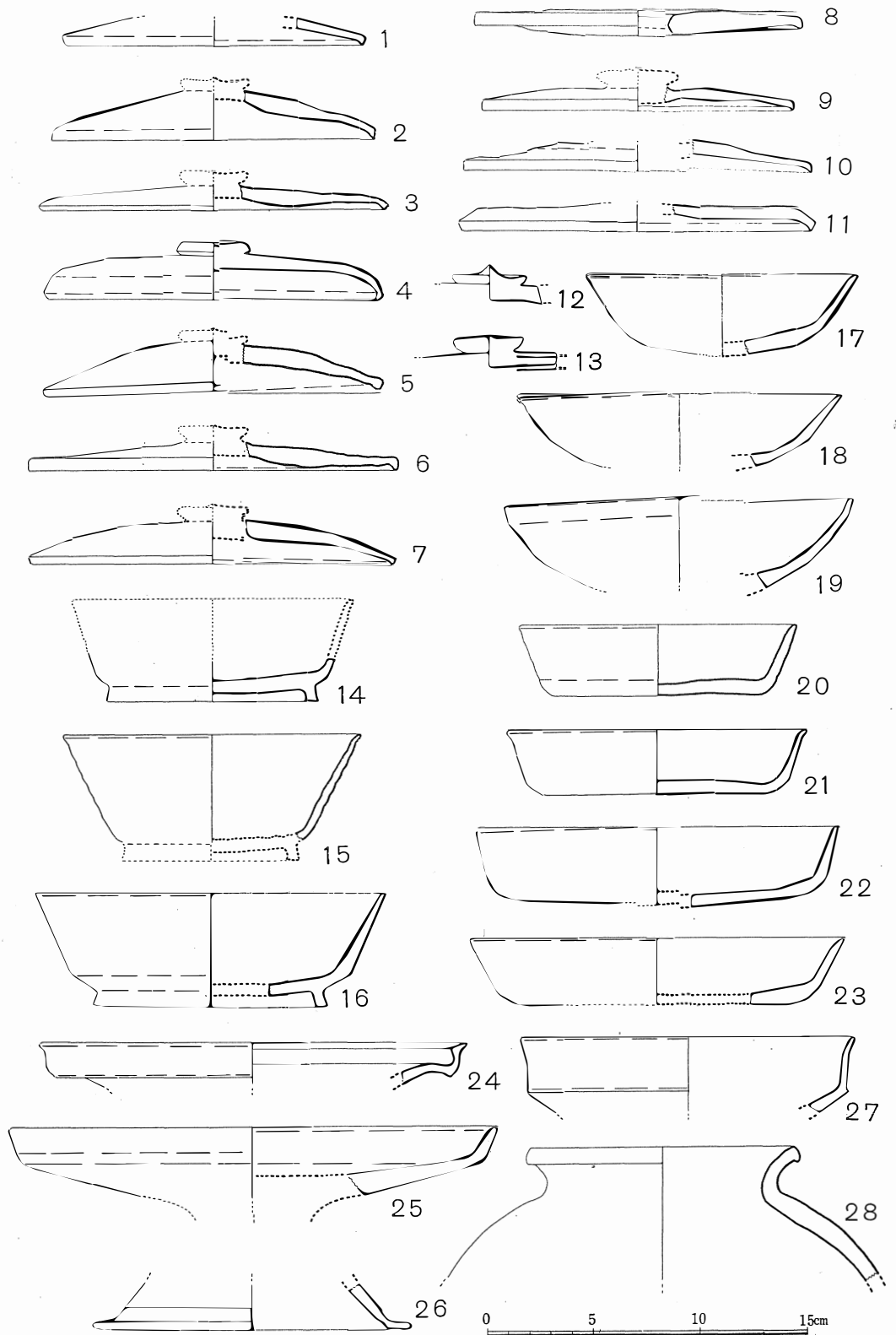
(3) 遺物 (第5～8図)

本窯跡出土遺物のほとんどは前庭部あるいは灰原における採集であり、窯内ではわずかに数片の甕破片が燃焼部付近において発見されたのみで、図示できるものは(33)に掲げた甕口縁部だけであった。前庭部および灰原にあっても灰層中に包含された遺物の量は意外に少く、その上灰原の中心とみなされる部分がすでに道路となって削除されているため採集できた遺物の量は窯跡調査の遺物量としてはきわめて少く完形を得た資料はほとんどない状態であった。また瓦片とおぼしき遺物の存在が知られてからは、確定的な資料の発見に努めたが図示した資料(第8図2)の発見は整理中のことであった。

壺蓋 (1～11)

遺物の出土量の上からみれば、甕片を除いて最も多くその中から若干の形態的なヴァリエーションを観察することができた。蓋の口径の大きさからみるとほとんどが14～17cm前後であり、非常に大形のものも発見されていない。製作手法の点では、表面は一部ヘラ切り離し(あるいはヘラによる再調整)の後にロクロ調整されたものもあるが、多くはヘラ切り痕を残したままである。その際に生じた砂粒の走向は観察できるものでは器面に対し左回転を示し、右回転のものはみとめられない。内面はすべてロクロ調整が行なわれ二次的なナデはほどこされない。また形態的にみて、器高が高いもの、すなわち天井部がふくらみをもつものと、非常に扁平なものがある。以上、共通してみられる特徴を述べたが、さらにこれらの蓋について口縁部の形態に注目するならば次の二つに細分できよう。

a 口縁端部が嘴状に短く下降した形態をとるもので、(1・7)のように天井部がふくらみもち端部がやや内に向いつつ下降し先端が稜をなす形が代表的である。(2・4・6・9)がこの形態をとるが(2)のように先端が多少延びたものもある。(4)は焼け曲を生じて天井部のふくらみの強い形になっているが、つまみを伴う唯一の例であり、頂部のくぼんだつまみの形態はつまみのみの採集品(12・13)と合わせ少くとも三つのタイプがあったことを示している。(7)の蓋では内側口縁部近くに焼成時に融着した壺の口縁部片がみとめられ、これによって壺・蓋という1セット単位に焼成が行なわれたことが知られる。(8)は口縁端の形から言えばこの類に含まれるものであろうが蓋中央部に径3cm弱の孔が穿たれている。円孔は焼成前にヘラで切り取られたものと思われ丁寧



第5図 管ノ谷第1号窯跡出土須恵器実測図

である。色調は茶灰色を呈し、形態はきわめて扁平でむしろ中央部が口縁より低くなっている。どのようなものの蓋として使用されるのか不明である。

b aの嘴状に下降した部分が退化した形態をとるもので、小破片が多く図示したものは最も適切な例とは言い難いが(3・5・11)などがこれに属する。極端な例では口縁端に特別な変化をつけずにただ垂直に切った形態のものまである。この形態の口縁をもつ蓋の占める割合は全体的にみればそれほど多いものではない。

碗 (14~16)

口縁部から高台部分まで連続してその形を知り得る資料は(16)のみで、他は部分的に若干の差異を示すにすぎない。口径は13~16cm前後で、体部はほとんど彎曲することなく斜上方にのび口縁端は丸くおさめるものと、上面がややフラットになるものがある。底部から体部への転換部、あるいは高台の形態など詳細に観察すれば(14)と(16)ではこまかい違いがみとめられる。工人の違いによるものかも知れない。底部は高台付着前に丁寧に回転ヘラ削りの再調整を行っており、粗い切り離し痕はみられない。

坏 (17~19)

口径13~16cm前後をはかり、今すべて底部を欠損しているが丸底に近い形態をとるのであろう。(17)では底部から体部へ屈曲する様子が明らかであるが、他の二例では底部から体部のカーブが連続しており、また整形手法においてもロクロ上でひき上げてゆく際に器面に対する左右の圧力の不均衡によって生じた凸凹を再調整していないなどの違いがみられる。口縁部の形態では、(17・18)がやや外彎気味に丸く仕上げているのに対し(19)では短く直立させた形となっている。

皿 (20~23)

形態的には若干深いかとも思われるがここでは一応皿として取扱うこととする。口径は13~17cm前後で一定していない。形態的には、坏の場合のような大きな差はみとめられず比較的仕上げのよい作りである。また底部に回転切り離しの痕跡を有するものはみられず、ナデを行なったものとヘラによって各方向に丁寧に削ったものがある。

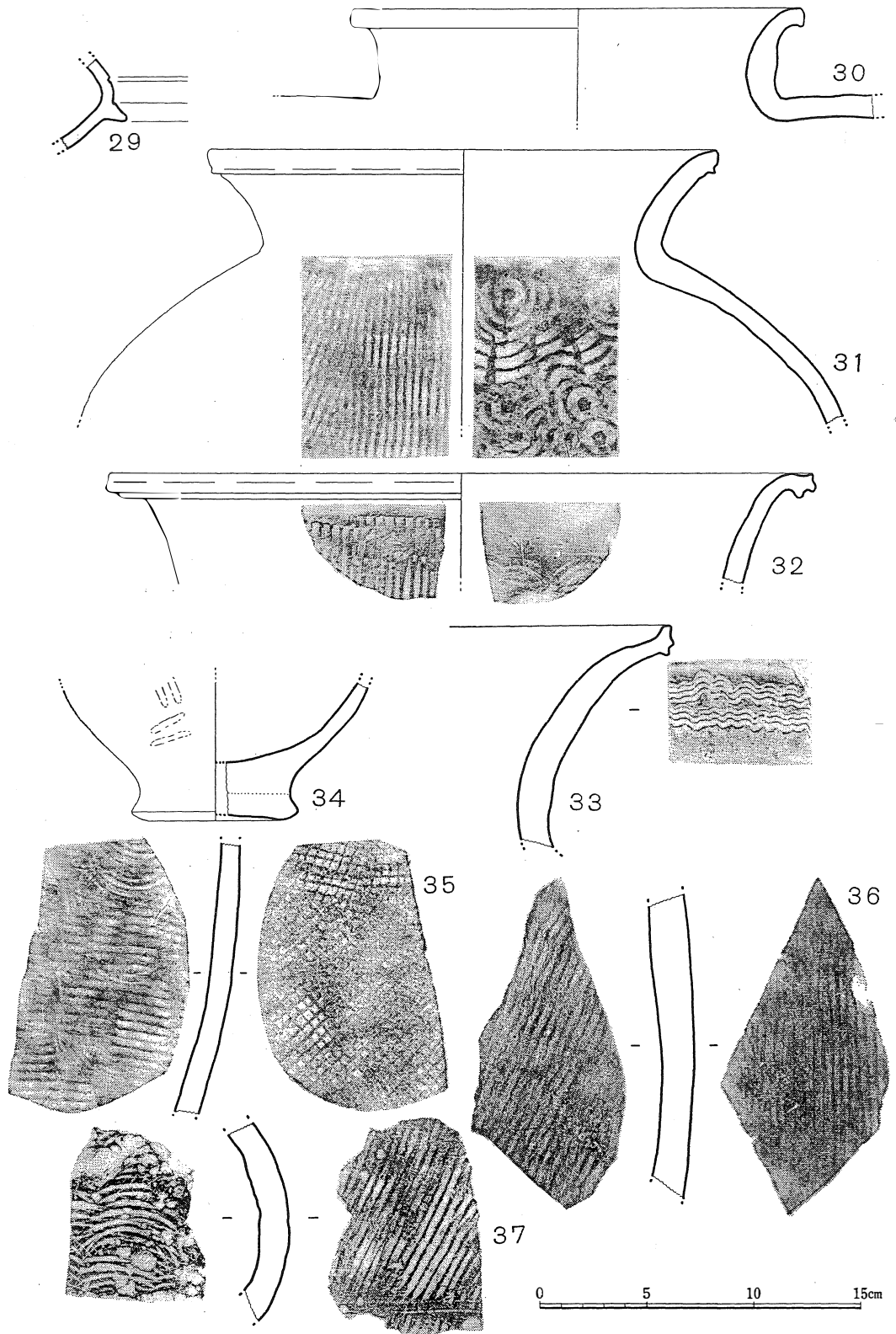
高坏 (25・26)

口径23cmをはかる大形で浅い坏部をもつ高坏でいま底部及び脚部にあたる資料を欠くため完形については知り得ない。坏部の屈曲部では鈍い稜がつく。底部の厚みは著しい。(26)は脚で、坏部の形態は不明であるが(25)とは異なった形のものになることが予想される。やや薄手で脚端において1cmほど水平にひきのばして安定をよくしている。

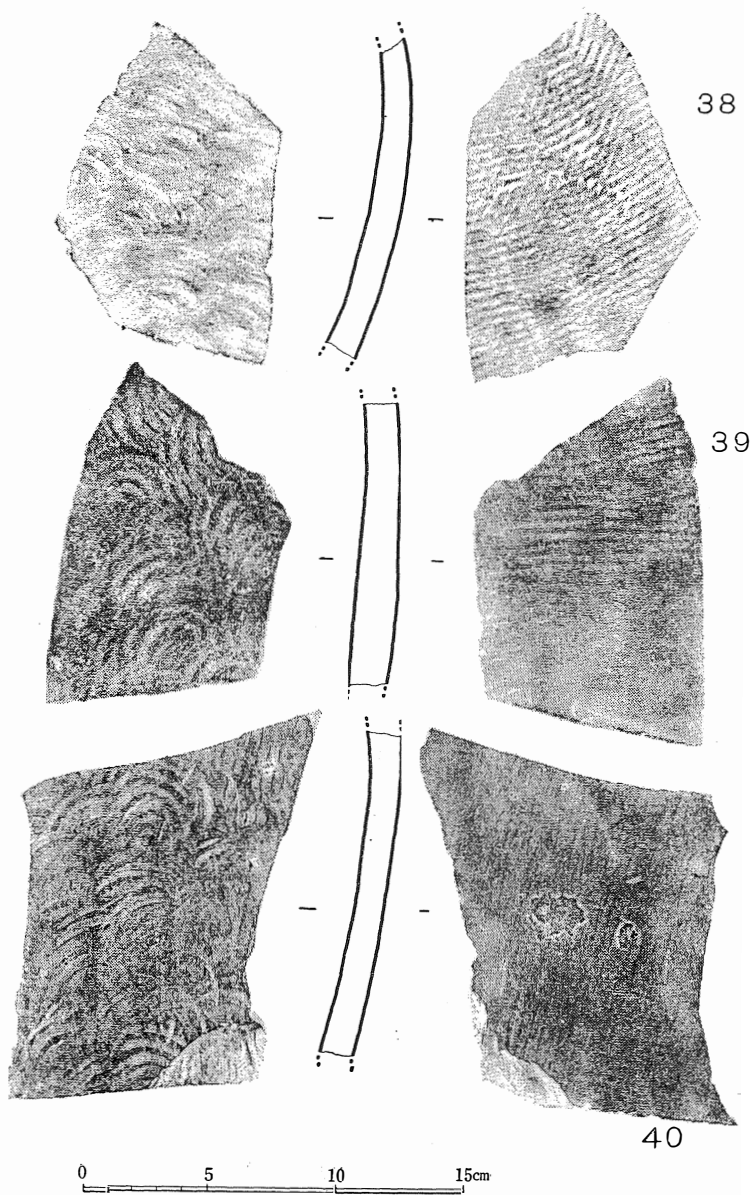
(24・27)についてはどのような器形となるか明らかにすることができない。

壺 (28・29)

(28)は口径約12cmで、外彎した短い口頸部を有する。体部は厚めの作りで、内外面とも叩きの痕跡は残っていない。内部はよこなでが行なわれている。色調はアズキアン色で若干の砂粒を含んでいる。(29)は壺の胴部付近につけられた突帯部破片で、おそらく肩のあたりになると思われる突帯の貼付された位置で大きくカーブを変えている。突帯上部に沈線を有するものもないものがある。内面の状態からみて土器製作段階で突帯部分で粘土をついだことが明らかである。突帯部分での復原



第 6 図 管ノ谷第 1 号窯跡出土須恵器実測図および拓影



第 7 図 管ノ谷第 1 号窯跡出土須恵器拓影

径は約 27 cm である。

甕 (30~33)

大・小二種類あって、口径 30 cm 以上のものは口頸部が長くのび通常櫛描波状文などの施文が行なわれる。口縁部にほどこされた突帯も頑丈でやや装飾的である。(33)は口径 42 cm の大甕で頸部に二段の波状文がめぐっている。(32)は口径約 33 cm の甕であるが頸部にも叩きが行なわれている。外面は縦方向の並行条線叩きで内面は同心円叩きと思われる。

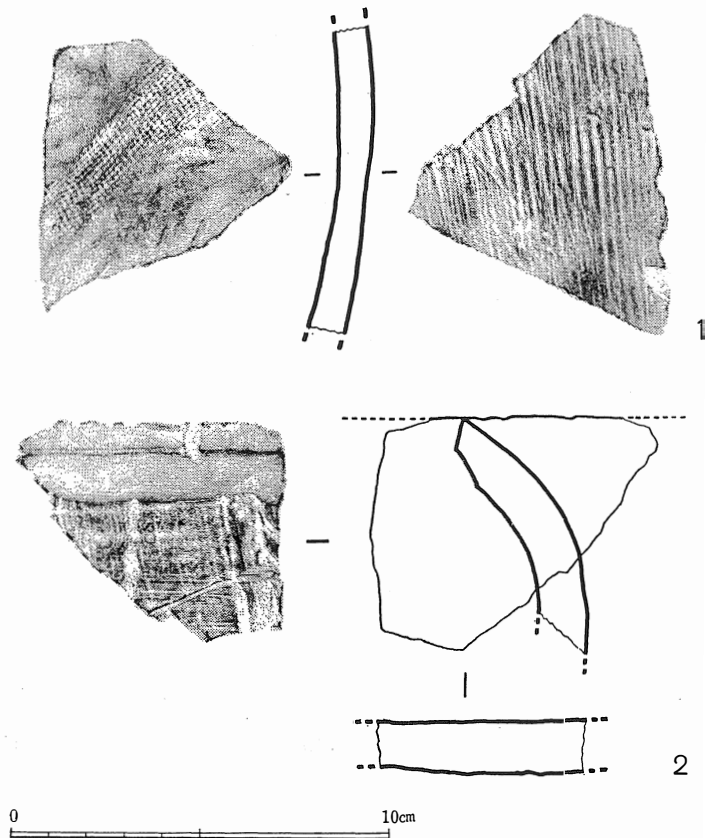
甕内外面にほどこされた種々の叩きについてはその代表的なものを図に示した(35~40)。量的な

割合からみると、外面には(31・37・38)にみるような並行状痕、内面には同心円の叩き痕を残すものが多い。また数は少ないが格子目叩きをほどこした甕(35)もある。この甕の場合、内面には同心円叩きの上からさらに巾の広い刷毛状の器具によって調整している。これと同様の手法は(38)でも用いられており(40)にも一部行なわれている。この手法は内面だけでなく外面でもみることができる(36・39・40)。このように器の表面を再調整して平滑に仕上げようとする傾向は、同じ甕内側に行なわれた同心円叩きにしても比較的浅く打たれたものが多いこととも相通ずる。なお(36・39)などは黄灰色を呈する焼成の悪いもので発掘調査当時瓦の疑いをもたせるものであったが確証はない。その他内面に布痕を有する甕片が発見された(第8図1)。小片であるため布痕の占める範囲を明らかにすることはできないが、くぼんだ部分に細長く帯状に残っておりやや高い部分には浅い同心円叩きの痕跡がある。しかしよくみると叩きのほどこされた部分にもかすかに変形した布目が観察され、この布痕が叩きをほどこす前についたことを示している。

(34)は灰原での採集資料である。黄褐色を呈し胎土に砂粒を含んでおり、体部には並行した叩きらしきものの痕跡がみとめられる。底部は貼りつけてくぼみをもっている。使用時期は明らかでない。

瓦(第8図2)

遺物整理の段階で発見されたもので、裏についた布の痕跡およびへら切りの跡から瓦と断定できる

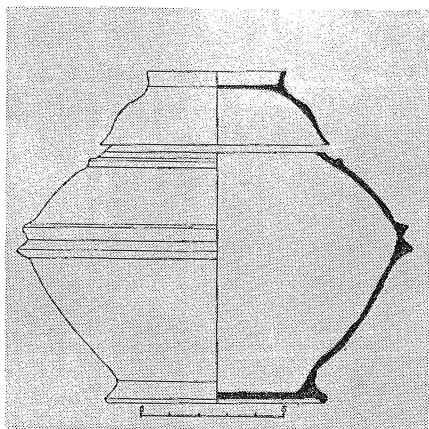


第8図 管ノ谷第1号窯跡出土布痕土器および瓦拓影

唯一の資料である。小部分ではあるがカーブからみて丸瓦と思われる。周縁は二回のヘラ切りによって面取りされている。外面は縦方向のナデ、内面はややこまかい布目が残るが同じく縦方向の擦痕が著しい。灰色を呈し胎土に砂粒を含まず堅緻な焼成である。

(4) 結 語

管ノ谷第1号窯はこれまでに調査された八女古窯跡群の中では須恵器の型式上より最も新しい時期に位置づけられ、しかもあわせて瓦の生産も行なっている点で注目すべき窯跡であった。窯構造上からみると、全長・巾ともに小規模な経営を思わせるものである。全長に対する床面傾斜の割合は、本窯と同じく瓦をも生産した牛焼谷窯跡の場合、全長5.4mに対し勾配は40°前後をはかる急傾斜の床をもっていた¹⁾。これに比べると本窯では長さの上ではほとんど変わらないにもかかわらず床面傾斜は22°とゆるやかである。第Ⅲ型式に属する須恵器を生産した塚ノ谷第4号窯では床面傾斜は同じく22°であったが窯の全長15mにもおよぶ長大なものであった²⁾。もちろんこれら数字上の比較のみでは製陶に必要な温度をうるための床面傾斜と全長の関係を云々することは不可能であり、そこには地形上の制約とりわけ風向きおよび風の強弱などによって大きく左右されるであろうことは言うまでもない。また煙道の構造の違いにも関係してくるであろう。しかしそれらを勘案した上でも、八女古窯跡群においてみる限りでは、窯構築に際して踏襲されてきたことを認めうるような一定の約束のようなものが存在したとは考えられない。



第9図 熊本県城南町阿高出土の蔵骨器
「古代文化」3-6より

またくり抜き式の窖窯であるにもかかわらず前庭部に凹み穴をもっていたことは、凹み穴の用途についてさらに新しい問題を示した。

次に遺物については、結論的には奈良時代後半期に属する須恵器を生産したと考えている。「調査報告書Ⅰ」で第Ⅵ型式須恵器の壺蓋に現われた変遷をみると本窯跡出土の遺物の示す特徴はそれらをまったく含まず新しい時期であることは明瞭である。また八女地方では奈良・平安時代窯跡の調査例はないが、豊前地方で調査されたものでは瓦塔を伴い奈良末平安に位置づけられるトギバ窯跡³⁾がある。その資料との比較検討からトギバ窯跡の須恵器のもつ諸特徴よりやや古い様

相をもつとの結論に達したのであった。蓋口縁部にみる形態も垂直に短かく下降しいわゆる鳥の嘴状を呈するものから次第に崩れてゆく状態をみることができる。つまみの形の上でもその傾向はあらわれている。すなわち扁平なボタン状のつまみに混って中央部が非常に突出した形態のものが出現している。また高坏でも古墳時代の形制を引くような形態のものはなくかわって浅く大きな坏部をもつ高坏がつけられる。これらの新しい傾向の他に注目すべきは、胴部に凸帯のある壺の出土である。小片であるためその全形を明らかにし得ないのが残念であるが、他に出土例を探すならば熊本県下益城郡城南町阿高出土の蔵骨器に近い形態をとるものと思われる。その蔵骨器は平安時代と考えられてお

り、これと類似した本窯跡の遺物は本窯跡で生産した須恵器のなかでも最も平安時代的な要素を示す資料と言えよう。またこの窯では塀生産に対して従来知られているような重ね焼きの技法をとり入れておらず蓋と身を通常の形で重ねて1セットずつ焼いている事実が知られた。

このように本窯跡は前回までの調査で欠けていた奈良時代以後の須恵器について新しい知見を得ることができた点でその意義は大きい。

(真野和夫)

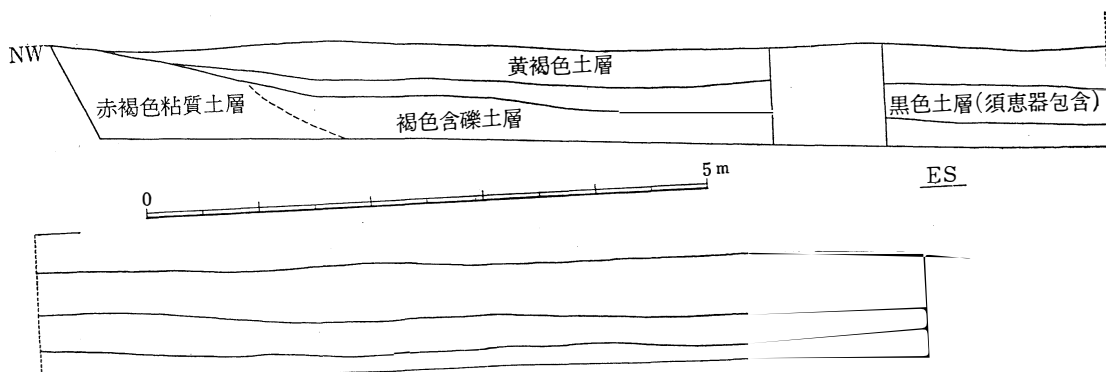
註 (1) 「調査報告書 I」

(2) 報告書未刊 北九州市小倉区トギバ、日本考古学協会生産技術委員会窯業部会調査、資料は九州大学考古学研究室保管

(3) 小林麟也「骨製竈副葬の蔵骨器について」 古代文化 3-36・1959
三島 格

第 3 章 塚ノ谷窯跡地区凹地の調査

昭和43年度に調査した塚ノ谷第1号窯、及び第2号窯の立地するところは、清尾池のある南方に開け、三方斜面で囲まれたすり鉢状の特異な地形をなしている。両窯跡ともこの斜面の上方に位置し、すり鉢状凹地にむかって開口しているので、遺物の若干はこの凹地に流出し堆積しているであろうことは容易に推察できたが、その特異な地形から生産活動に関連するなんらかの遺構が在るのではないかという懸念がもたれていた。そこでこの部分にトレンチを設定してこの問題を解決しておくこととした。ここでは凹地の中央部に巾1mのNW-ES(長さ17.3m), SW-NE(13.1m)の直交するトレンチを設定して発掘にかかった。NW-ESトレンチでは地表から30cmくらいまで黄褐色の新しい堆積土があり、その下に約30cmの厚みの黒色土層があらわれ、須恵器片が包含されていた。その下部は赤褐色粘質土から褐色含礫土層への漸移状態を示していて、地山の構造を示しているものと思われ、この状態は地表下1mに及ぶも変化ないところであった。北側は第1号窯跡のある斜面につながり、南は清尾池に開いて下る地形のためか、トレンチのNW側では黒色土層、地山層は次第に上り、須恵器片を含む黒色土層は消えてゆき、地形にしたがった上方からの流入堆積の状況を示している。ES側ではほぼ地形の傾斜にしたがって各層の層序がみられた。

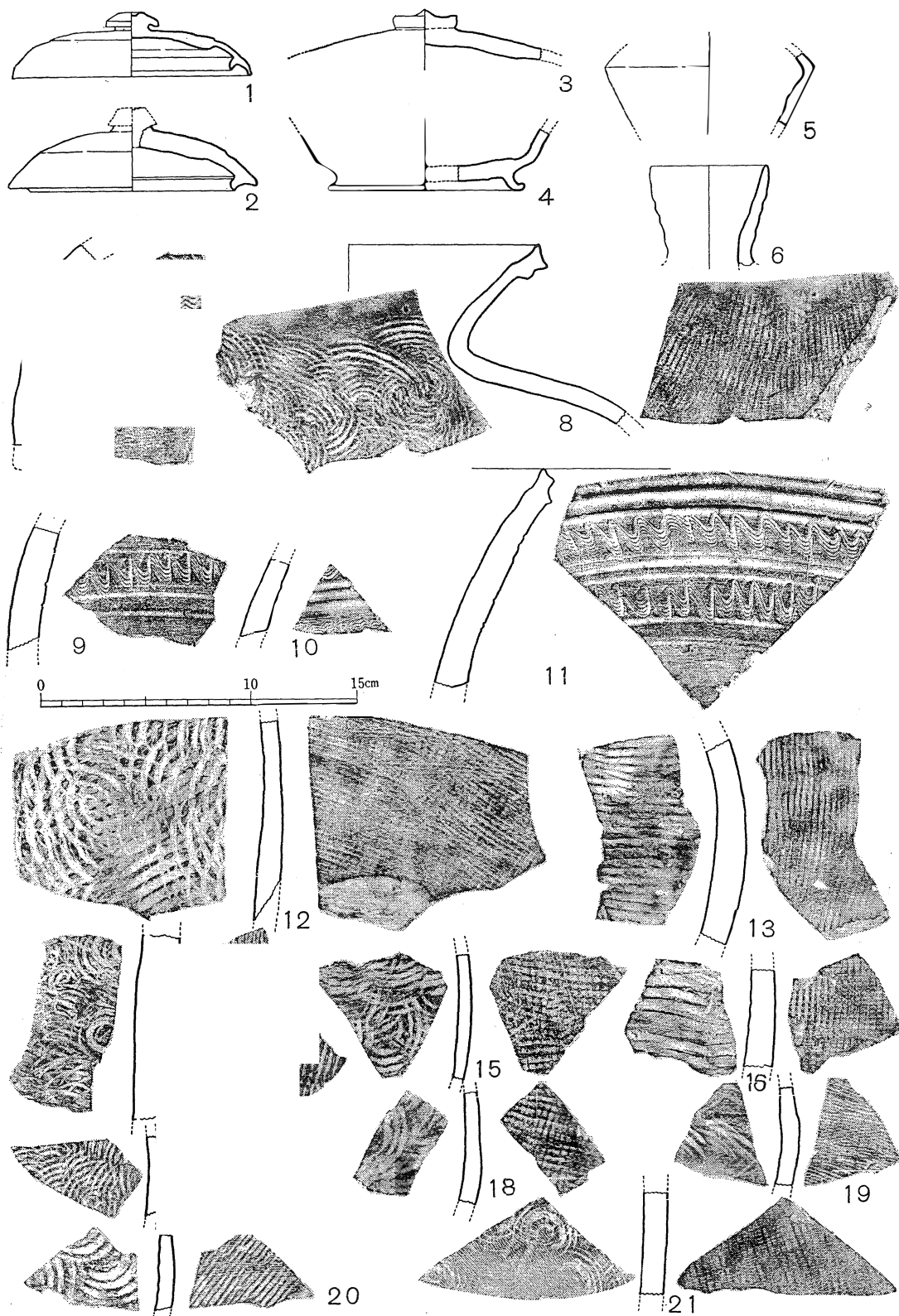


第 10 図 塚ノ谷凹地NW-ESトレンチ土層実測図

またSW-NEトレンチでも同様な層序がみられたが、西側及び第2号窯跡のある東側斜面につらなるためか、トレンチの両端では黒土層及び地山層が上方に上ってゆき、黒土層は消えてゆくのがみられる。ここでも地形にしたがった須恵器を含む黒色土の自然流入堆積の状態を確かめることができた。この凹地に発見された須恵器はすべて上方斜面に在る第1号窯及び第2号窯の灰原に属するものの流入であることは明らかである。

かくして、この凹地には当初から遺構が存在しなかったことが確認されたのである。以下発見遺物についてまとめておく。

坏の蓋(第11図1・2) 口径11~12cmのつまみと身受けを有する坏の蓋。黒鼠色、鼠色を呈し、上面にはつまみをめぐって同心円状のかき目(1)、篋削り(2)がみられる。身受けの内側が口



第 11 図 塚ノ谷凹地トレンチ出土須恵器実測図・拓影

縁より外につきだすもの(2)と退化したもの(1)の二種がある。ともに第1号窯の製品で、第V様式にあたる。

蓋と椀(第11図3・4) 扁平なつまみをもつ蓋で椀にともなうものである。椀は高台径9.4cmで腰のはった形態である。高台の末端が鎌状に屈曲して外側にはり出している。第VI様式に属し、第2号窯の製品である。

壺(第11図5) 肩部に稜をつくって屈曲する部分がある。その部分での復原径10cmで灰鼠色を呈する。第VI様式とみられる。

平瓶(第11図6) 平瓶の口にあたる部分が発見された。口径5.7cmで外開きを呈する通有の形態である。第1号窯から類品の発見があるので第V様式に属するとみてよからう。

大形壺・甕(第11図7~21) 口辺部(7~11)には肩部が急にしまって短頸がつくもの(8)と、頸が長く徐々に外反するもの(7・9~11)がある。前者は頸部が無文であるが、後者は頸部に二段以上の櫛目波状文が施されている。胴部の破片(12~21)にはたたき目文様、整形手法に種々ある。ここにはその各種類を選択して示している。これらの壺、甕類について第V様式と第VI様式を区分することはむづかしい。

(小田 富士雄)

第4章 塚ノ谷・釘崎・童男山古墳の調査

I 塚ノ谷古墳

〔所在地〕八女市忠見区大字本字塚ノ谷1971の1番地

古墳の現状 (図版第一)

塚ノ谷第4号窯跡のある清尾池にのぞんだ東斜面水田近くに開口した小円墳がある。このあたりは北から、東からも山麓が迫って狭長な低湿地が形成され、これらの谷を湧水源として清尾池がつけられている。この谷間の低湿地は水田化して谷田を形成している。塚ノ谷古墳は塚ノ谷側から東にはり出した山麓の屈曲するところにあたり、標高90mのあたりを占めている。塚ノ谷第4号窯跡はこれよりさらに20mばかり高所に位置している。二室から成る小形の横口式石室で、前室の天井が持ちさられたために、後室の天井に近い部分が開口し、出入できるようになっている。開口の時期については古老達の話をも総合してみると少くとも明治時代以前にさかのぼるようである。この谷間にはほかに古墳の発見がない。調査当初には横口式単室石室の予想であったが、発掘をすすめるにつれて、二室構成であることが明らかとなり、羨道部には閉塞された石積み状態が当初のまま露出されるにいたった。本古墳は山麓近くの斜面を利用してつくられている小円墳であるためか、石室は地表下深くに営造され、封土は地上わずかに盛りあげる程度でこと足りたようである。 (黒野 肇)

石室の構造 (図版第一四～一七)

石室は塚ノ谷東斜面の麓近く、等高線に平行して構築された二室構成の横口式石室である。石室の主軸はN2°Wで、ほとんど南北方向をとり、南に開口する。石室の全長5.6mである。羨道、前室、後室から成り、各々の境界には左右に袖石を立て、闕石をおいて区分している。用材は近傍に多い結晶片岩である。後室は古くから開口して出入しているために床面は攪乱されているが、前室より多少高かったと思われる。各室の大きさをまとめて示せば下表のようになる (単位・cm)。

	長さ	巾	高さ
後室	2.28	1.9	2.0
前室	1.34	1.55	1.5(+)
羨道	1.48	1.0	0.8

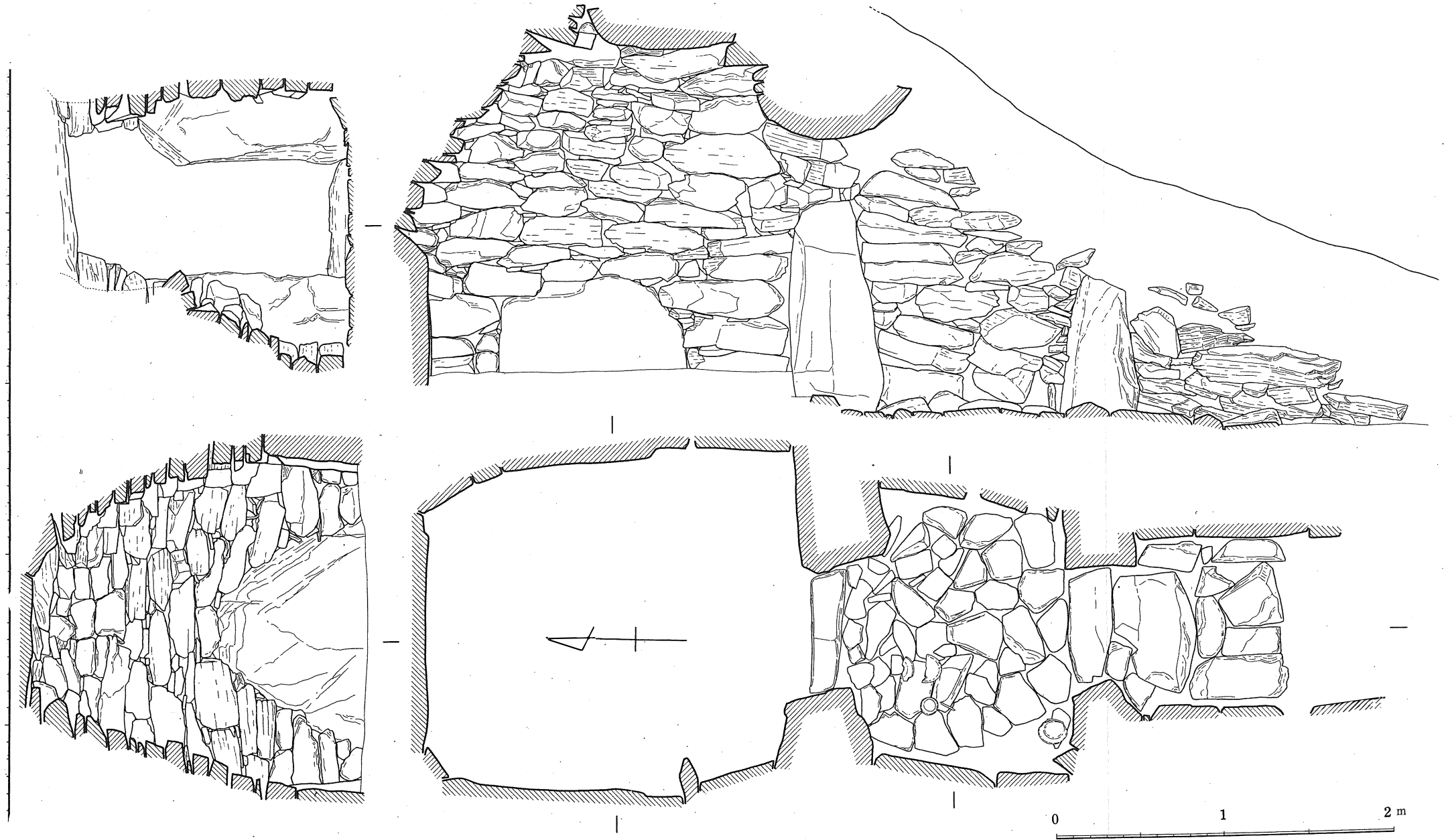
後室は奥壁と左右両壁に巾1.3m前後の三角形の腰石を立てているが、高さも1m以下のものであるから、巾も高さも後室の一壁面を埋めるにははるかに不足する大きさである。そのために腰石と腰石の間隙を埋めるに扁平に近い小割石を平積みして構築してい

る。したがって腰石の間をつなぐ割石は石室平面の隅を丸くするように配され、次に上方に積みあげてゆくにつれて空間を円くしながら、壁面を迫出させて空間をせばめながら天井を高くして、断面形がドーム状の構造に仕上げられてゆく。天井は一枚石をのせて塞ぎ、天井面の広さは1m平方くらいになる。周囲に平積みされた割石は輪積み状に段積みされ、下段の石の接触面の上には上段積石の中央面がのるような、言いかえれば壁石の上下方向目路がデグザグになるような煉瓦積技法の原理がみ

たりは
つくら
にはり
これよ
持ちさ
ついで
ほかに
、二室
にいた
深くに
肇)

石室の
前室、
多い結
り多少

形状の
あるか
らかに不
の間隙を
してい
貴みあげ
断面形
方くらい
黄石の中
原理がみ



第12図 塚ノ谷古墳石室実測図

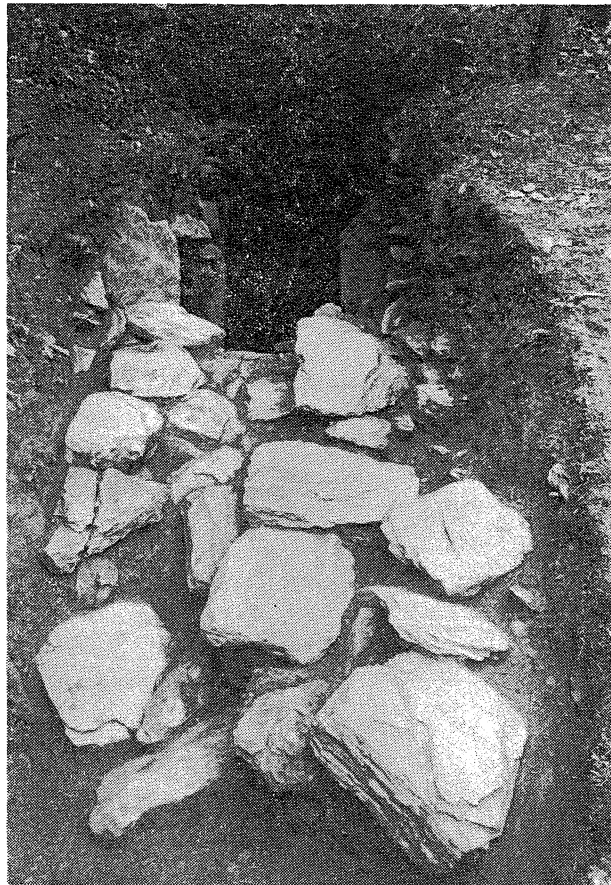
られる。このような構築技法は必然的に石室平面を正方形か円形に近いものに規定している。このような石室形態は、横口式石室の古式のものに多く、また、筑後地方に多いいわゆる“三味線胴張り”的な平面形とも関連している。

次に前室では天井石が持ちさらされているが、腰石の使用はなく、最下段から割石を平積みする技法がとられている。横断面にみる壁面の立上りは西壁側が山側に接しているために腹圧をうけて内側に押し出されて変形しているものの、本来は東壁側にもるように直線的な立上りを示していたものと思われる。したがって横断面形は長方形か梯形の形態をとることとなる。平面形は長さよりも左右巾の広い長方形であることも複室構造の石室では古式のものに屢々みられることと照して注意される。床面には敷石が全面に整然と敷かれている。

羨道部は前室にくらべると、壁面の石積みもやや粗雑である。両壁はほぼ平行に設計され、前室から約1mくらいのあたりまで床石が敷いてある。壁面の石積みは羨道の末端にむかって次第に減省されてゆく。このような構造からみて羨道部には本来天井石の構架はなかったと思われる。

以上のように後室、前室の構造に顕著にみられた特徴は、北九州地域では6世紀中頃までの横口式石室に多くみられるところであり、それ以降には姿を消してゆく傾向にある。したがって石室の構築技法に主眼をおいて本古墳の年代を求めるならば、6世紀中頃かそれをすぎる頃に比定できるであろう。

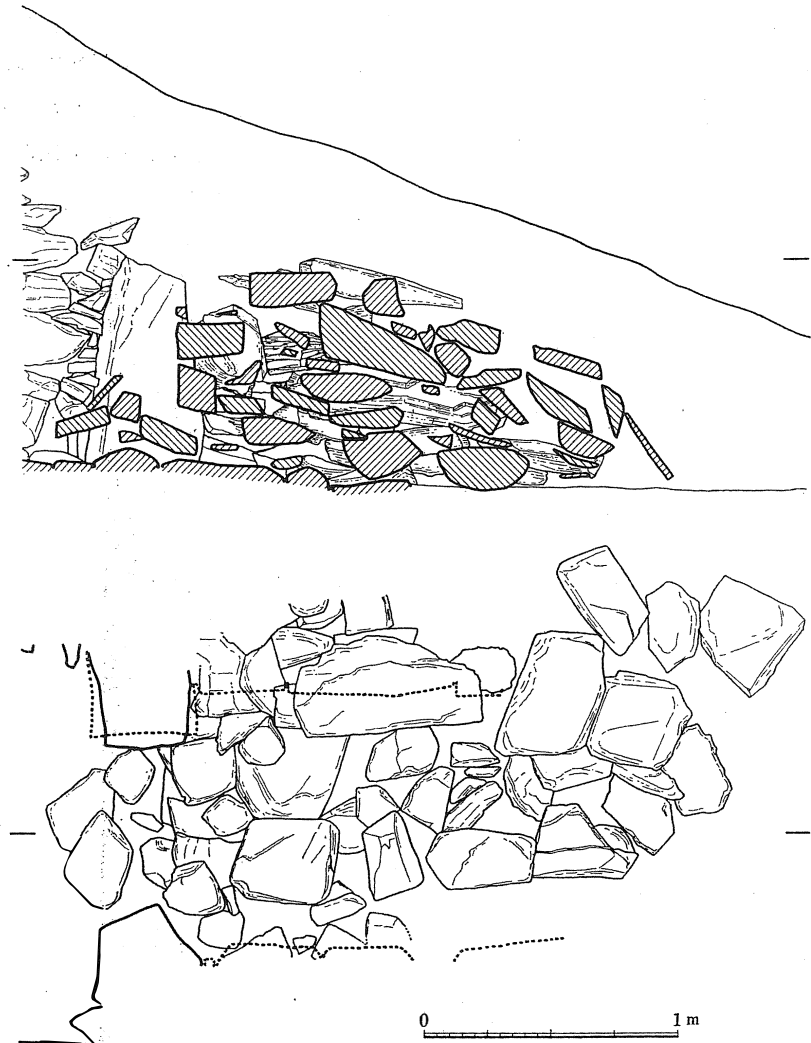
(小田 富士雄)



第13図 塚ノ谷古墳閉塞状況

羨道部の閉塞状状 (図版第一四・一五)

羨道部は地表から 30~40 cm くらい掘り下げると、一面に割石をならべて敷いたような状況があらわれ、この状況は前室入口の両側袖石のところまで続いていた。このような割石を積みかさねて羨道部を閉塞した状態は前室入口から羨道全部をふさいで 2 m 余に及んでいる。その積石の高さも 80 cm となって前室袖石の上面にまで及んでいるので、前室入口の天井石にまで達していたはずである。割石を平積みし、間隙を土砂で埋めていて、特に秩序だてた積み重ねの状態ではない。ただ土砂をのぞいてゆく段階で、羨道西壁側が約 20 cm 巾で閉塞石がみられず、土砂で埋められていたのは注意をひいた。後述する如く、追葬の事実が確かめられたので、おそらく追葬時に閉塞石全部を除いて出入したのではなく、西側の羨道壁ぞいの部分を除いて通路にした結果ではなかったかと思われる。



第 14 図 塚ノ谷古墳羨道閉塞状態実測図

遺物の出土状態 (図版第一八)

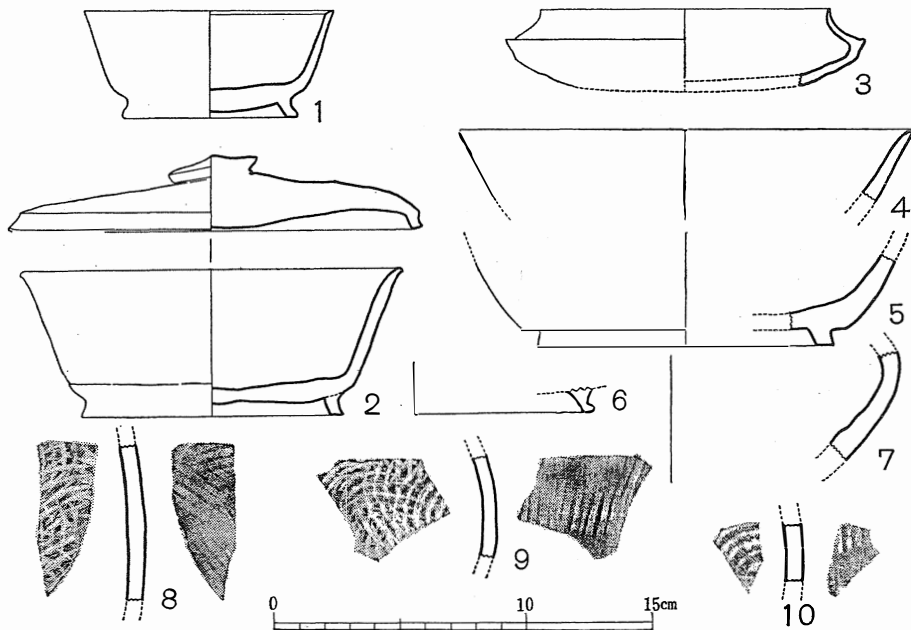
後室はすでに古くから攪乱されているので遺物の残存は望めなかったが、前室では発掘のすすむにつれて天井や壁面に使用された石材が落下した状態がみられたので、未掘の期待がもたれた。床面にいたって西壁寄りに須恵器、刀子の発見があった。須恵器は小形の碗一個が安置状態で発見され、その傍に刀子一個と須恵器蓋一個分があった。蓋は大形品で、二つに割れてそれぞれ表裏をみせた状態であった。これとセットをなすと思われる須恵器の大形碗一個が、入口西側の袖石に接して床面よりもやや高い位置に斜めにすわった状態で発見された。明らかに移動した状態である。おそらく当初には小形碗のあたりに蓋をともなすてすえられていたのであろうが、落石などの衝撃をうけて蓋は割れ、碗は西側袖石のところまでとばされたものであろう。

次に羨道部の閉塞石をのぞいてゆく過程で、積み石の間から須恵器の坏・碗・壺・甕などの小破片合計24点が検出された。いずれも小破片であるが、なかに前室の遺物よりもはるかに古期のものが含まれていて、これらの小破片が初葬時のものであり、追葬時に持ち出されて処理されたことを推察するに十分である。またこれら小破片がいずれも羨道部の西側寄りに発見されたことは、この部分が追葬時における通路であろうと考えられた前項に述べた閉塞石の状況とあわせて符合するであろう。

(黒野 肇)

遺物 (図版第一九)

- 前室の遺物 須恵器小形碗 1
 須恵器大形有蓋碗 1

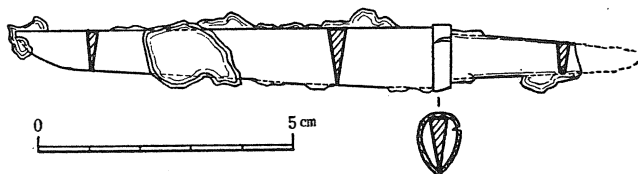


第 15 図 塚ノ谷古墳出土須恵器実測図・拓影
 (1・2 前室発見、3~10 羨道部発見)

刀子	1
羨道の遺物 須恵器坏身破片	1
須恵器碗破片	9
須恵器壺破片	1
須恵器甕破片	13

前室の遺物のうち、小形碗（第15図1）は口径 9.9 cm、高さ 4.2 cm で付高台ある器形である。灰鼠色、胎土良質、堅緻な焼成品である。底部やや厚く、直線的に立上る器壁は上方にうすく仕上げられ、口唇部は内側が斜めにけずられた形成である。高台の接合部が凹められているために高台の末端が外方に張り出す結果となった。

大形有蓋碗（第15図2）は、小形碗にくらべて製作ややおとるが、碗の口径 15.1 cm、高さ 5.8 cm、黒色の堅緻な焼成である。器壁の厚みはほぼ均一で、立上りはわずかに外反気味、口唇は丸く仕上げている。高台もやや外反している。蓋は口径 16.4 cm、高さ 3 cm で、焼き歪みが著しい。中心部は製作時に内包されていた空気が過熱して膨張したために表面がふくれあがっている。中心に径 3.6 cm の扁平な撮みがつき、口縁はほぼ垂直に屈曲して高さ 7 mm に及び、7世紀代の蓋の特徴を示している。



第16図 塚ノ谷古墳出土刀子実測図

刀子（第16図）は茎の先端が欠損していて、現存長 11.2 cm、復原すれば 12.5 cm ほどになる。身長 8.2 cm、身巾 1 cm で先端に細くなる。関部に巾 4 mm の鉄釧が巻いてある。

羨道の遺物はすべて須恵器の小破片であるが、最も古期に属する有蓋坏の身（第15図3）が先ず注目される。復原口径 11.5 cm、復原高 3.2 cm、灰鼠色を呈する堅緻な焼成で、蓋受けは一度内反して真直立上る特徴をもっており、坏部も浅く扁平に近い。須恵器編年上の第Ⅲ—B期に比定される。

碗の破片には口縁部で接合できるもの二片（第15図4）（復原口径 18 cm）、底部で接合できるもの三片がある（第15図5）。やや厚手、灰白色を呈し、付高台がある。高台の形態に二種あり、断面「コ」字形のもの（第15図5）と、末端が外側に張りだして断面鎌状のもの（第15図6）がある。高台径で復原して前者は 11.7 cm、後者は 14.2 cm といずれも大形品である。口縁部破片は厚手であるところから前者と同一個体になる公算が大きいであろう。

壺の破片（第15図7）は黄灰色、軟質であるが、胴部の屈曲部分があり、最大腹径 18 cm ほどになる。

甕の破片（第15図8～10）はすべて同一個体と思われるが、表面黒色、内面灰白色を呈し、表面に平行線叩文、内側に青海波叩文がある。

小 結

本古墳の年代については、はじめ石室構造上からは6世紀中頃前後と推定されたが、前室の出土須恵器からは7世紀後半代に比定される須恵器編年の第VI期に位置づけられることとなって¹⁾、両者の間に著しいへだたりを生ずることとなった。そこで、一つはこの地方で石室構築技法が古式の伝統を7世紀代まで保ちつづけたとみるか、或いは二つには石室の構築技術からみた年代観が上限を示すもので、前室の須恵器の年代が追葬による古墳の下限を示すものとみるかという二つの場合を想定した。もし前者の場合であるならば、この地方の特殊性としてしまうほかに、これまで考えてきている石室構築技法による年代観はその基礎を失うことになり、八女古墳群全体の編年観を大きく狂わせるという重要な問題を含んでいて、影響するところ甚大である。また後者にいたっては初葬を証明する遺物なく、推察の域を出ないものであった。ところが調査の終盤にいたって閉塞石をのぞくにつれて第三—B期須恵器の特徴を備えた坏身の一小破片が発見されて、ついに後者の考え方を証明する確実な資料を加えるにいたった。この一小破片はその意味できわめて重要な地位を占めたというべきであろう。したがって石室築造技法から推定した石室の上限年代は遺物の方面からも支持できることとなり、ひいては筆者らが現在すすめている構築技法からする石室の編年観を改めて支持することにもなって、今後この作業を完成させる上に大きな自信を得ることとなった。かくして前室に副葬された須恵器は第六—C期の特徴を示して、7世紀後半代に古墳の下限を求めようという結果を導くのである²⁾。

さらに本古墳の須恵器を検討してみると、第三—B期坏身は塚ノ谷第4号窯跡に、また第六—C期大形有蓋椀は塚ノ谷第2号窯跡にそれぞれ類品を求めることができ、その供給源窯跡も明らかにすることができた。調査以前にも推察していた如く、本古墳はこの谷間における唯一の古墳である点でもこの地の窯業生産者集団と何らかの関係を有するものであり、いまや塚ノ谷窯業生産集団の指導的地位にある人の奥津城に比定されるであろうことも現実性を具備するにいたったというべきであろう。

(小田 富士雄)

註 (1) 当地方の須恵器編年については「調査報告Ⅰ」の第5章Ⅱ及び同書別添付図「八女古窯跡群須恵器編年図」参照。

(2) 本古墳と同様なケースとして1969年5月、大牟田市教委主催のもとに久賀愛策氏や県教委文化課技官によって行なわれた大牟田市久福木・庵ノ浦第2号古墳がある。すなわち石室の構造は須恵器Ⅲ期相当期に構築されたと思われる特徴を備えており、前室からは第四期B及びC式相当の有蓋椀を出土している。おそらく初葬遺物は追葬時に搬出されたとみるべきであろう。この古墳の概要については県教委文化課宮小路賀宏、前川威洋両氏に聞くことができ、また実測図を検討する便宜を与えられた。謝意を表する。

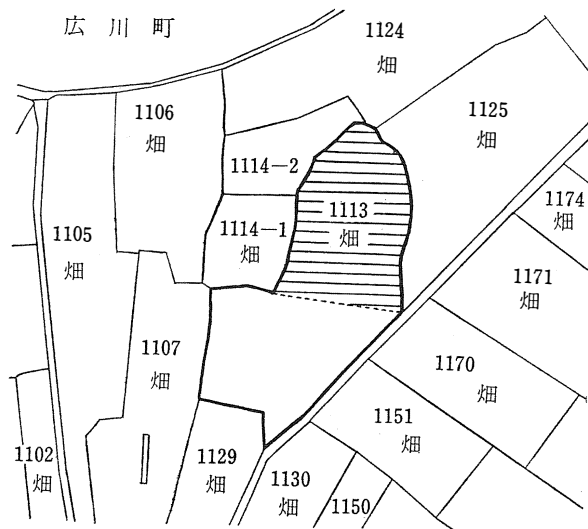
Ⅱ 釘崎第3号古墳

〔所在地〕八女市大字豊福字久保1113番地

遺跡の現状

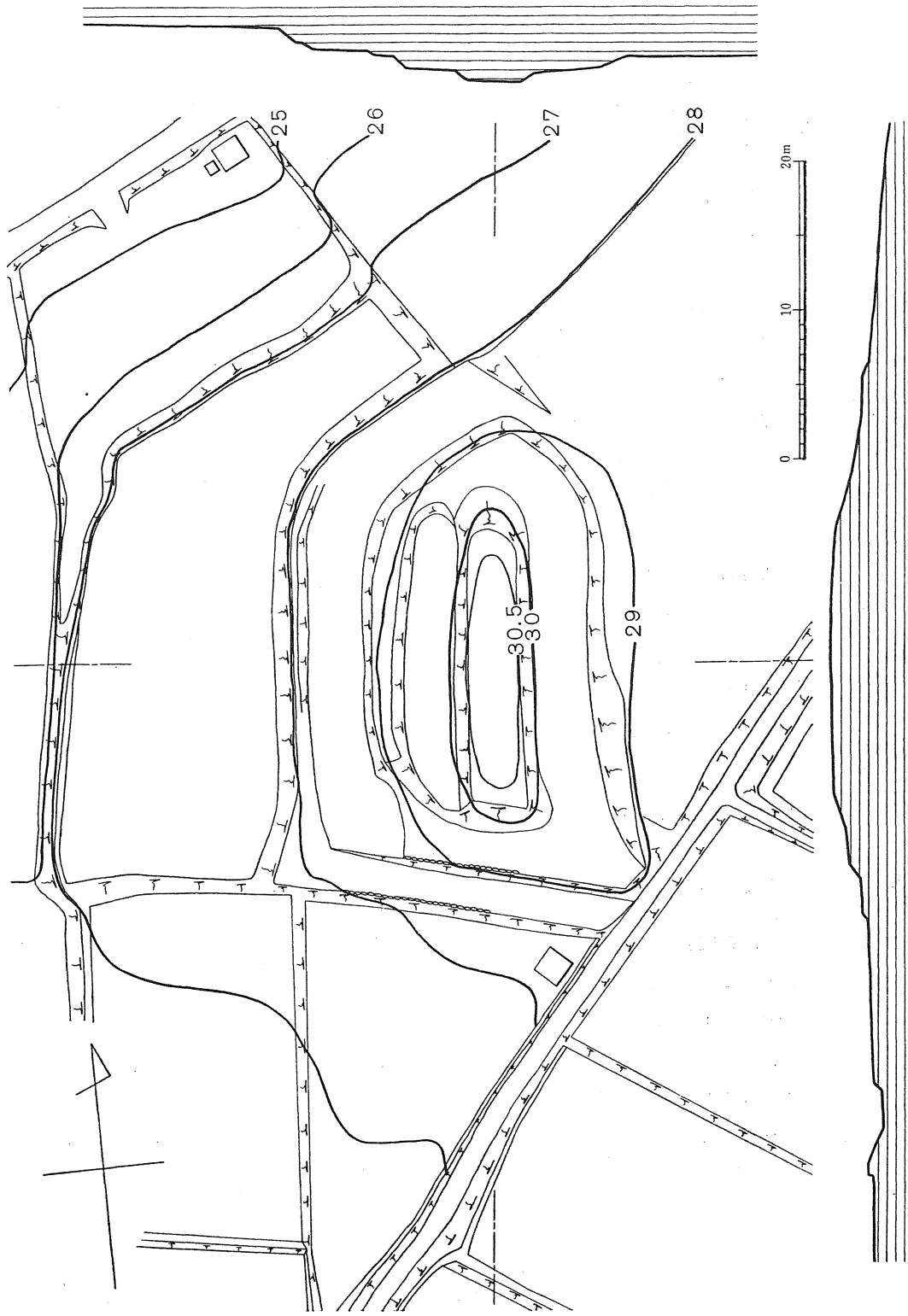
東西数軒に及ぶ八女丘陵上に点在する八女古墳群は八女市域だけでも10グループに分けられる。な

かでも豊福地区には三基の前方後円墳を含んで最も古墳群が密集して豊福古墳群を構成している（調査報告Ⅰの巻首地図参照）。広川町と八女市の行政境界はこの八女丘陵の尾根から北寄りを通り、八女古墳群の大部分は八女市域に編入されている。釘崎第3号古墳はこの丘陵上のほとんど広川町との境界近くにある前方後円墳で、前方部を南に向けている¹⁾。現在茶畠と化しているが、1970年3月までは畑地内にあってやや小高い墳丘の土盛りがみられたのであった。すでに早くから削平されていて、すでに発掘されて石室も残っていないのではないかと考えられるような状態であった。したがって一見しては南北方向をとる前方後円墳であるが、前方部方向は或いは北といわれ、或いは南といわれた。1970年3月、これが削平の計画おこり、土地所有者はブルドーザーを入れるにあたって八女市教委に連絡をとったが、手違いを生じて市教委側に達しないうちに作業が行なわれて、意外にも石室があらわれ、崩壊してしまった。市教委より急行したときにはすでに作業終了後のことであり、遺物だけが蒐集保管されているという有様で如何ともなしがたい状態であった。聞きこみによると、石室は後円部西側に開口する横口式単室であったようである。市教委に帰せられた遺物はかなりの量にのぼり、なかに注目すべき遺物も含まれていたところから、改めて整理調査を行なうこととなったのである。



第17図 釘崎第3号古墳付近地籍図

地籍図を検すると、畑地として登録されているが、明らかに前方部を南にむけた前方後円墳の輪郭が地籍境を形成している。また、幸いにも昭和36年度から実施された県教委を主体とする遺跡台帳作成作業の一環として県内の前方後円墳実測図作成のなかにとりあげられ、現状測量図がつくられていたことは不幸中の幸いであった。いまその実測図によってみるに、墳丘の主軸方位は $N6^{\circ}E$ で、主軸長約35mくらいであったと思われる。すでに後円部は削平されているが、それでも石室が露呈していなかったところから推して、石室は墳丘内かなり低く構えられていたのであろう。墳丘の形成は二段以上の築成であったと思われ、周囲には円筒埴輪がめぐらされていたようである。工事終了後に現地を訪れてなお埴輪片を採集することができた。



第18图 釘崎第3号古墳地形実測図 (福岡県教育委員会提供)

出土遺物各説 (図版第六～一三)

現存する遺物の種類、員数は次のとおりである。

鏡 鑑	仿製平縁四乳文鏡	1 面
武 器	環頭太刀	1 口
	直刀	2 口
	鉄鏃	12種56本
馬 具	轡	3 組
	木製鉄張鑑	1
	雲珠	1
	辻金物	6
工 具	鉸具	2
	鉈	1
	刀子	3
砥 石		1
土 器	須恵器 脚付有蓋壺	1
	無蓋高坏	1
	提瓶	1
	土師器 坏	1
	壺	1

以下、遺物各種について解説する。

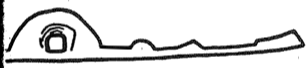
仿製平縁四乳文鏡 (図版第六、第19図)

面径 9.7 cm、鏡縁で急に 2 mm の反り上りがある。鏡面厚さは平均 2 mm で、全面緑錆をおびていて銅質もあまり良くない。鏡背全面に平織麻布の付着がみられ、鏡背文様はほとんどわからない。それでも内区には径 4 mm ばかりの乳文が四個配されていることは確認できる。鏡名の拗ってくる所以である。反り上った鏡縁は厚さ 3~4 mm、巾 8 mm の平縁をなし、その内側には断面三角形の隆起圏線によって内区と外区に分けられる。半球形断面をもつ鈕は径 1.8 cm、高さ 8 mm で、鈕孔の縁は紐ずれによって磨滅しており、紐が通ったまま付着した状態がよくのこっている。



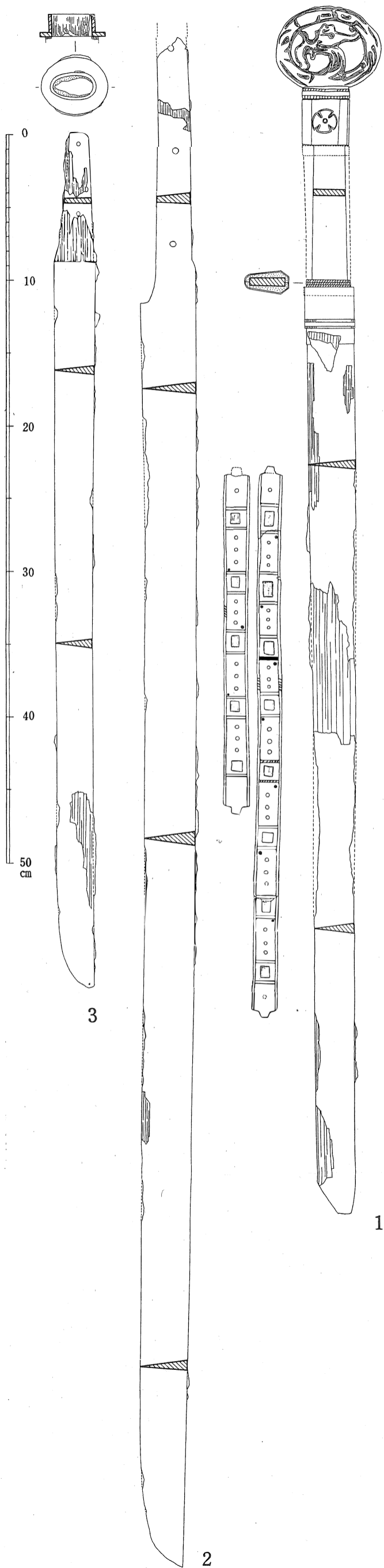
第 19 図 釘崎第 3 号古墳出土鏡鑑断面実測図

がある。鏡面厚さは平均 2mm で、全面緑錆をおび
麻布の付着がみられ、鏡背文様はほとんどわからな
が四個配されていることは確認できる。鏡名の拠って
mm、巾 8mm の平縁をなし、その内側には断面三角
。半球形断面をもつ鈕は径 1.8cm、高さ 8mm で、
通ったまま付着した状態がよくのこっている。



5 cm

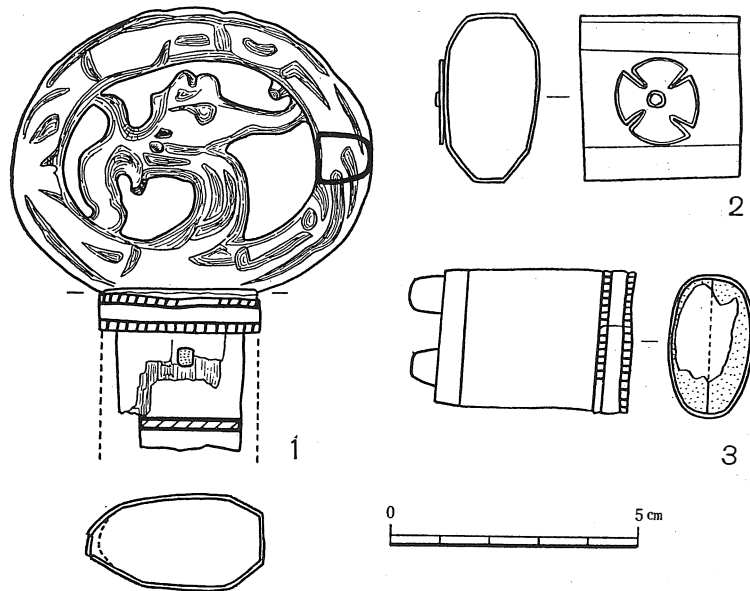
3号古墳出土鏡断面実測図



第20図 釘崎第3号古墳出土・環頭太刀・直刀実測図

環頭太刀 (図版第七、第20図1)

単龍式環頭柄頭を有する太刀で、金銅製、銀銅製の刀装具がのこっている。すでにとりあげられて柄頭から各部刀装具にいたるまで太刀から分離しているの、原初の姿に復原するのは容易ではなかったが、幸いほぼ原初の状態が推定できるまでになった。環頭部と鞘尻金具がはずれているので正確な太刀の全長は測れないが、おそらく90 cm くらいであったと思われる。環頭柄頭は横径 7.2 cm、縦径 5.7 cm の銅製楕円環 (環身巾 1 cm) 内に龍首の側面形をあらわし、太い環身にも龍身をあらわす彫刻があるが、全体に硬化している。龍形の開口して長く突出した舌は下方に延びて環身に接続している (第21図1)。柄部には銀の葛纏を施し、柄両端には面取りした銀銅板をかぶせ、柄頭側の一面には金銅四葉飾が附着している (第21図2)。柄頭は目釘によって茎に装着されている。鞘口には銅製鍔金具が装着されており、刀身は直刀身をなし全長 61 cm、身巾 3 cm である。所々に木鞘の痕跡がみられる。鞘尻金具は銀板巻き、末端は鹿角板をあてて釘二本で鞘木に固定される (第21図3)。この太刀で注意されるのは巾 1.7 cm の帯状銀銅板が二枚ある点である。一は長さ 37 cm、他の一は 23 cm でいずれも両端に突起をつくっている。後述するごとくこれまでの出土例に照して佩用の際、鞘の外側に装着された飾板金具であることが知られる。飾板の表面は長短交互に区切られ、長方形窓と打出管文が交互に配されている。窓の部分には裏側から金箔があてられており、蠟づけされたものであろう。



第21図 釘崎第3号古墳出土環頭太刀装具実測図
(1・単龍式環頭柄頭、2・四葉文装着柄被金具、3・鞘尻金具)

直刀 (図版第七、第20図2・3)

大小二口ある。大刀は茎尻が欠損しているが、現存長 105.5 cm (刀身部 87 cm)、身巾 3.5 cm である。復原長 110 cm くらいになるであろう。茎には三個の目釘孔がある。小刀は全長 59 cm (刀身

部 50 cm)、身巾 2.5 cm で、径に二個の目釘孔がある。両者共直刀身、茎と身に木製の柄および鞘の付着がみられる。なお、小刀に付属していたと思われる倒卵形の鉄製喰出鐔がある。柄口金具から接続していて、鞘口との接口面には鞘口木質の付着がみられる。 (小田 富士雄)

鉄 鏃 (図版第九、一〇、第22図)

総数56本の鉄鏃が出土している。これらの鉄鏃は筥の部分こそ残っていないが、一部を除いては非常に遺存状態のよいものであった。量的には長頸鏃とか細根式などと称される、筥被と茎とのさかいに棘状突起をもつ所謂棘筥被形式の鏃が大勢を占めるが、上差矢として儀礼的性格の強い広根系統のものや特に注意を引く長大なものもある。個体毎に若干の差異はあるが12種類に分類できる。以下型式別にみてゆくことにする。

A類 (1~3) 長い筥被と棘状突起をもつ棘筥被片刃箭式に属するもので、完形のものについてみると約 17 cm をはかる。身には長短若干の差がみられる。刃部と筥被のさかい (関) は斜めに切込んであり脇扶の効果をもつ。2・3では筥の上をカバ巻きした状態が知られる。この型式の鏃は19本あり、(8)は刃部先端の形態がやや異なるがこの型式に含むものとすれば合計20本である。

B類 (4・5・10) 同じく棘筥被式の鏃で片切刃造鑿箭式と称されるものである。全長は 13cm 前後でA類に比べ短い。8本出土している。

C類 (6) 片切刃造三角形式に属する。B類をほぼ等しい長さの筥被をもつが棘状突起はない。身から筥被へはなだらかなカーブでつらなる。この型式のものは11本ある。

D類 (7) 同じく三角形式であるが、片丸造でしかも直線的に関を形成している点でC類と異なっている。筥被の途中で折損しており全長は不明である。1本出土している。

E類 (9・11・12) 身の先端が三角形を呈する大型の鏃で圭頭広根斧箭式と呼ばれる。茎を含めて 10 cm 前後の長さがある。身は平造のものが多いがなかには両丸造に近いものもある。この型式のものは7本である。

F類 (13~15) C類の身の先端を直線的に仕上げたもので方頭広根斧箭式と呼ばれる。これにも平造のものと両丸造のものとがみられる。身と茎とのさかいがはっきりとしないものもある。長さは大体E類と同じくらいであろう。3本出土している。

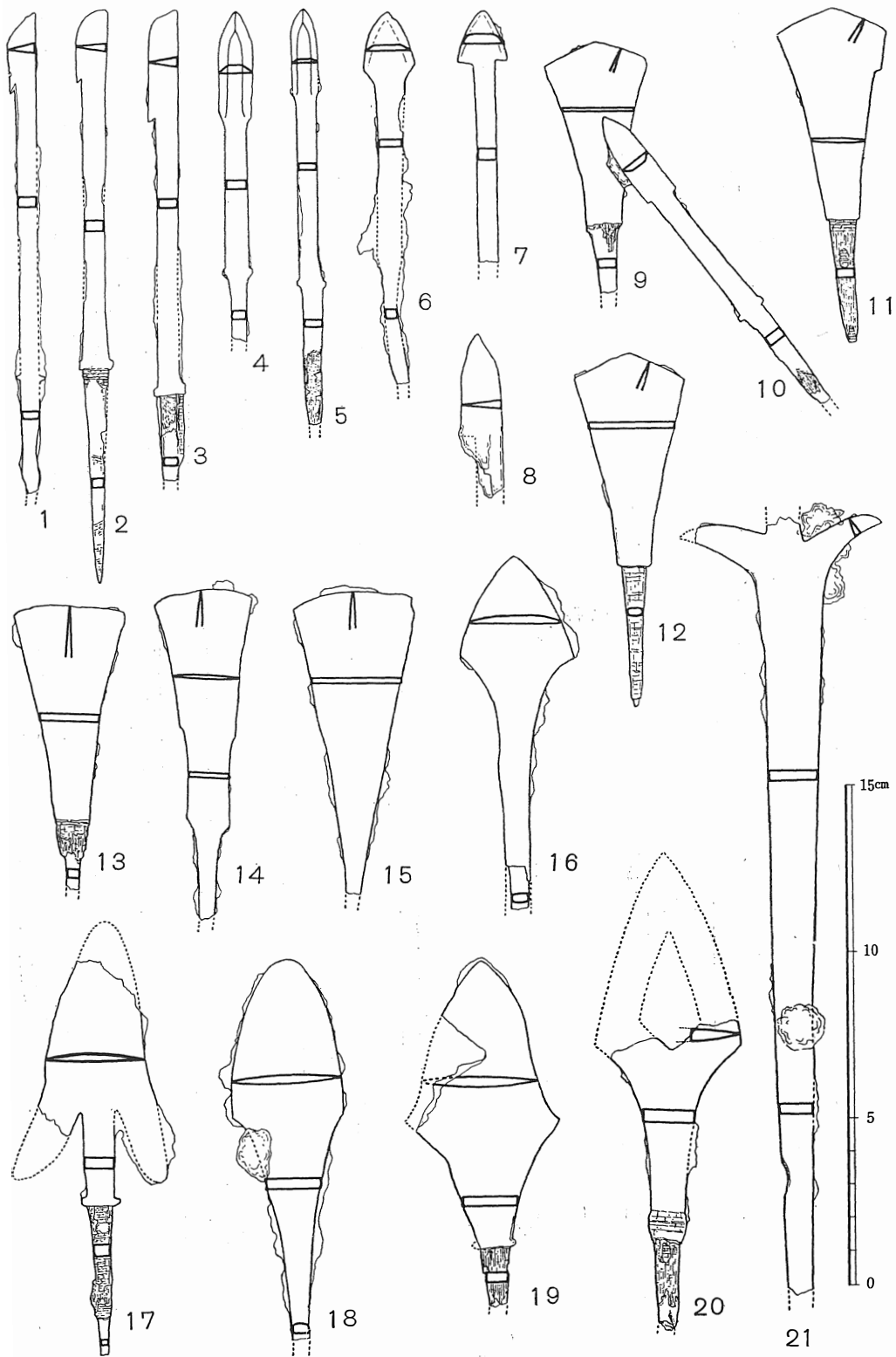
G類 (16) 片丸造の三角形式で形態的にはC類を大型にしたものに類似する。長い筥被をもつ。茎部分を欠く。1本出土。

H類 (17) 同じく片丸造三角形式であるが大きな脇扶を有する。また棘状突起ももっており、いま身の先端を欠損しているが推定復原長 13 cm をはかる。1本出土。

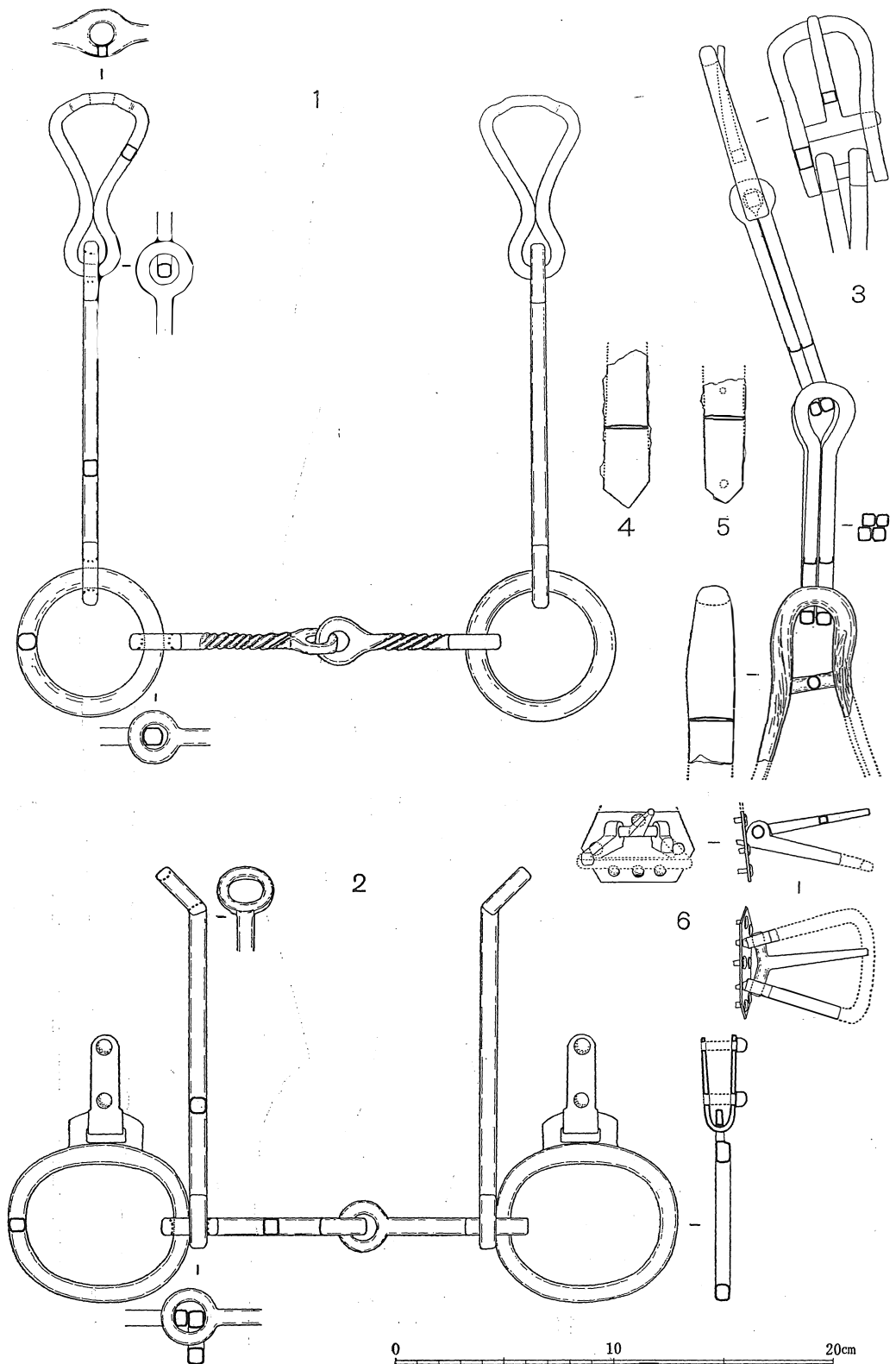
I類 (18) 椿葉式あるいは変形斧箭式などの名称がふさわしいかとも思えるが、ここでは一応三角形式に入れて広鋒両丸造三角形式と呼ぶことにする。身の先端がさほど鋭角をなさないのが特徴である。1本出土。

J類 (19) 菱形の変形型式とみるのが妥当であろうか。短い筥被には棘状突起がある。1本出土。

K類 (20) 両丸造三角形式に属し身に菱形の透しを有する。これまでのうちでは最も大型のもので1本出土した。



第22图 釘崎第3号墳出土鉄鏃実測図



第 23 图 釘崎 第 3 号 墳 出 土 馬 具 实 测 图

L類 (21) この古墳出土の鉄鏃のうちで最も大型で形態の上からも特異な存在である。身部先端を失っているため形状を明らかにしないが、長い筥被状部分に移るところに雁股式鏃を思わせるような刃部のある翼をもっている。筥被状部分は身と反対側に次第に細くなっていっているが茎を思わせるような痕跡は残っていない。現存長約 23 cm をはかり、1本のみ出土している。

轡 (図版第十二、第23図1・2、第24図7)

細部をやや異にする三種類の轡が出土している。いずれも鉄製で装飾的要素の少ない実用品である。(1)はそのうちでも最も簡単なつくりで鏡板が径約7 cm ほどの環からなり、これに銜および引手が連結する。銜は二連式の通常のものであるが、(1)ではねじりが加えられて他の2例とは若干異なる。銜の全長 17 cm をはかる。引手は約 17 cm あり先端に引手壺をもうけて手綱の回転を自由に行っている。(2)は(1)の環状をなす鏡板が楕円となって立間をともなう構造で、立間には現在面繫へ連続する革帯に付属した金具が残っている。金具は長さ約 4 cm ほどのU字形を呈し、二個の鉤をもって革帯を固定する。銜の全長は 17 cm で、引手は、引手壺を有せずに先端が環状をなし直接手続に連絡する形態である。(7)は本古墳出土の轡のうちではやや装飾性をおびた形態をもつもので、鏡板は下方に小さいくり込みのある長径 11 cm の楕円形の鉄板上方に立間をもうける。鏡板中央部は長方形に透されており、ここを通して銜端にある環状部がおさまって縦方向にとりつけられた留金によってその位置を保つ仕組みとなっている。鏡板には鎖4個で構成される兵庫鎖が付属し面繫へ連絡する状態を示している。引手は(1)と同様引手壺を有するが、銜との結着法は(1)が鏡板を介して、(2)が銜と直接であるのに対して(7)ではいわゆる遊び金と呼ばれる小環によっている。したがって引手は必ず鏡板よりも外側に位置する。銜の全長は約 17 cm である。

木製鉄張鏡 (図版第一一、第23図3~5)

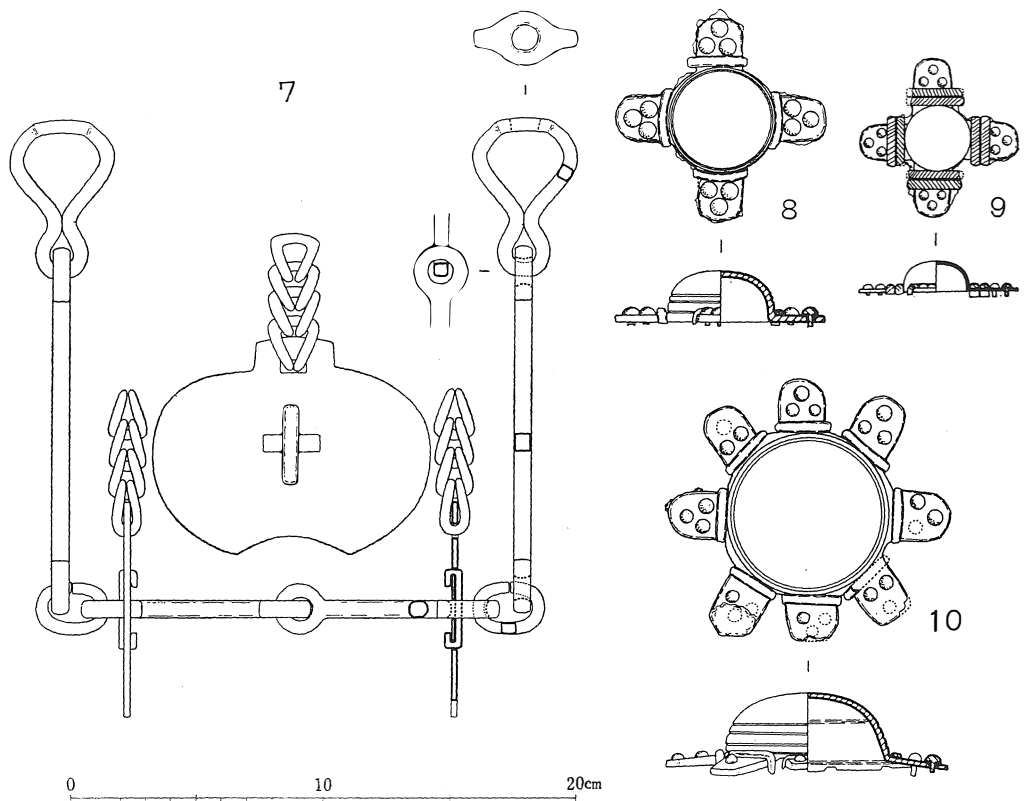
現在鏡部分はほとんどなくなって全体の形状を知り得ないのが残念である。1対あり鏡軛部分はどちらも保存状態がよい。鏡残欠の状態は、2cm 巾ほどの薄い鉄板が同じ巾の木質部をおおい、鏡軛と連結するための環状部を形づくったのち両方へ広がってゆく状態を示している。したがっておそらく輪鏡であろうと思われる。鏡軛は鉄棒を折り曲げて作った長さ 11 cm の2個の鎖によって構成され先端には大型の鉤具がとりつけられて力革に連結する。(4・5)は鏡部分をおおう鉄板の残欠とみられる。

雲珠 (図版第一一、第24図10)

径約6cmの半球形の基部に8個の脚を有する。半球形部には基部に近く4条の沈線がめぐっている。脚はその間隔からみて大きく2群に分れており、革帯を固定するため3個の鉤がうたれ責金具がはまっている。すべて鉄製品で、現在鉤および責金具にはかつての銀張の痕跡を明瞭に知ることができるが本体はやや銹化しており旧状をうかがうことができない。

辻金物 (図版第一一、第24図8・9)

大中小3種類ある。図示したものは大型と中型の辻金物で、出土数は大型2・中型1・小型3である。いずれも4脚をもち革帯を鉤留するが小型のものは責金具を省略している。大型辻金物は半球形部基部に沈線をほどこすなど雲珠と相似た手法を示している。鉤および責金具は銀張である。中型品はやや様相を異にし装飾的である。すなわち、本体は鉄地金銅張とみとめられ、前者同様鉤および責金具については銀張であるが責金具は各脚に2個づつはめられている。しかも各責金具には斜めの刻みが入れられていて、その方向をたがい違いに変えて装着しているために綾杉文のごとき効果を出している。本体に使用された鉄板はやや薄い。中型の辻金物が鉄地金銅張であることからみて、雲珠そ

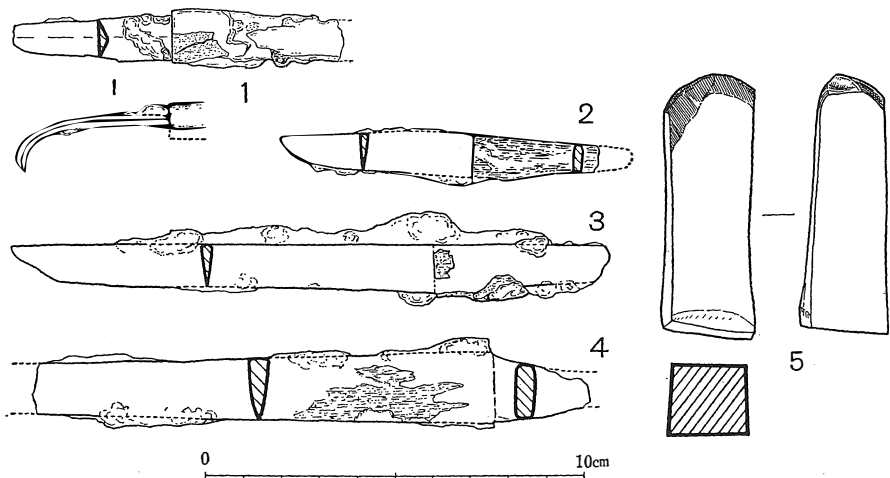


第 24 図 釘崎第 3 号墳出土馬具実測図

の他の辻金物についても金銅張であった可能性は残されよう。

鉸具 (第 23 図 6)

一部を欠損しているが六角形の薄い鉄板にとりつけられたもので、鉄板には 6 個の鉸がうってある。おそらく革の部分に装着されたものであろうが、馬具のどの部分に付属するものか明らかではない。鉸具の長さは残存する刺金の長さからみて 5 cm 前後とみられる。鉸具の鉄板への固定は孔に通して先端を若干たたき広げただけでそれほど強い力に耐えうるものとは思えない。



第 25 図 釘崎第 3 号墳出土鉸・刀子および砥石実測図

鈍 (図版第六、第23図1)

鹿角製の柄に装着されたもので刃先の長さは 4.2 cm ある。刃部は断面三角形となり鑄をもつ通有の形式であるが先端の反りが著しい。鹿角柄は現在約 4.5 cm を残して失われている。

刀子 (図版第六、第23図2・3・4)

大・中・小3口が出土している。いずれも刃部は平造であるが、大型のものは重ねも厚くややふくらみをもっている。いま先端と茎を欠損しているが刀子よりむしろ小刀と呼ぶにふさわしい。刃部に鞆木の付着がみとめられる。小型のものは刃部の長さ 5 cm で木柄であったことがわかる。中型のものは刃部の長さ 11 cm 強で、ふくらは枯れて所謂カマス鋌となっている。関の部分は錆化のため判断としないがほとんど身巾のまま茎を形成しており、鹿角柄をもつ。 (真野和夫)

砥石 (図版第六、第23図)

白色、硬砂岩製である。長方柱状をなし、長さ 7 cm、厚み、巾ほぼ 2 cm で、三面は使用による中凹み状態となっている。大きさからして携帯可能のものであり、生前使用のものを副葬したものであろう。 (小野富士雄)

脚付有蓋壺 (図版第一三、第26図3)

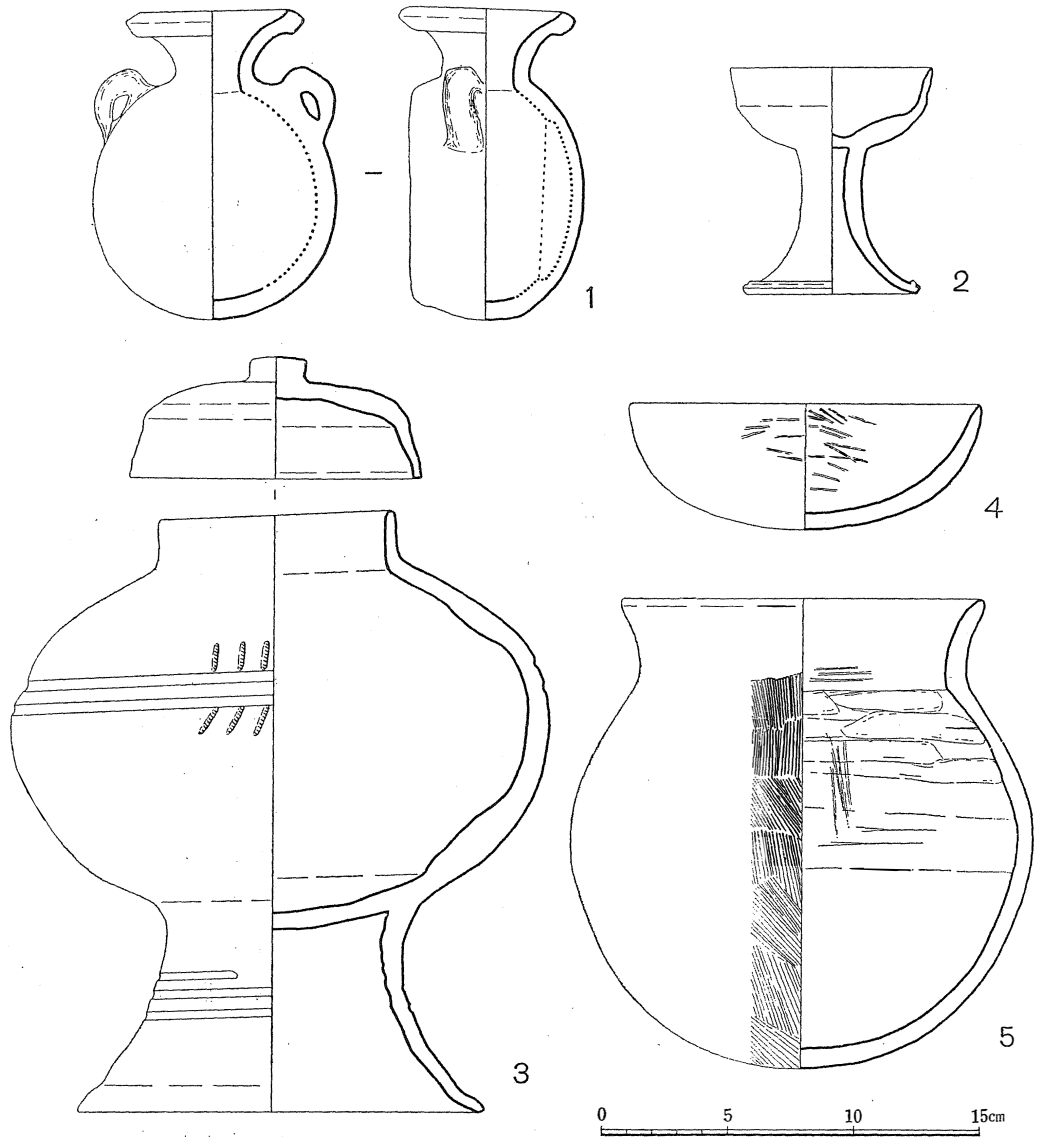
器高 23.3 cm、口径 10.2 cm をはかる脚付壺で扁平なつまみのある蓋をもつ。蓋は口縁端が水平に仕上げられており一見したところ古式の特徴を示すかのようなのであるが、天井部から口縁にうつる肩部においても段を有さず、またつまみの形態といい総体に厚手で鈍いつくりである。本体は直立した短い口頸部をもち、胴中央付近が最大径となる壺に接合部径のやや太めな脚がついて安定感を有するが、蓋同様にやしまりが足りない。壺胴部やや上寄りのところに二条の沈線がめぐっておりその上下に櫛状施文具による刺突文が配される。また脚中央にも螺施状の沈線が施されている。壺の胴部下半は格子目状の叩きの痕跡を残しており、叩きのあと回転を利用して整形したことが横方向の粗いカキ目によって知られる。口頸部から肩部にかけておよび脚部は回転利用の横で整形である。表面は部分的に灰釉状を呈しており焼成時の付着とみられる。焼成は堅緻である。

無蓋高坏 (図版第一三、第26図2)

高さ 9 cm、口径 8 cm の小形高坏で、坏底部付近のつくりは厚くこれからやや外彎気味に立上って口縁にいたる。立上りの下の腰の部分はカキ目が残る。脚端には小さな突帯を付している。八女地方ではこの手の小形高坏は、古墳では乗場古墳、窯跡では塚ノ谷第4号窯跡などから出土²⁾しているが、これらと比べてみると、器高に対する坏部の高さの割合が減少(いいかえれば脚部の割合が増大)し、また坏部や脚にめぐらされた沈線を省略するなど全体にやや退化の傾向がうかがえるようである。

提瓶 (図版第一三、第26図1)

高さ 12.3 cm をはかる小形の提瓶で肩部に1対の環状把手を有する。体部側面観は片方が扁平になっており提瓶としては新しい時期の傾向を示す。体部は大形のものと同じく、扁平な側を下にして成形しその反対側に成形後にふさがれた円形口の痕跡がみえる。体部には回転を利用したカキ目整形が行なわれている。



第26図 釘崎第3号墳出土土器実測図

坏 (図版第一三、第26図4)

高さ 5 cm 弱、口径 14 cm あり、厚手のつくりである。茶褐色を呈しきめのこまかい胎土を使用している。部分的に丹の付着が認められるがきわめて小部分のため本来これに塗られていたものかどうか確かでない。内外ともにこまかいクシ整形を加えこれをすり消している。

壺 (図版第一三、第26図5)

高さ 18.4 cm、口径 14.4 cm あり、ほぼ中央にある胴部最大径は長径で 18.4 cm をはかり若干いびつになっている。口頸部は外彎する形態をとり端部は丸くおさめている。内面は横方向のヘラ削り、外面はハケ整形の後多少すり消しが行なわれており器壁の厚みはほぼ一様に仕上げられている。口頸部は内外ともに横なでがほどこされる。色調は褐色を呈し、胎土にほとんど砂粒を含まない。(真野和夫)



第27圖 環頭柄頭参考例 (1・山口・田光寺古墳、2・福岡・乗場古墳、3・福岡・高崎2号古墳、4・5・京都・岡1号古墳)

1~4 実大
4・5は樋口隆康氏提供

×

×

×

本古墳発見の遺物は以上のごとくであるが、石室の湮滅した現在では考察の対象は遺物のみとなった。このなかでまず注意せられるのは環頭太刀である。環頭太刀の柄頭環内飾にみられる動物文様には単鳳式、単龍式、双龍式、獸面（獅嚙）式の別がある。これらの源流が中国、朝鮮の出土品にあることは疑いないが、わが国出土品中には舶載品かと思われるものも屢々ある³⁾。八女古墳群でも以前に乗場古墳発見と伝える金銅製単鳳式（環径 7.5 cm）の一例がある（第27図2）。環身の龍身文も肉盛りあり、写実状態をまだとどめている。これより一層写実的なものとして山口県萩市大井・円光寺古墳出土の単鳳式環頭⁴⁾（環径 6 cm、第27図1）、京都府竹野郡網野町岡1号古墳出土の単鳳式環頭⁵⁾（環径 6 cm、第27図4）などがあげられる。八女古墳群では乗場古墳に次ぐ第二例目の発見である。この度の発見例は単龍式であるが、すでに指摘した如く環身は太く、文様の硬化著しいものであり、環身に施された龍身文の表現も切断されていて本来の姿を失いつつある。その点で乗場例にくらべても一段おとっていることは否定できない。これと対比して面白いのは近時福岡市高崎2号古墳⁶⁾（環径 6 cm、第27図3）で出土した金銅製単龍式のものである。龍首には表皮の鱗をあらわすと思われる円管文を配している。しかし眼や太い環身に彫刻された龍身の表現はかなり簡略化されている。乗場古墳に先行する熊本県・江田船山古墳⁷⁾や福岡県・日拝塚古墳⁸⁾の環頭柄頭は細身であり、彫刻にも写実性のみられる点では釘崎3号古墳、高崎2号古墳の例よりも乗場古墳、円光寺古墳、岡1号古墳に近いものである。環身の太い、写実性に欠ける本古墳例の如きがやや後出的なものであることが知られる。

次に長方形窓をもった銀銅製飾板の発見も注意されるところである。このような例は、筆者の触目したところでは伝福岡県京都郡出土のもの（単龍式環頭太刀・行橋市福島コレクション⁹⁾）がある。また上述の京都府・岡1号古墳出土の環頭太刀（第27図5）に装着された金銅飾板（心葉形透孔）、福岡県・沖ノ島23号祭祀遺跡発見の銀銅飾板（心葉形透孔）¹⁰⁾、島根県松江市大草町・岡田山古墳出土の銀銅製飾板（三葉式環頭太刀、透孔なし）¹¹⁾ などが、いずれも環頭太刀に付随していることが知られる。南朝鮮慶尚南道昌寧郡昌寧校洞発見の双龍式環頭太刀に装着された金銀製飾板は透孔なく、表面に斜線を刻むものである。末永雅雄氏は「これは現在では鞘に対して別段実用上の効果がないようであるが、そのはじめは皮革とか布帛で包んだ合せ目の修飾に施した手法と推される」と述べられている¹²⁾。

そのほかの武器、馬具、工具などには特筆すべきものがない。石室内から砥石の出土した例は福岡県・福岡市・老司古墳1号石室¹³⁾、浮羽郡吉井町・塚堂古墳前方部石室¹⁴⁾、京都府勝山町箕田・丸山古墳前方部石室¹⁵⁾などのいずれも前方後円墳からの発見がある。老司古墳は5世紀前半代、塚堂古墳は5世紀後半、丸山古墳は6世紀中頃にそれぞれ比定されていて砥石副葬の風の年代幅を知ることができる。

本古墳発見の須恵器は編年上からは第三—B期に比定すべき特徴を備えている。乗場古墳の須恵器（調査報告I.67頁所掲図参照）が第三期に比定されることはすでに述べたところであるが、その形成には同一示しがたいものがあり、同一の窯から供給された製品とは思われない。また同時期に比定した塚ノ谷第4号窯跡の出土品とも思われないので、さらに別の窯跡の存在が推定されるであろう。

以上のようにみえてくると、環頭太刀・砥石・須恵器などを手がかりにとりあげてみたが、その編年

観の総合して帰するところは6世紀中頃から後半に及ぶあたりに位置づけるのが穏当であろう。八女古墳群中では乗場古墳にはほぼ併行する時期に築造せられ、遺物の上からは特に追葬などのその後につづく埋葬を考えねばならないような確証は指摘できないようである。末尾ながら本古墳の測量図を提供いただいた福岡県教育委員会文化課、京都府岡1号古墳や鳥根県岡田山古墳の環頭太刀写真を御配慮いただいた京都大学樋口隆康氏に感謝申し上げる次第である。 (小田富士雄)

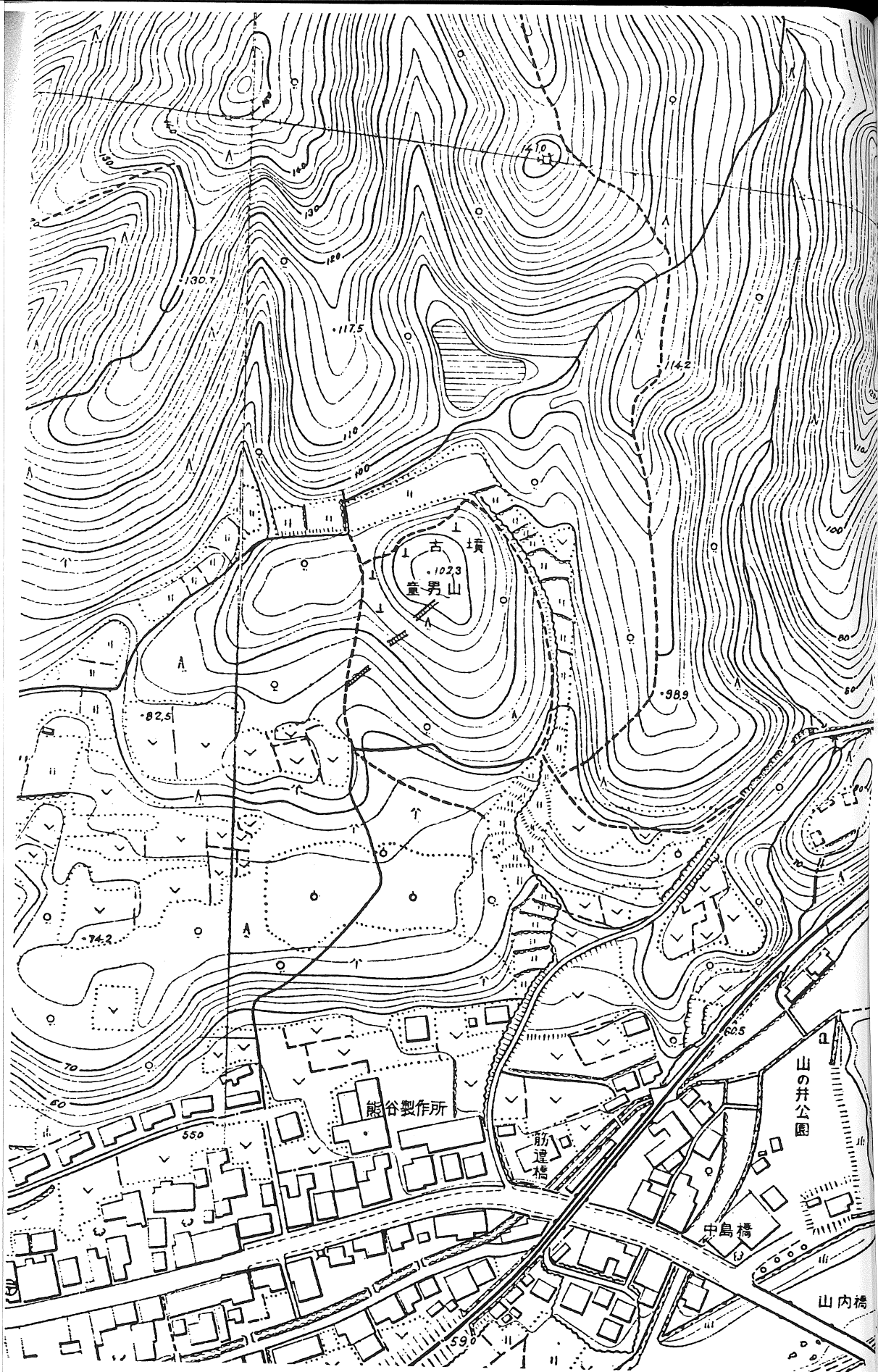
- 註 (1) 調査報告Ⅰ所掲巻首地図には前方部を北向にし、広川町側に記入したが、本稿のように訂正する。
(2) 調査報告Ⅰ
(3) 「日本発見刀剣環刀聚成表」京都帝国大学文学部考古学研究報告第8冊・1923
後藤守一「原史時代の武器と武装」雄山閣考古学講座・1929
神林淳雄「金銅装大刀と金銅製柄頭」考古学雑誌29の4・1939
神林淳雄「環頭柄頭雑考」考古学雑誌33の12・1943
(4) 弘津史文「防長通信」考古学雑誌20の1・1930
山本 博「長門国大井村の弥生式遺物」考古学雑誌42の1・1934
(5) 樋口隆康「網野岡の三古墳」京都府文化財調査報告第22冊・1961
(6) 浜田信也「高崎古墳群」今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集・1970
(7) 梅原末治「玉名郡江田村船山古墳調査報告」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第1冊・1922
(8) 中山平次郎・玉泉大梁・島田寅次郎「日拝塚」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯・1930
(9) 小田富士雄実査
(10) 1970年10月発見資料
(11) 樋口隆康氏の教示ならびに写真による。
(12) 末永雅雄「日本上代の武器」190頁ならびに図版第三五・1943
(13) 「福岡市老司古墳調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第5集・1969
(14) 宮崎勇蔵「筑後国浮羽郡千年村徳丸塚堂古墳」福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第10蹟・1935
田中幸夫「筑後千年村徳丸古墳前方部石室に於ける埋葬の状と遺物の一二」考古学雑誌 25の1. 1935.
(15) 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」史淵100輯・1968

Ⅲ 童 男 山 古 墳 (図版第二〇～二四)

〔所在地〕八女市川崎区大字山内字北童男1281の1番地

遺 跡 の 現 状 (図版第二〇、第28図)

八女市の東奥、山内部落の背後山丘上にある。周囲谷田に囲まれた標高102.3mの独立山丘をなし、その山頂を占めている。このあたりは部落有山林で、眼下に星野川を望む佳景の好处である。いつの頃に開口したのか詳らかでないが、南西に開口する巨大な横穴式石室が在って著名である。石室の西側にやや低く細長く延びた地形がみられ、一部は墓地として利用されているが、一見西むきの前方後円墳の観を呈するところから前方後円墳と目され、或は石室周囲の封土が削られているところから方墳と目されてきたが、やはり円墳とみるのが穏当である。昭和31年7月28日、福岡県指定史蹟となった。山頂の古墳にいたる途中各所に開口した小円墳あり、一括して童男山古墳群と総称している(調査報告Ⅰ、巻首地図参照)。(小田富士雄)



第28図 童男山古墳付近地形図(2500分の1)

研究小史

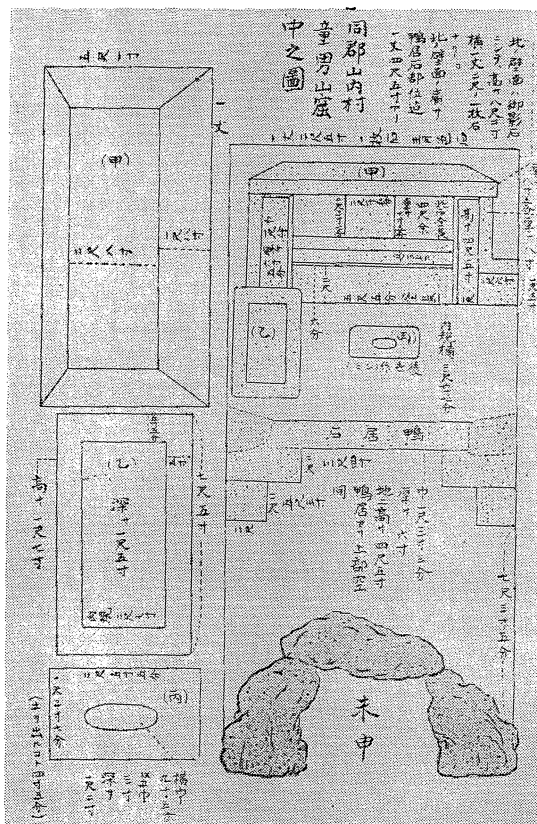
童男山古墳はかなり早くから開口して人々に知られていたと思われ、古くは幕末に矢野一貞の著した「筑後国史」、俗にいう筑後将士軍談の中に見える¹⁾。それによると巻第四十八の墳墓碑塔第二の上妻郡の条山内村古塚という項で述べられている。その記事は、

寛延記云、村ノ東北ノ山ニアリ、童男艸女ト云、岩室長一丈五尺、横八尺五寸、高九尺八寸、奥ノ間長一丈五尺、横一丈二寸四分、高一丈五尺、岩室内ニ石舟アリ、長七尺五寸、横三尺六寸、深一尺六寸、奥ノ間ノ石舟長八尺二寸、横四尺五寸、深一尺八寸、福島城築ノ時、石入用ニテ、凡四間程崩取ニ成レリ、筑紫君磐井ガ墓ト云伝フ、石人石馬石猪ナシ

とある。そしてかなり精密な図を付している。その後長く記録の上には出てこないが昭和三年刊行された福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書²⁾の中で八女郡の古墳調査が企画されその結果が一覧表となつて収録されている。石室の大きさに関する数値については先の一貞のものとなんら変るところはないが、備考欄には面白い記事が載っている。すなわち

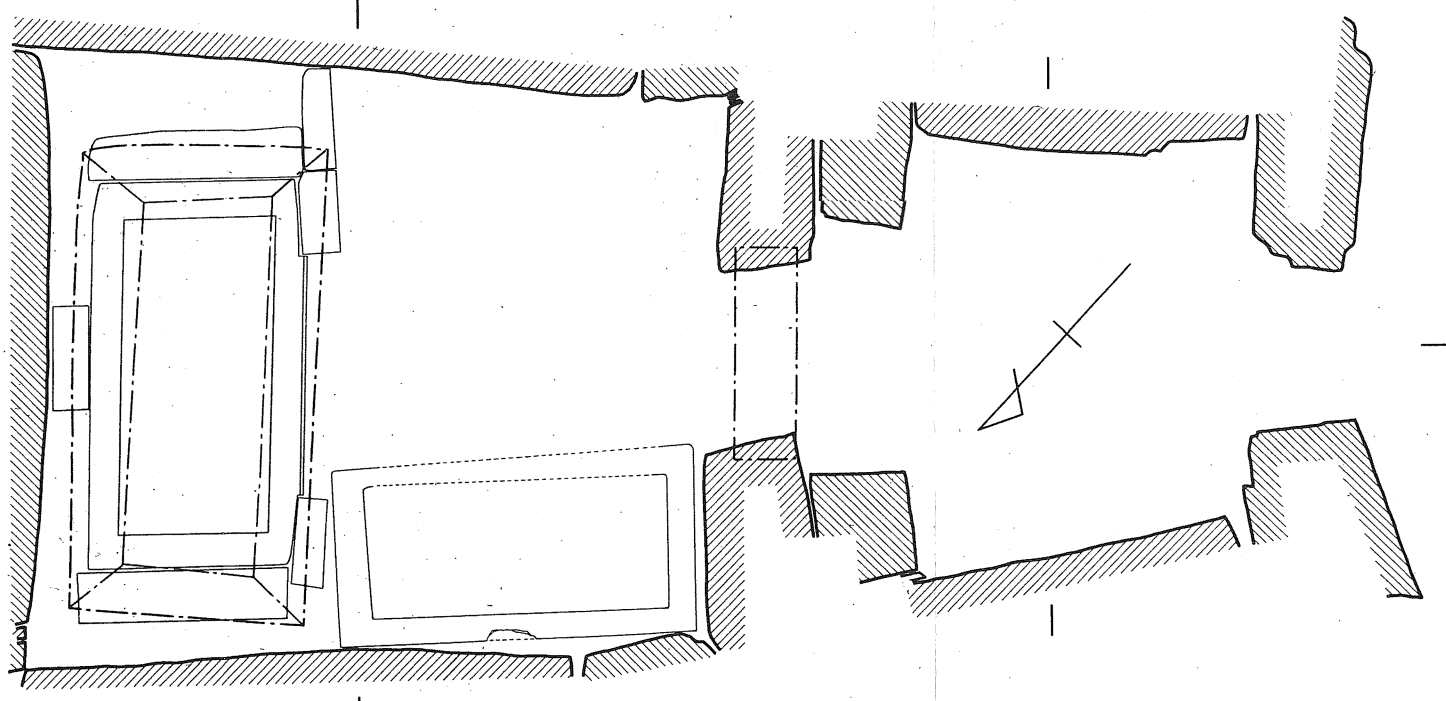
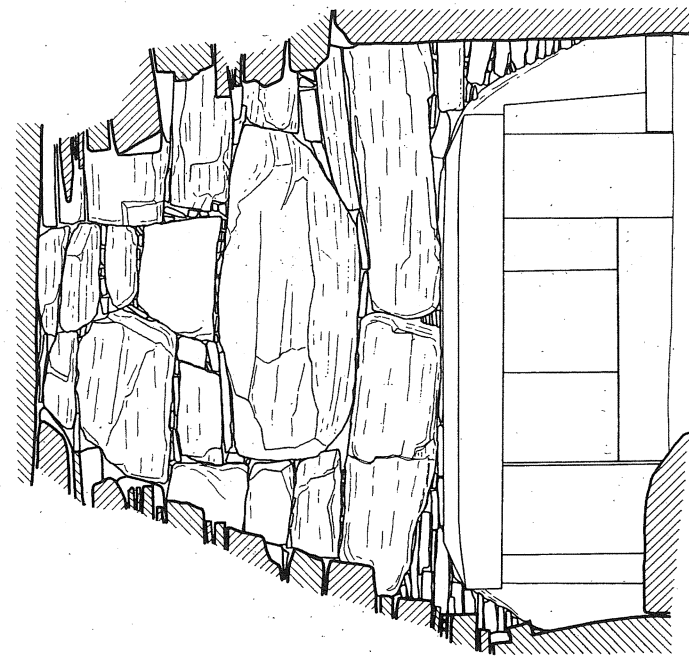
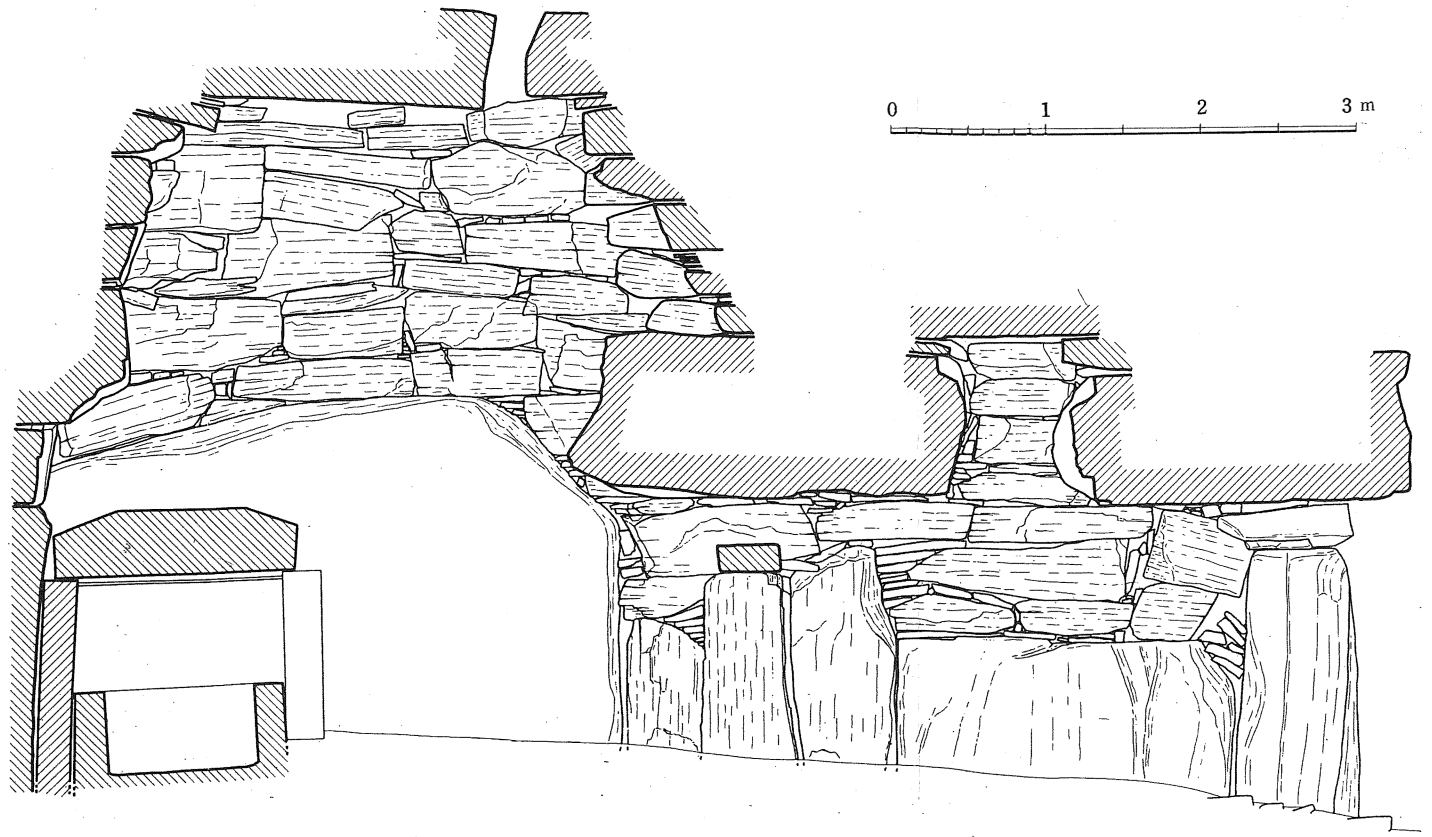
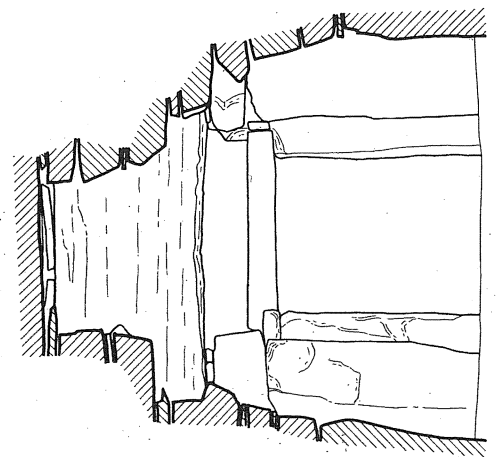
伝ヘ言フ秦ノ徐福童男艸女ヲ率ヒ来リ仙薬ヲ求ムレドモ得ズ遂ニ此処ニ留リシニ船化シテ石トナレリ……

とあって一貞の著では磐井の墳墓という言い伝えがここでは秦の徐福の伝説と結びついてしまっている。以上が童男山古墳について管見する資料である。 (真野和夫)



第 29 図 「童男山窟中之圖」 矢野一貞「筑後国史」下巻より

し
の
尺
寸
は
ナレ
てい
り



第30図 童男山古墳石室実測図

石室の構造

石室は複室構成の横口式石室で、主軸は N47° E、南西に開口する。羨道は古くから崩されていて現存するのは前室と後室のみである。すでに江戸時代からこのような状態であったことは矢野一貞の模写図によってもうかがわれる。一貞によれば、「福島築城ノ時、石入用ニテ、凡四間程崩取ニ成レリ」と記されている。石室前方に巨大な扁平石一個が据えられており、おそらく羨道に架せられていた天井石と思われる。したがって現存する石室入口は、前室前面の両袖石からはじまり、奥壁までの全長 8.6 m である。石室は奥から入口にむかって次第に巾を減ずるように設計され、前室と後室の境をなす両側袖石は各々二枚ずつの角材をあわせて立てているが、両壁面は二室を通じて各々直線上にならぶように設計されているので、両袖石はそれぞれ壁面に接して立てられたような状態となっている。二室間の袖石部分をのぞいた各室の大きさは下表ようになる(単位・cm)。使用されている石材はこの地方に多い結晶片岩と凝灰岩と花崗岩の三種であるが、花崗岩は後室南東壁の巨大な腰石

	長さ	奥巾	入口巾	高さ
後室	430	398	350	410
前室	225	285	240	285

として一枚使用されているだけで、石室の構築にはすべて結晶片岩が使用されている。後室正面の石屋根、側面の棺床、後室通路に架された楯石などの内部施設には一段と緊密な構築法を要するためか、加工しやすい

凝灰岩をもってしている。石室の構築にあたっては基礎をなす四周の腰石及び袖石に使用された結晶片岩は石理を縦方向にとって並べられている。すなわち立てて使用している。これらの腰石の上に積みあげられる割石は、天井まで若干の迫持ちを示す持送り式に構築されるが、後室正面上方の一枚をのぞいては石理を横方向にとって重ねている。すなわち平積みされている。また四隅の部分にはまわし石(力石)をおいて隅がまるくなるように仕上げてゆく構築法は古式の横口式石室以来、九州の横口式石室に踏襲されている伝統的技法である。また、壁面の腰石上に平積みされる石材の上下積み関係には大別して各石材の接触線(目路)がジグザグになるいわゆる煉瓦積技法と、ほぼ同大の石材を上下に積んで目路がほぼ上下真直に通るような重箱積技法があるが、本石室では一部に前者の技法をのこしながら、ほとんどが後者の技法に拠っていることは新しい技法の導入として注意される。このことは結晶片岩という扁平剝離性をもった石材であって、角材として採取できる点にも起因しているかも知れない。しかし一方では巨石古墳のような横口式石室でも後出的な石室に採用される場合が多いことを考えれば、後者の技法の方が優先するところに、この種石室の年代を考える上に示唆するところ多いであろう。

次に平面形にたちかえってみると、上述したように左右壁は前、後室を通じて同一直線上にならぶように計画され、入口にむかって巾を逡減している。したがって二室間の袖石をとったならば、平面形で二室を区分するほどの状況ではない。一般にこれを前室の“退化現象”としている。しかも二室の腰石は各面大きな一石を立てて構築することを原則としている。このような特徴をもったものとして筑前・宮地嶽古墳³⁾、肥前・杵崎鬼窟(国分岩屋)古墳⁴⁾、筑後・重定古墳⁵⁾などの巨石古墳をあげることができる。そしてこれらはいずれも入口にむかって巾を逡減してゆく点でも共通している。なお、本石室では後室の長さを前室のほぼ二倍になるように計画されていることも注意しておこう。

次に石室の立面形についてみれば、二室の境界を区切る袖石をささえとして架された天井石は、二石ともその下面がほぼ同一水平線上に並ぶように配置されており、この水平線を奥に延ばしてゆくと、後室正面奥壁の腰石の上縁に一致している。その高さは、現状の床面が若干流入土によって埋もれていることを考慮しても約2mとなっており、後室の高さの半分である。前室の高さはほぼ両天井石の厚さ分だけ加算されたにすぎず、この点でも前室の“退化現象”は平面形におけると同様に符号している。このように石室内における各境界に架された天井石の高さをそろえる現象は前出の九州の巨石古墳にもみられるが、豊前・綾塚古墳、同・橋塚古墳にもみることができる⁶⁾。とくに筑後・重定古墳では後室に架された石棚の下面の高さもそろえてあって注目される。

次に石室内部の施設についてみれば、先ず後室では奥壁に接して石屋形が据えられている。矢野一貞はこれを「石舟」と記している。棺床は長方形一石の凝灰岩をくりぬいてつくられたもので、やや奥壁側に傾斜しているが、長さ2.5m(内法2m)、巾1.36m(内法97cm)、深さ53cmを測る。棺床の左右に接しては棺の巾と同大の扁平石を各々立て、前面左右と正面奥にも束石を立てて屋形の天井石を支える設備としている。棺床上面から天井面までの高さ73cmとなる。屋形の天井には、3.2m×1.58mの大きさの寄棟造屋根形の石材が架されている。屋根上面の平坦面は巾85cmと広く、厚さ42cmである。内面は彫り凹められずに平面のままである。棺床前面の左右に立てられた束石はその接触する部分の棺床側面を鍵状に加工して束石が噛み合わされるように設計してある。屋形内部には本来塗朱されていた痕跡をとどめている。

北西壁ぞいにおかれた棺床は、長さ2.33m(内法1.94m)、巾1.17m(内法85cm)である。矢野一貞の模写当時は全貌がみられたらしいが、現在は棺床内に土砂が堆積していて、かなり風化した棺床の縁が三方にみられる。一貞の記録では「深サ一尺五寸」と記されている。

次に特異な構造としては後室入口の袖石に凝灰岩の扁平な楣石が架してあり、その上の通路天井石との間に窓を設けていることが注意される。楣石は長さ1.35m、巾40cm、厚さ18cmの扁平石で、その上方天井石との間に高さ30cmの窓がしつらえてある。このような構造は筑前・王塚古墳⁷⁾、筑後・乗場古墳⁸⁾(ただし前室入口)などの6世紀中頃にさのぼる古墳にすでにみることができる。なかでも王塚古墳には石屋形をそなえている点で本古墳と照して注意される。また肥後・阿蘇郡の上御倉古墳、同・下御倉古墳⁹⁾にも楣石をおき、小窓を設ける構造がみられ、石屋形をおいている点でも注目されるが、前者では石屋形の前面左右に障壁を立てて二屍床を設けている点、いわゆる屍床の「コ」字形配置をとるものとして本古墳との関連が示唆される。

本古墳の副葬遺物については所伝なく、時期を明示する資料に欠けていたが、以上のような石室構造の実測と分析の調査を通じて、これが五世紀後半以降に形成された九州型古墳における特性¹⁰⁾——屍床の「コ」字形配置、石屋形——を継承し、変化しながらも、6世紀後半代から出現するいわゆる巨石古墳としての石室構築法の原理を採用していること。しかしながら7世紀代に下って普遍化する様相にはなりきっていないこと。すなわち横穴式石室古墳における新古両面の様相をあわせ示していることが指摘できる。したがって本古墳の年代は6世紀末頃に比定するのが穩当であろうと推察される。しかもこの古墳が八女古墳群における大型古墳中、編年上の最新位置を占めることも重要な事実であろう。

(小田 富士雄)

- 註 (1) 矢野一貞著「筑後国史」筑後遺籍刊行会・1926
(2) 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第三輯・1927
(3) 梅原末治「日本古墳巨大石室聚成」京都大学考古学研究報告第十四冊所収・1937
(4) 1970年7月小田・真野実測図による。
(5) 斎藤忠編「日本原始美術 5・古墳壁画」206頁(1965) に小田らの実測図がある。
(6) この両古墳は1969年8月小田・真野・黒野・米田実測図による。
(7) 梅原末治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」京都大学考古学研究報告第十五冊・1940
(8) 小林行雄編「装飾古墳」69頁・1964
(9) 乙益重隆「阿蘇谷の古墳群」熊本県文化財調査報告第三集所収・1962
(10) 小田富士雄「九州」日本の考古学IV・古墳時代上所収・1966

管ノ谷窯跡の調査

管ノ谷第1号窯跡の調査は、これまで調査を行ってきた八女古窯跡群のなかで最も新しい八世紀後半代の窯跡（須恵器第Ⅶ様式）であることがわかった。窯構造においてもそれ以前のものにくらべて著しく小形化している。このような動向はこれまで調査してきた須恵器第Ⅲ期（中尾谷、塚ノ谷第4号）、第Ⅴ期（塚ノ谷第1号）、第Ⅵ期（塚ノ谷第2号、牛焼谷）の順序に変遷をたどってくれば時代を追って須恵器窯の形態が小形化してゆく経過をたどることができる。ほぼ同時期に比定される熊本県荒尾市・紅葉谷第1号窯跡¹⁾、鹿児島県川内市・鶴峯第3号窯跡¹⁾などとほぼ同大の規模をもって、いることを参考すれば必ずしも筑後地方だけの傾向とも言いきれないようである。須恵器資料は編年図を組むには資料が少なすぎる。灰原の規模も小さいところからすれば長期にわたる操業が行なわれたとも思えない。この時期の窯跡は将来さらに資料の豊富なものをさがして追加する必要がある。ただ、この窯跡で瓦陶兼業の形跡があることは注意される。北九州における瓦陶兼業は6世紀末にまでさかのぼる²⁾が、この地方でも7世紀後半代に牛焼谷窯跡で開始されていることは調査報告Ⅰで述べた如くである。八女市域では7～8世紀代の寺院跡、官衙跡などの瓦を使用した遺跡の発見がないので、依然としてその供給先は謎である。また8世紀代には八女地方でも高塚古墳の営造は終了していたと考えられるので、律令制確立期にあたるこの時期の須恵器生産の背景は塚ノ谷窯跡群の場合と同一視することはできないであろう。本窯跡が八女古窯跡群の歴史のなかで最終段階にあたるものではないかとの推察もでき、さらに今後の精査によって確かめる必要があるが、同時期の豊前、筑前、肥後などの須恵窯跡が同一地域に集中して大規模に活動している傾向とくらべれば¹⁾、この時期の八女古窯跡地域は没落期に入っていたことは否定できないように思われる。

塚ノ谷・釘崎・童男山古墳の調査

今回収録した八女古墳群中の三古墳の調査は、八女古窯跡群の調査と併行して企図している須恵器窯跡とその供給古墳の関係、須恵器編年に基づく八女古墳群個々の編年序列を究明する目的のもとにすすめてきた一連の作業に属するものである。八女古墳群は多く開口し、わずかな遺物をのこすのみになったものや、石室のみをのこして出土品不明となったものが少ない現状である。筑紫国造家の墳墓と目される八女古墳群は古代史上解明すべき問題を多くはらんでいるが、国造磐井、その子葛子以後の動向はにわかに不明となっている³⁾。磐井の反乱を契機として没落の途をたどった筑紫国造家の一族の動向をさぐるためにも八女古墳群の精査は要望される場所である。またこの歴史的事件は八女地方の生産活動の上にもどのように反映したであろうか。これまでの調査にもかかわらず、須恵器第Ⅳ期の窯跡が発見できないのはどうしたわけであろうか。第Ⅳ期を空白にしているのは筑紫国造家の没落と関係がありはしないのか。第Ⅲ期と第Ⅴ期以降の生産工人達の間には系譜的交代はないの

であろうか。このような問題が次々と提示されて、古墳群の側でもこれらの各時期に相当するものの実態をつきつめてゆく必要が生じてくるのである。塚ノ谷古墳では塚ノ谷第2号窯跡との需給関係が明らかにされた。また釘崎第3号古墳の第Ⅲ期須恵器からは、中尾谷や塚ノ谷第4号とも別の窯跡が存在する可能性が知られた。

一方、遺物がなく、石室だけしかのこっていない古墳については当然石室の構造、石材の使用法などから年代推定をする方法がなされなければならない。そこで筆者らがここ数年行っている北九州地方における巨石古墳その他の石室古墳の実測調査によってこれまで到達したこの方面での所見を適用して、塚ノ谷古墳、童男山古墳の分析を行なった結果をはじめて披露した。塚ノ谷古墳ではそれが須恵器編年と符合することを確認し、童男山古墳では石積みの方式に新しい時代の方式が導入されていることを確かめ、これまで漠然と7世紀代に比定していた本古墳の年代が6世紀末までさかのぼりうることを論証した。それが八女古墳群における大型石室の終末と考えられていることともあわせて重要である。筆者らの石積技法による横口式石室の分析、編年論はこのほかにも筑前、豊前地域において資料を集積している状況であるから、今後さらに各時期における実態、地域性の問題などを詳細に検討していき、この方法論を完成したいと願っている。

今回の調査ではさらに今回までの調査結果を通じて上述のように提起された問題を追求し、八女古窯跡群、八女古墳群を全体的に把握する方向にすすめたいと考えている。 (小田富士雄)

- 註 (1) 小田富士雄「窯業—九州」日本の考古学Ⅵ・1967
 (2) 小田富士雄・柳田康雄・真野和夫「野添・大浦窯跡群」福岡県文化財調査報告書第43集・1970
 (3) 小田富士雄「磐井の反乱」古代の日本3・1970

九州発見古硯出土遺跡地名表・追補

調査報告Ⅰ(74頁)において、塚ノ谷第1号及び第2号窯跡発見の円面硯に因んで参考までに九州発見の古硯出土遺跡地名表を作成した。その後さらに二、三の追補例を蒐集しえたので加えておく。遺跡及び文献に付した番号は前出地名表に後続するものである。

-
- | | | | |
|----|--------------------|---------------|---------|
| 21 | 筑前・筑紫郡太宰府町観世音寺字住ケ元 | 陶製・円面硯(平安) | 文献10 |
| | | 陶製・八面硯(平安) | " |
| 22 | 筑前・筑紫郡太宰府町観世音寺字露切 | 陶製・円面硯(奈良) | " |
| 23 | 筑前・筑紫郡太宰府町大字太宰府字平野 | 石製・長方硯? | (鎌倉) |
| 24 | 肥後・荒尾市洗出(窯跡) | 陶製・円面硯(奈良~平安) | |
| 25 | 肥後・菊池郡大津町真木 | 石製・長方硯? | (平安~鎌倉) |
| 26 | 豊後・杵築市(地下式横穴) | 石製・風字硯(平安) | |
-

〔文献〕

10. 福岡県教育委員会刊「大宰府史跡—昭和45年度発掘調査の概要—」1971

(小田富士雄)

向から当時の地磁気の方向を知ることはできない。これと違って、窯の焼土、特に床の部分のように使用当時のままの位置を保っている焼土では、その帯磁方向がそのまま当時の地磁気の方向を反映していることになる。熱残留磁気の強さは、磁場の強さが一定ならば、土に含まれる磁気を帯びやすい鉱物の種類と量、それに焼かれる温度によって決まる。温度については、臨界温度があって、それ以下では温度が高いほど残留磁気は強くなるがその温度をこえると、いくら温度を上げてても残留磁気の強さはもはや増大しない。この臨界温度をキュリー温度とよび、鉱物の種類や組成によって異なる。磁鉄鉱では摂氏578度、赤鉄鉱では675度で、この温度以上に熱して残る磁気を飽和熱残留磁気という。窯のように高温に熱せられれば、窯の焼土が帯びているのは、いうまでもなく飽和熱残留磁気である。一旦帯びた熱残留磁気は、落雷などによる強烈な磁場の攪乱にあわない限り安定で、長期間にわたって変化しないが、再びキュリー温度以上に熱せられれば消滅し、冷えるときにはその置かれた新しい磁場の方向に残留磁気を帯びる。従って、古窯の焼土の熱残留磁気の方向は、その窯が最後に使用された当時の地磁気の方向を示すものであり、窯を作り直して二度三度と焼成された場合には、上部の窯の熱が下方の床に伝わり、その温度がキュリー温度以上に達すれば、下方の床の焼土は上部の窯が使用された当時の地磁気の方向を与えることになる。

こうして、古窯の焼土の帯磁方向によって、使用当時の地磁気方位を知ることができるが、その方向から年代を推定するためには、過去における地磁気の方向の永年変化の有様がわかっていなければならない。しかし、地磁気の永年変化の理論は未だ解っていないから、変化の方程式に数値をあてはめて年代を算出する、というようなことはできない。そこで、考古学的に年代のわかる窯の焼土や、古文献から噴火年代のわかる火山の熔岩などを用いて、その熱残留磁気の方向から当時の地磁気の方向を知り、それに基づいて標準となる永年変化の様相を推定するのである。このことについては後に述べる。こうして、窯の焼土の熱残留磁気からえられた地磁気の方向を、この標準の永年変化に照らすことにより、その年代が推定されるのである。

方 法

古窯の焼土の帯びる熱残留磁気は極めて微弱なため、遺跡の現場でその帯磁方向を測定することはできない。そこで遺跡では、後で遺跡のあったときの位置がわかるように処置した小さな焼土塊を採取し、このものを実験室に持ち帰って測定するのである。

試料の採取には、内径 4.3 cm の真鍮製の立方体枠を用い、古窯の床のよく焼けた部分に、この枠が入るほどの溝を作り、その中央にもとの位置を動かさないように焼土塊を残す。

そこで、この焼土塊に枠をはめ、水準器とコンパスを用いて、枠の上面が水平になり、その一辺が現在の磁北を指すように枠の位置を調整した後、枠の中に石膏を流し込んで、中央の焼土塊を枠内に固定する。石膏が固まるのを待って、枠ごと取上げ、下面にも石膏を流し込んで、上下面の余分の石膏を枠面まで削り取った後、枠をはずすと、正立方体の石膏で包埋された焼土の試料ができ上がる。この立方体の上面は現地における水平面、その一辺は磁北の方向を示しているから、これらを基準にして、実験室における測定により、このものの帯磁方向が決定されるのである。磁気測定の誤差を小さくするため、このような焼土の試料を、一つの窯から少なくとも 8 個は採取する。

実験室においては、磁気測定に先立ち、試料を空気循環装置を備えた電気炉内にて、摂氏130~150度で1~2時間加熱し、地球磁場を消去した無磁場内で室温まで冷ます。この処置は、焼土が熱残留磁気の外に帯びている、粘性磁気とよぶ不安定な磁気を除去するためである。試料の磁気測定には、無定位磁力計を用いるが感度を上げるため、磁力計は3軸方向のヘルムホルツ・コイルによって地磁気を消去した無磁場内に設置してある。個々の試料について、立方体の3軸のそれぞれの回りに、試料を90度ずつ回転し、軸の方向を逆にして同じく90度ずつ回転して、その都度磁力計の読みをとるから、1個の試料につき計24方向の磁気の強さを測定することになる。これらを平均して3軸方向の磁気の強さを計算し、それを基に偏角・伏角の大きさを求めるのである。

一つの窯から採取した個々の試料の帯磁方向を集計して、数学的に最も確からしい、当時の地磁気の方角を決定するには、Fisher¹⁾の方法に従い、個々の試料の帯磁方向を表わす単位ベクトルの和を求めればよい。この平均方位の信頼度を示すために、5パーセントの危険率における信頼限界の角度も計算する。これは、試料から推定される最も確かな方位が、平均方向の回りにこの信頼限界の角度以上に外れる確率は、5パーセントにすぎないことを意味する。

塚ノ谷古窯の試料の測定に当り、粘性磁気除去のための熱消磁条件は摂氏150度で1時間、無定位磁力計の感度は 10^{-5} emu/cmであった。

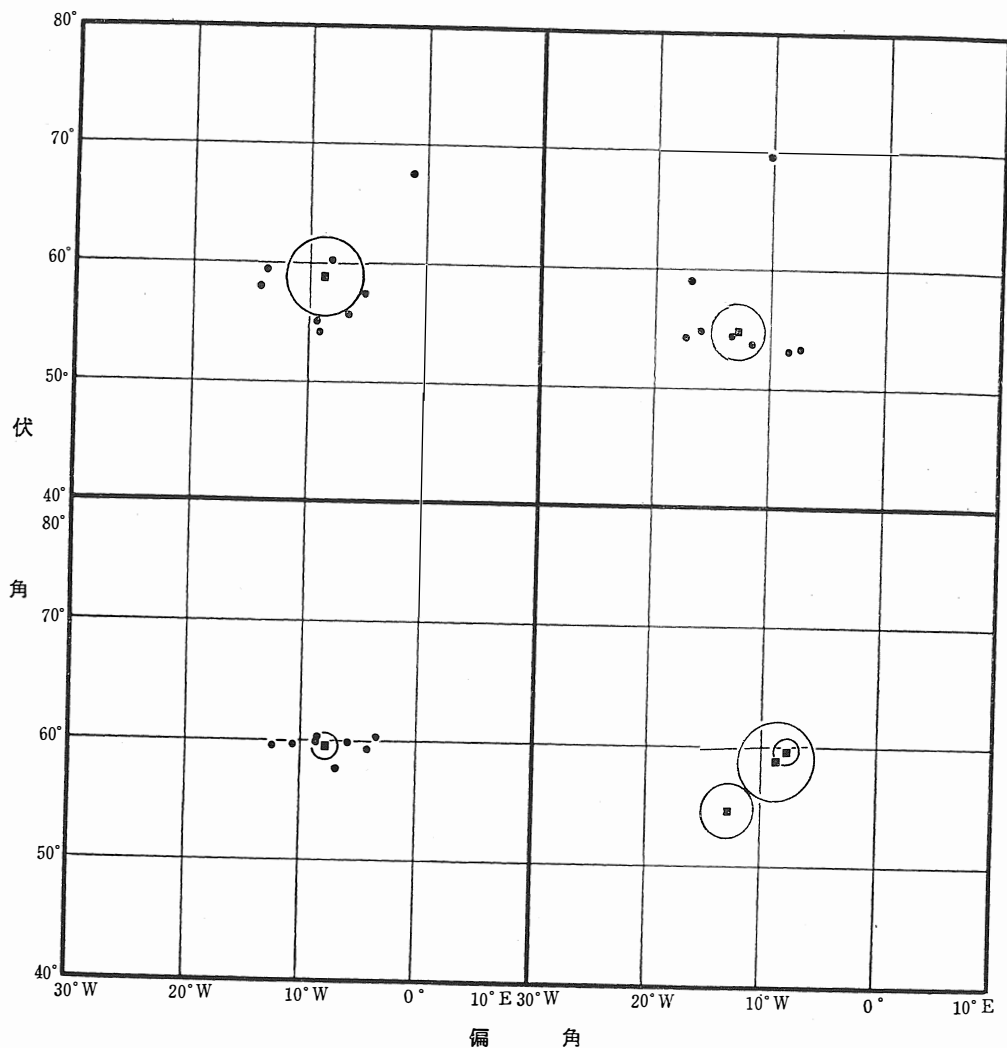
試料と帯磁方向

試料は1号、2号および4号の3基の窯から採取した。1号と2号の窯では焚口、4号窯では焚口より稍、奥の部分の床面を選び、採取した試料の数はいずれも8個である。1号窯の試料の焼土は、黄褐色粘土質で、ときに粘板岩の小片を含み、2号窯のものは黒色砂質で、やはりときに粘板岩片を含む。4号窯のものは煉瓦色粘土質で固結しており、特に焼成は良好であるように思われた。道路脇に一部露出していた3号窯からは、道路工事のため試料を採取しなかった。

各窯の試料の磁気測定によってえられた平均方位、5パーセントの危険率における信頼限界の値を第一表に掲げる。偏角の値は地理子午面に対する偏りの角度、つまり北極星の北に対する偏角である。遺跡における現在の磁北に対する試料の偏角を、地理子午面に対する偏角に換算するには、八女地方における現在の偏角を5.8度西として計算した。2号窯の試料のうち、1個の帯磁方向は他のものから著しくかけ離れている。各試料の帯磁方向の分布を平均方位との間の角度の分布に直して統計的に検定した結果、この試料の帯磁方向は5パーセントの危険率で棄却できることがわかったので、平均値の計算からは除いた。各窯についての個々の試料の帯磁方向の分布を、簡便のため方眼図に投影して、第一図に示す。2号窯の試料で棄却されたものは、図中、偏角10.2度西、伏角69.4度のもの

第1表 塚ノ谷古窯焼土の熱残留磁気測定結果

窯	試料数	偏角	伏角	信頼限界
1号	8	8.7°W	58.8	3.3
2号	7	12.9°W	54.8	2.3
4号	8	7.8°W	59.6	1.1



第 1 図 塚ノ谷古窯の熱残留磁気測定結果

左上は1号窯、右上は2号窯、左下は4号窯、黒丸は個々の試料の帯磁方向、黒四角はそれらの平均値、円は5パーセントの危険率における信頼限界を示す。右下は1号、2号、4号窯のそれぞれの平均値と信頼限界のみを、比較のため、まとめて投影したもの。

である。1号窯の試料のうちにも、1個は他のものからかけ離れているが、2号窯の場合と同様の棄却検定を行なった結果、このものは統計的に棄却できないことがわかったので、平均値はこのものを含めて計算した値である。

各窯の平均方位を比較すると、1号窯と4号窯は偏角・伏角とも近似しており、2号窯のみがこれらと少々隔っている。しかし、信頼限界の大きさを考慮すると、2号窯と4号窯との間には明らかに差があるように見えるが、2号窯と1号窯との間には、差があるといえないかもしれない。これら3基の窯の帯磁方向に、果して差があるといえるか否かを、数学的に検定してみた。それには、ある二つの窯の平均値の差を、平均方位の間の角度で表わし、各窯の試料の帯磁方向の分布を、その窯の平均方位と各試料の帯磁方向との間の角度の分布として扱くと、2号と4号窯の平均方位の間には5.5

度の開きがあり、この差は1パーセントの危険率で有意である。しかし、1号窯と2号窯の平均値の差は4.6度であるが、統計的には僅かなところで有意の差があるとはいえない。1号窯と4号窯とでは、平均方位は0.9度の開きしかなく、この差は無論有意ではない。換言すれば、各窯の熱残留磁気反映する当時の地磁気方向からみて、2号窯と4号窯の間には明らかに年代の差があるといえる。1号窯と2号窯との間には数学的に明らかに差があるとはいえないが、年代が異っている公算は大きい。一方、1号窯と4号窯との間では、平均方位が近似し、有意の差はないが、このことは両窯が同時代に近いことを必ずしも意味しない。これは、1号窯の平均値の信頼限界が4号窯のものに較べてかなり大きいからである。

年 代 推 定

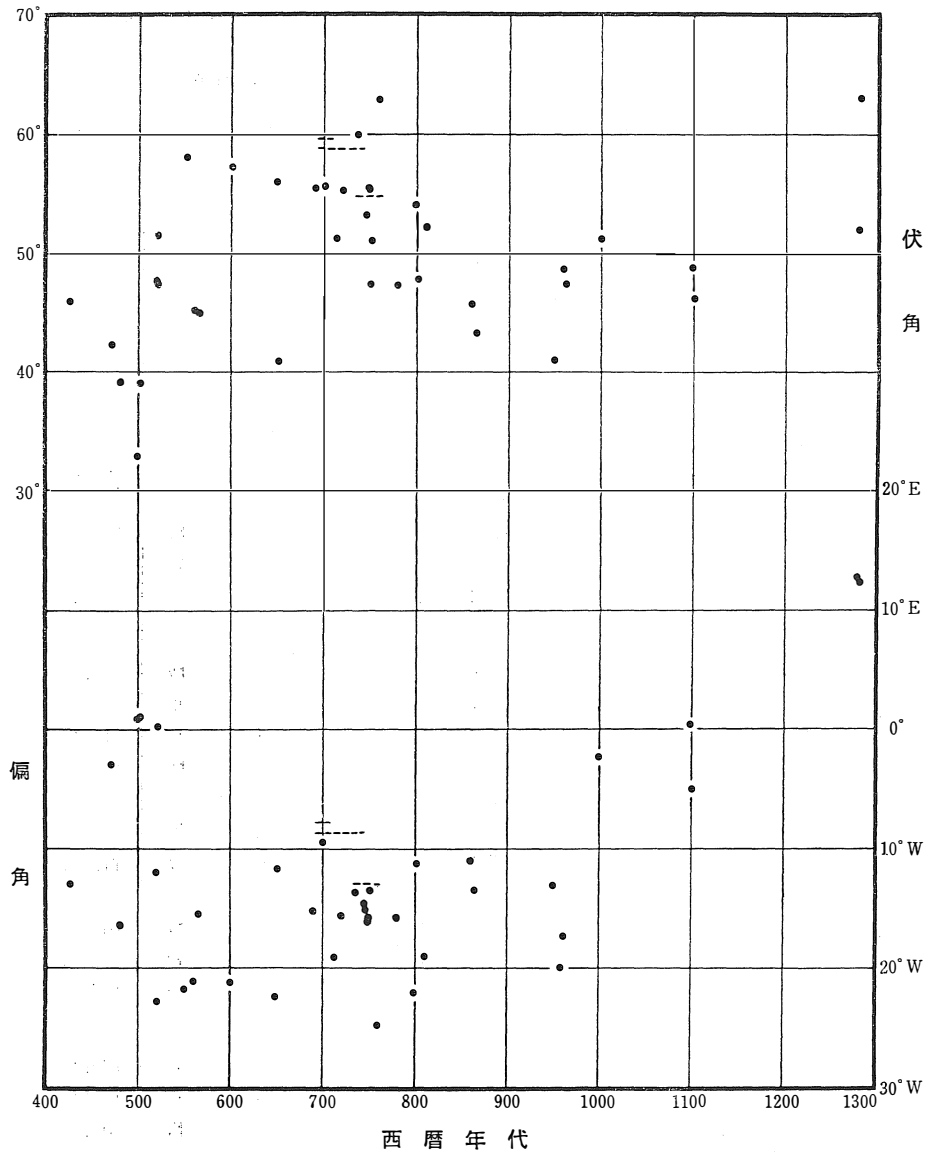
これらの測定結果から年代を推定する基準となる、過去の地磁気方位の永年変化について、著者はかつて、過去2000年間にわたる、偏角と伏角の永年変化曲線を作成したことがある²⁾。そのときには地磁気の実測記録や、噴火年代既知の火山の熔岩などからえた地磁気方位を基にして、現在に近い時代の永年変化曲線をまず作成し、同様の変化が過去にも繰返えされたと仮定して、その曲線を外押したのである。その際参考にした試料は、弥生時代の竪穴の焔、土師竪穴の竈、歴史時代の古窯の焼土であったが、このうち土師竪穴の竈の焼土は一般に焼成が悪く、測定誤差の極めて大きい結果しかえられなかった。しかも、材料は関東を主とする愛知以来のものであったから、特に古墳時代から歴史時代のはじめにかけては、永年変化曲線を十分に裏付ける年代既知試料に恵まれなかった。その後、平城宮趾の発掘調査などによって、須恵器の実年代を知る手掛りがえられたため、これと考古学的な須恵器や窯の構造の型式の変化とを結びつけて、ある程度の窯の年代が推定されるようになった。また、火山の熔岩や火山灰についても、詳細な層位学的研究によって、古文献の火山噴火記録に照して、従来よりも信頼できる年代を推定することも行なわれた。こうした背景の下に、古窯や熔岩の熱残留磁気測定によって、今まで資料の不足していた古墳時代から歴史時代にかけての地磁気方位が、次第に補充されるようになった。その結果、それぞれの研究者が妥当と思う永年変化曲線が幾つか発表されているが、それらを比較してみると、大凡の傾向は似ているものの、細部に亘ってはかなり不一致の様相が認められる。特に、同一測定者による、推定年代の極く近い材料の測定結果が、著しくかけ離れているものがあり、それらに基づいて作成された永年変化曲線が如何ほどの意味をもつものかについても、疑問の余地がある。従って、上述の塚ノ谷古窯の磁気測定結果から、その年代を推定するに当っては、それらの永年変化曲線に準拠するよりは、むしろ、その基となった個々の測定値の分布を対照とする方が妥当である。

今迄に発表された、年代の推定されている磁気測定結果は第2表および第2図に掲げる通りである。この外に、筆者がかつて報告した以後に採集し測定した結果のうちには、その後の考古学的研究の結果から、年代の推定されるものもあるが、推定年代について充分検討する余剰がなかったので、ここには、一二のものを除き、割愛することにした。これらについては、整理の上近く発表する積りである。

第2表に掲げた川井外³⁾⁴⁾の資料の年代は考古学者によって推定されるものであるが、その根拠は

第 2 表 熱残留磁気による 5~13世紀の地磁気永年変化に関する測定値

番号	推定年代	試料数	偏 角	伏 角	信頼限界	試料採取地	文 献
1	1280 ± 50	7	12.4 E	63.1	8.1	愛 知	川井外 1965
2	"	7	12.8 E	54.0	4.1	"	"
3	1100	11	5.0 W	46.2	1.1	東 京	行武外 1964 b
4	"	48	0.4 E	48.8	5.0	"	"
5	1000 ± 20	10	4.3 W	51.2	5.2	愛 知	川井外 1965
6	960 ± 20	9	17.4 W	47.5	7.3	"	"
7	"	9	20.0 W	48.7	1.5	"	渡 辺 1959
8	950 ± 40	9	13.1 W	41.0	2.8	東 京	行武外 1964 a
9	864	10	13.4 W	43.3		山 梨	永 田 1943
10	860 ± 30	11	11.0 W	45.8	4.7	東 京	行武外 1964 a
11	810 ± 20	11	19.1 W	52.2	7.6	大 阪	川井外 1965
12	800 ± 10	6	11.3 W	47.8	9.3	愛 知	"
13	"	10	22.1 W	54.1	3.3	"	渡 辺 1959
14	780 ± 20	14	15.8 W	47.4	3.8	大 阪	川井外 1965
15	760 ± 20	14	24.8 W	63.0	4.6	三 重	"
16	750 ± 100	7	13.5 W	51.1	3.8	東 京	行武外 1964 a
17	750 ± 40	14	15.8 W	47.4	3.8	大 阪	川井外 1964
18	"	8	16.1 W	55.4	6.0	"	"
19	750 ± 20	9	15.2 W	55.5	6.3	愛 知	"
20	745 ± 5	7	14.7 W	53.2	1.6	奈 良	百瀬外 1964
21	735 ± 15	9	13.7 W	60.0	3.0	"	"
22	720 ± 20	14	15.6 W	55.3	4.2	大 阪	川井外 1965
23	713~	5	19.1 W	51.3	2.7	大 京	百瀬外 1964
24	700 ± 20	16	9.5 W	55.6	4.5	三 重	川井外 1965
25	690 ± 10	9	15.2 W	55.5	6.3	愛 知	川井外 1965
26	650 ± 100	7	11.7 W	40.9	6.3	東 京	行武外 1964 a
27	650 ± 50	29	22.4 W	56.0	1.9	大 阪	川井外 1964
28	600 ± 20	13	21.3 W	57.2	3.1	京 都	川井外 1965
29	565 ± 15	3	15.5 W	45.0	2.5	大 阪	百瀬外 1964
30	560 ± 20	5	21.1 W	45.2	7.6	"	"
31	550 ± 20	4	21.8 W	58.1	2.8	"	川井外 1964
32	520 ± 20	9	0.2 E	47.3	4.6	"	川井外 1965
33	"	6	22.8 W	51.5	3.4	"	川井外 1964
34	"	11	12.0 W	47.6	3.1	"	"
35	500	9	1.0 E	39.0	4.5	東 京	行武外 1964 a
36	"	10	0.8 E	33.0	8.2	"	"
37	480 ± 10	14	16.4 W	49.2	2.9	三 重	川井外 1965
38	470 ± 30	10	2.9 W	42.3	5.8	大 阪	"
39	420 ± 130	8	13.0 W	45.9	1.7	"	渡 辺 未発表



第 2 図 熱残留磁気による 5~13 世紀の地磁気永年変化に関する測定値

黒丸は第 2 表の各測定値の偏角、伏角のみを投影したもの。点線は、塚ノ谷古窯の焼土の磁気測定による偏角、伏角の値を投影したもので、黒丸の測定値と比較して、各古窯が営まれた公算の最も大きいと判定された年代範囲を、点線の長さで示してある。

明らかにされていない。恐らく、各窯の出土須恵器の型式や窯の構造による型式学的編年に従い、そのうち平城宮趾などから実年代の推定される窯の年代を基準にして、各窯の年代を割り振ったものである。川井外の1964年³⁾と1965年⁴⁾の論文の同じ窯の推定年代を比較すると、例えば第 2 表の 5 番は1964年の論文では 1120 ± 50 年となっているのが、1965年のものでは 1000 ± 20 、6 番は 1000 ± 40 年が 960 ± 20 、11番 950 ± 50 年が 810 ± 20 、12番は 920 ± 20 年が 800 ± 10 年等々、1 世紀以上も変更されたものもある。従って、 ± 10 年、 ± 20 年などと付せられている誤差は、推定年代の信頼性を表わしているように見えるが、実際にはそれほど意味のあるものではないことに注意する必要がある。7 番と13番

は、それぞれ6番と12番と同じ窯の焼土を著者がかつて測定した値である。9番の永田⁵⁾の値は、486年7月17日の富士山の噴火の際、噴出した熔岩流によって、一つの湖が現在の西湖と精進湖に分かれた、という古記録に対応する富士山青木ヶ原の熔岩からえられたものである。行武外⁶⁾のものは、いずれも大島三原山の熔岩または火山灰層の磁気測定による結果で、年代は噴火古記録およびC—14年代に基づいて推定されている。百瀬外⁸⁾の測定は、奈良時代の瓦窯について行なわれたもので、特に23番は奈良興福寺の瓦を焼いた窯のものである。ほかに29番、京都高倉の窯の測定結果が加えられている。39番の著者の値は、森浩一氏が発掘した堺市登美丘町の西野窯北窯のものであるが、推定年代は、同窯出土木炭について、理化学研究所で測定したC—14年代 1530±130年 B.P. (N-109) を西暦年代に直した値である。森氏による考古学的推定年代は6世紀前半乃至中葉ということであった。C—14年代はそのまま実年代を与えているわけではないが、第2表には仮にC—14年代をとって掲げておいた。以上の説明の通り、第2表の推定年代は必ずしも信頼できる年代とはいえないが、今のところ利用できる資料としては、これら以外に無いのである。

塚ノ谷古窯の測定結果をこれらの値と比較するに当って、さらに考慮すべきことは、地磁気の方向は時間的に変化するばかりでなく、緯度、経度によっても異なるという事実である。このような地磁気方位の地理的変異は、全国に設定されている磁気観測点について、毎年行なわれている地磁気測定により、明治以降の様相は詳細にわかっている。これは等しい偏角や伏角の値をとる地点を結んだ、等偏角線、等伏角線によって一目瞭然である⁹⁾。それによると、例えば現在八女市と東京との間では、偏角で約0.8度、伏角で約1.9度、八女市と京都では、偏角約0.9度、伏角約1.9度、八女市と堺市では偏角約0.6度、伏角約1.0度の差がある。地理的に異なる地域の試料について、熱残留磁気の測定によってえられた過去の地磁気方位を互に比較する場合には、一般に、地磁気の永年変化は過去から現在まで各地で同じように起ったという仮定の下に、測定結果を、現在の地磁気方位の地理的な差を基にして、ある一定の場所での値に換算することが行なわれている。第2表に示した測定値のうち、川井外⁷⁾のものは京都、行武外および永田のものは東京の値に、それぞれ今述べたような仮定により、補正を加えて換算したものである。百瀬外および著者の値は、こうした補正を施さない、それぞれの試料採取地での値をそのまま掲げてある。

地磁気の永年変化が、各地で同じように行なわれたという仮定については、特に18世紀に外国船により日本近海で測定された偏角の地理的変異を、現在の同地域の変異と比較したところ、明らかに異なっていることがわかった⁹⁾。伏角の値は大勢において緯度と平行するので、過去から現在まで大差ないものと思われるが、偏角に関しては、等偏角線で表わされる地理的変異は、時代によりかなり異なることが予想される。従って、上述の仮定に基づいて東京あるいは京都の値に換算された偏角の値は、当時の東京あるいは京都の偏角の値とはかなり違っている可能性がある。しかし、第2表に換げた測定値の試料採取地は、愛知・三重・奈良・京都・大阪・東京・山梨に限られており、現在におけるこれらの地域相互の偏角・伏角の値の差は、偏角で0.5度、伏角で1.0度以内であるから、補正値は殆んど信頼限界の範囲内で、試料採取地の値と大差ないとみて差支えない。また、さきに挙げたように、八女市とこれらの各地の現在における地磁気方位の差も、偏角で1度、伏角で2度以内であるから、これも差としては小さい値である。問題はむしろ、当時の等偏角線、等伏角線、特に前者がどのように

走っていたかであり、それが現在のように東西方向でなく、南北方向に向っていたとすれば、八女市と東京・愛知・奈良・大阪などとの間にも、数度の差がありうるわけである。しかし、今のところ、この問題を解決できるような地磁気に関する理論も、また経験的な資料もない。従って、塚ノ谷古窯の測定結果を、第2表に掲げた偏角・伏角の値と比較し、それに対応する推定年代によって、その年代を判定するほかはない。

塚ノ谷各古窯からえられた地磁気方位にはそれぞれ信頼限界がついており、第2表に示した5世紀から13世紀にわたる各時代の地磁気方位にもそれぞれ信頼限界が付されている。従って、これらと比較するには、各平均方位に信頼限界の範囲を考慮に入れて、比較しなければならない。地磁気の方向を偏角・伏角で表わしたとき、信頼限界は、第1図に示したように、平均方位を中心とする円で表わすことができる。何個かの試料の測定結果から推定される最も確からしい当時の地磁気方位が、この円内にある確率は95パーセントであるが、その方位が円内のどこにあるかはわからない。偏角でも伏角でも、信頼限界の範囲内で如何なる値をもとりうるわけであるが、偏角と伏角が同時に、信頼限界として示されている角度を加えまた減じた値をとることはできない。仮に偏角が信頼限界の端の値をとるとすると、第1図の円をみればわかるように、伏角の値は平均値以外の値をとることはできない。同様に伏角が信頼限界の極限の値をとるときは、偏角は平均値をとる外はない。偏角・伏角の片方が平均値からはなれるにつれて、他方のとりうる値の範囲は次第に狭くなる。このことを数字で示すと、偏角あるいは伏角の片方が平均値から信頼限界の大きさの20、40、60、80パーセント外れると、他方がとりうる値は、平均値を中心に、信頼限界の大きさの98、92、80、60パーセントの範囲内である。片方が信頼限界の90、95パーセント外れると、他方の値は平均値から信頼限界の44、31パーセントの幅しか許容されないのである。

なお、塚ノ谷古窯の測定値を第2表の値と比較する場合に、偏角・伏角の平均値では互にかなり隔っていても、信頼限界の大きさが大きければ、両者の信頼限界が部分的に重り合い、あるいは片方の信頼限界が他方の平均値を包含することがあるであろう。熱残留磁気が地磁気の方法を忠実に反映し、その測定結果から地磁気の方法を推定するとすれば、真実の地磁気の方法は一つであり、信頼限界は真実の地磁気の方法に相当する最も確からしい方法が、高い確率で存在すべき範囲である。従って、信頼限界が大きいということは、唯一つしかありえない真実の地磁気の方法に対応する、最も確からしい方法のありうる範囲が広いことであって、偶々塚ノ谷古窯の測定値の信頼限界と重り合った部分に、その真実の値が含有される確率は、信頼限界の大きさが大きく、重り合う部分が小さいほど小さい。従って、信頼限界が部分的に重り合うにしても、信頼現界が小さければ小さいほど、その重り合った部分に真の地磁気の方法が含まれる公算は大きいわけである。換言すれば、信頼限界の大きさは、平均値の信頼性を表わす尺度であり、これが大きいものは、例えその中に比較される値が含まれたとしても、小さな信頼限界に含まれた場合に比べれば、両者の近似を意味する度合いは格段と低いのである。

以上述べた諸点を考慮に入れて、まず第1表に示した塚ノ谷1号窯の測定結果を、第2表の値と比較してみよう。この窯の値の信頼限界は他の2窯のものに比べると大きく、平均偏角8.7度西、伏角58.8度に信頼限界3.3度を加味した値は、偏角5.4~12.0度西、伏角55.5~62.1度である。第2表の上

から比較していくと、信頼限界の範囲で部分的に重り合うものを、番号順に推定年代・信頼限界の大きさとともに記すと、次の通りである。

5番	1000年	5.2度
11番	810年	7.6度
12番	800年	9.3度
18番	750年	6.0度
19番	750年	6.3度
21番	735年	3.0度
22番	720年	4.2度
24番	700年	4.5度
25番	690年	6.3度

このうち、5番の1000年は、偏角はいいが、伏角は信頼限界の極限に近いところで、辛うじて1号窯の信頼限界と重っており、この重複は余り意味がない。11と12番は平均値ではかなり離れているが、信頼限界が大きいと重り合う部分が生じたまでで、これも除外して差支えない。

18、19、25番は、互に平均値は略々同じで、信頼限界も同じように6度ほどでかなり大きい。これらとやはり同じ位の平均値を示す22番では、信頼限界は4.2度でやや小さいが、この場合は、伏角は1号窯の信頼限界とかなり重り合うが、偏角は辛うじて重る程度である。結局、残りの21と24番が、偏角においても伏角においても、1号窯の値に最も近いといえる。年代にして、735±15年と700±20年である。

次に1号窯と平均値は近いが、信頼限界がはるかに小さい4号窯について検討すると、この窯では、平均値は偏角7.8度西、伏角59.6度、信頼限界1.1度を加味した角度は、偏角6.7～8.9度西、伏角58.5～60.7度である。1号窯の場合と同様、第2表の値のうち、部分的に信頼限界が重り合う例をあげると、次の通りである。

19番	750年	6.3度
24番	700年	4.5度

このうち19番は偏角が信頼限界の極限の値をとったときにのみに4号窯の信頼限界の極限の値と一致しているにすぎないので、除外する。結局、4号窯の値に適合しているのは24番のみとなり、その推定年代は700±20年である。

最後に2号窯についてみると、第1表から平均値は偏角12.9度西、伏角54.8度で、信頼限界2.3度を加味した値は、偏角10.6～15.2度西、伏角52.5～57.1度である。信頼限界の範囲でこれと重なる値を第2表から拾い出すと、次の通りである。

6番	960年	7.3度
11番	810年	7.6度
12番	800年	9.3度
16番	750年	3.8度
18番	750年	6.0度

19番	750年	6.3度
20番	745年	1.6度
21番	735年	3.0度
22番	720年	4.2度
24番	700年	4.5度
25番	690年	6.5度
30番	560年	7.6度

このうち6、11、12、30番は、信頼限界が大きいため、重り合う部分が生じた部類に属するので除外する。21番は信頼限界は小さいが、伏角が辛うじて重り合う程度なので、これも除くことにする。残りの7例のうち、18、19、25番のように、信頼限界が6度以上で大きいものもあるが、伏角はいずれも2号窯の平均値に近く、偏角も2号窯の信頼限界の境あたりにある。特に注目すべきは、20番が1.6度という充分に小さい信頼限界をもって、2号窯の平均値を殆んどその限界内に含みこもうとする位に、偏角・伏角とも極めて近似した値を示していることである。16、22、24番も、信頼限界はこれよりやや大きい、やはり2号窯の平均値をその信頼限界内に納めている。結局、2号窯に最も近いものは、20番で、16、22、24番がこれに次ぎ、さらに18、19、25番が続く。推定年代でいえば、 745 ± 5 年を中心に、 750 ± 100 、 720 ± 20 、 700 ± 20 年がこれに次ぎ、 750 ± 40 、 750 ± 20 、 690 ± 10 が続くことになる。

結 論

以上のようにして、第1表に示した塚ノ谷1号、2号、4号窯の焼土の熱残留磁気の測定結果からえられた、当時の地磁気方位を、第2表に掲げた諸家の測定結果に照らし、最も近似した偏角・伏角の値に相当する推定年代を以って、塚ノ谷古窯の年代を表わすとすれば、およそ次の如く総括することができる。塚ノ谷1号窯は、 700 ± 20 あるいは 735 ± 15 年前後に営まれた公算が最も大きく、次に 690 ± 10 、 750 ± 20 、 750 ± 40 の何れかに近い時期が考えられる。

2号窯は 745 ± 5 年前後に用いられた公算が最も大きく、次に 700 ± 20 、 720 ± 20 、 750 ± 100 年に近いある時期、さらには 690 ± 10 、 750 ± 40 、 750 ± 20 年の何れかに近い時期が考えられる。

4号窯については、 700 ± 20 年前後に比定する以外には、第2表中に充分近似する例がない。

各窯が営まれた公算の最も大きい推定年代をとるならば、4号窯は2号窯よりも古く、前者の 700 ± 20 年に対して、後者は 745 ± 5 年前後であり、1号窯は、4号窯と大差のない 700 ± 20 年前後が、さもなければ 735 ± 15 年前後で後者の場合には、4号窯よりは新しく、2号窯の 745 ± 5 年と比べて、2号窯よりは古いとみてよいであろう。

換言すれば、1号窯は7世紀末から8世紀前半、2号窯は8世紀中葉、4号窯は7世紀末から8世紀初頭に営まれたと推定される。

これらの年代は、以上の操作過程からわかるように、第2表の諸家による推定年代をそのまま利用して、判定したものである。従って、諸家による推定年代に誤りがあれば、塚ノ谷古窯の年代もまた誤りとなるが、この点については確かめる資料を今のところもちあわせていない。なお、ここにえら

れた塚ノ谷古窯の磁気年代は、現在利用できる過去の永年変化に関する測定値の及ぶ限りの範囲で判定したものである。今後、測定値が増加すれば、さらにこれ以外に該当する塚ノ谷古窯の磁気年代が推定されるかも知れず、また、改訂を必要とすることになるかも知れない。

引用文献

- 1) Fisher, R., 1953. Dispersion on a sphere. Proc. Roy. Soc. 217A, 295-305.
- 2) Watanabe, N., 1959. The direction of remanent magnetism of baked earth and its application to chronology for anthropology and archaeology in Japan. J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sec. V, 2, 1-188.
- 3) Kawai, N., K. Hirooka, S. Asajima, K. Yasukawa, H. Ito and S. Kume, 1964. Archaeomagnetic studies in southwestern Japan. 1964 Annual Progress Report of the Rock Magnetism Research Group in Japan, 39-43.
- 4) ———, 1965. Archaeomagnetic studies in southwestern Japan. Ann. Geophys., 21, 574-578.
- 5) Nagata, T., 1943. The natural remanent magnetism of volcanic rocks and its relation to geomagnetic phenomena. Bull. Earthq. Res. Inst., 21, 1-191.
- 6) Yuiutake, T., M. Sawada and T. Yabu, 1964 a. Magnetization of ash-fall tuffs of Oshima volcano, Izu, I; Magnetization of ash-fall tuffs. Application to archaeomagnetism and volcanology. J. Geomag. Geoelectr., 16, 178-182.
- 7) Yukutake, T., K. Nakamura and K. Horai, 1964b. Magnetization of ash-fall tuffs of Oshima volcano, Izu, II; Application to archaeomagnetism and volcanology. J. Geomag. Geoelectr., 16, 183-193.
- 8) Momose, K., K. Kobayashi, K. Tsuboi and M. Tanaka, 1964. Archaeomagnetism during the Old Tomb and the Nara periods. 1964 Annual Progress Report of the Rock Magnetism Research Group in Japan, 33-38.
- 9) Watanabe, N., 1971. Magnetic dating of the beginning of porcelain manufacture in Japan. J. Fac. Sci. Sec. V, 4. (in press)

管の谷窯跡群

一八女古窯跡群調査報告 Ⅲ一
塚ノ谷・釘崎・童男山古墳

昭和46年3月31日発行

発行 八女市教育委員会
福岡県八女市大字本町586番地

印刷 福岡印刷株式会社
福岡市舞鶴1丁目2の5

图

版

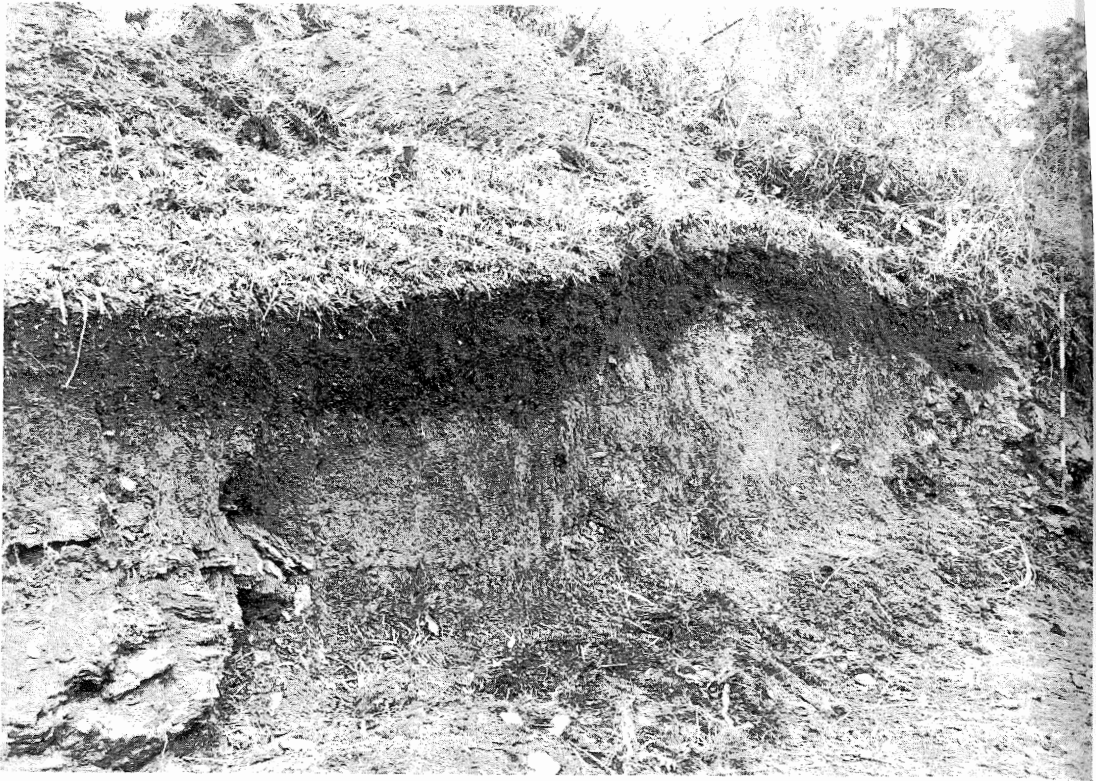
図版第二 管ノ谷窯跡(一)



管ノ谷第1号(1)・第2号(2)窯跡遠望



管ノ谷第1号窯跡遠景



灰原の状態（横断面）



天井部残存状態

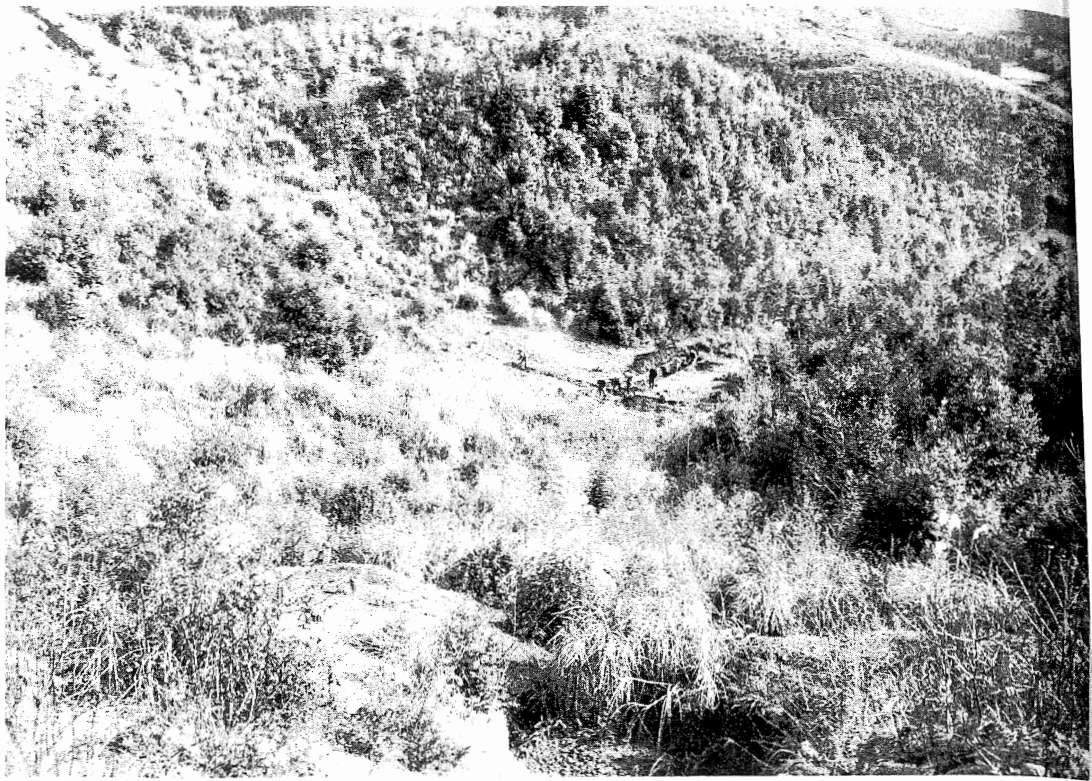
図版第四 管ノ谷窯跡(三)



窯内全景 (煙出し方より)

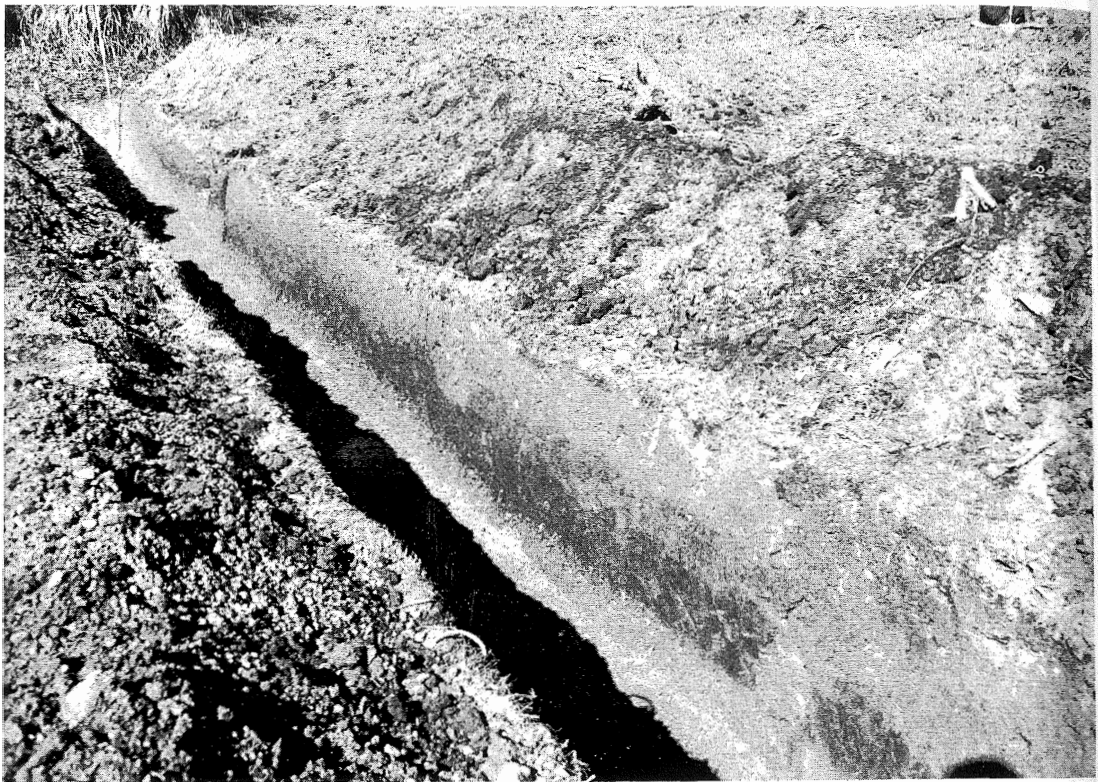


窯内全景 (下方より)



塚ノ谷凹地全景

(塚ノ谷第1号窯跡)

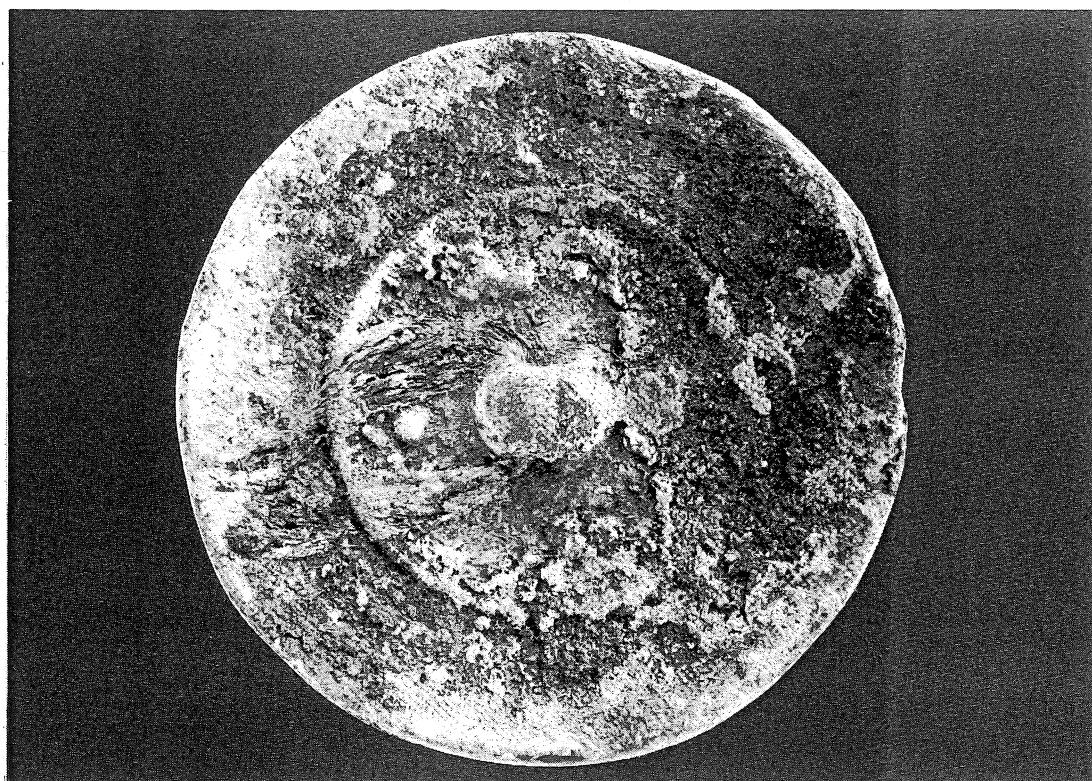


塚ノ谷凹地NW-E S トレンチ

図版第六

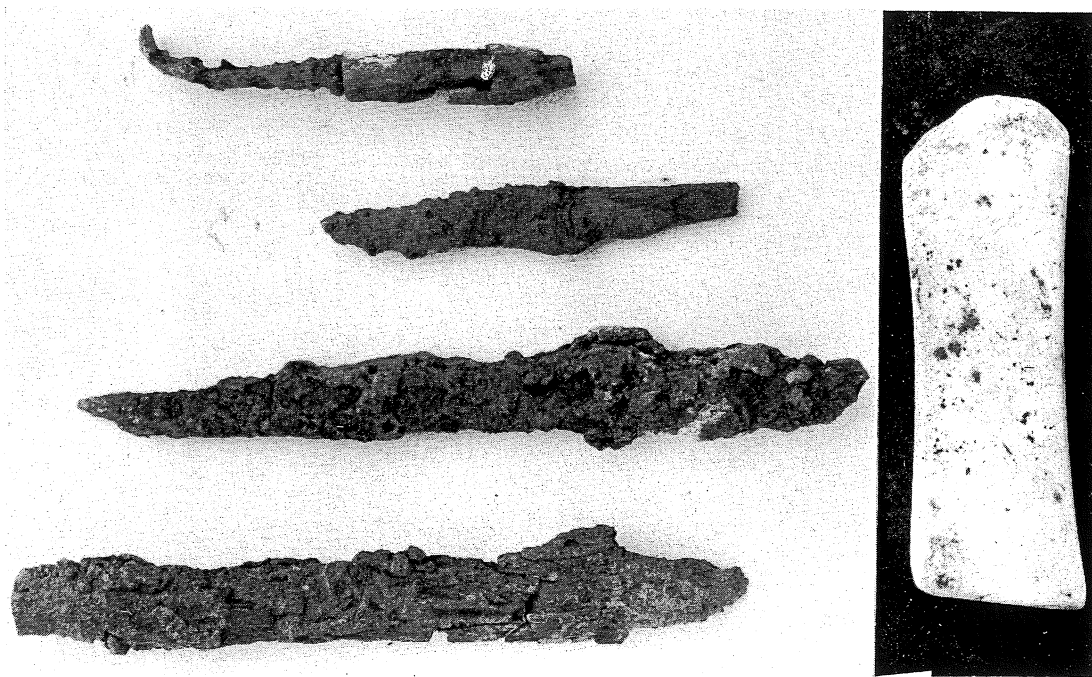
釘崎古墳(一)

鏡鑑・工具・砥石



仿製平縁四乳文鏡

(実大)



鉞・刀子・砥石

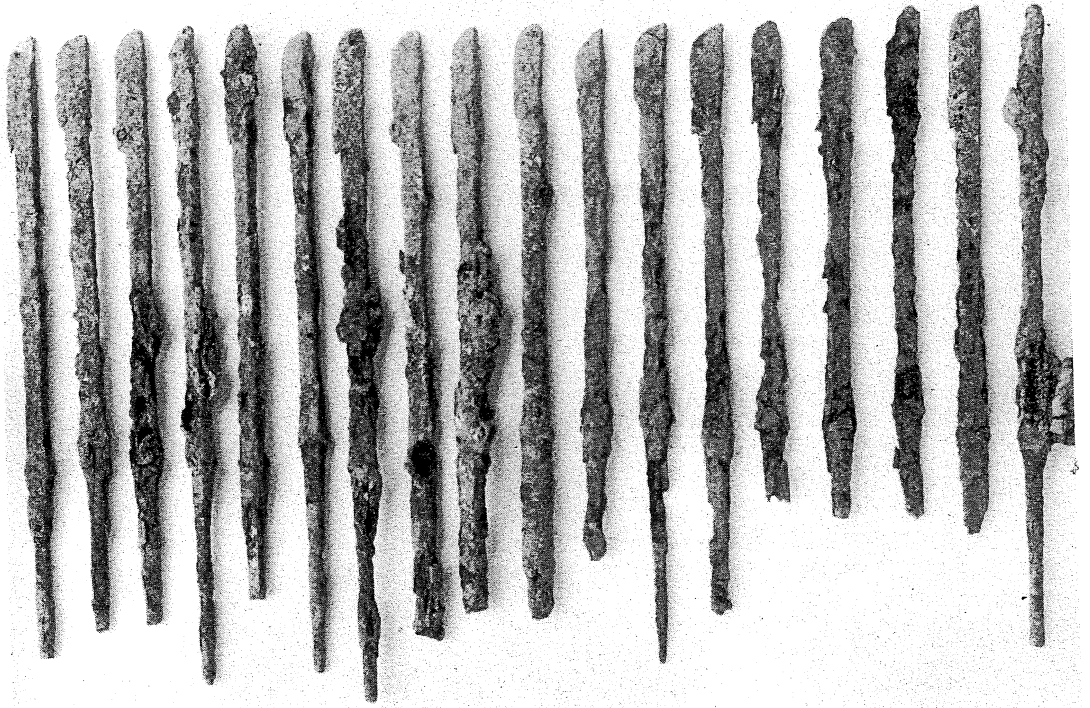


環頭太刀柄部
(実大)

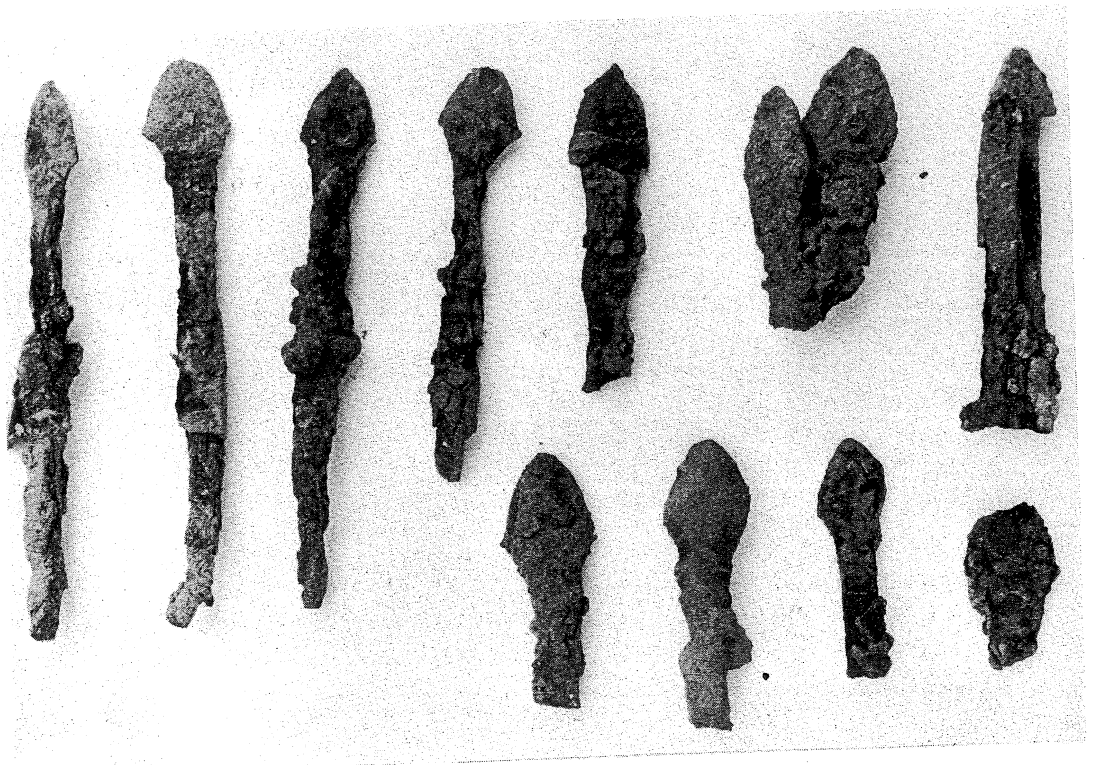


銀銅飾板部分
(二・五倍大)

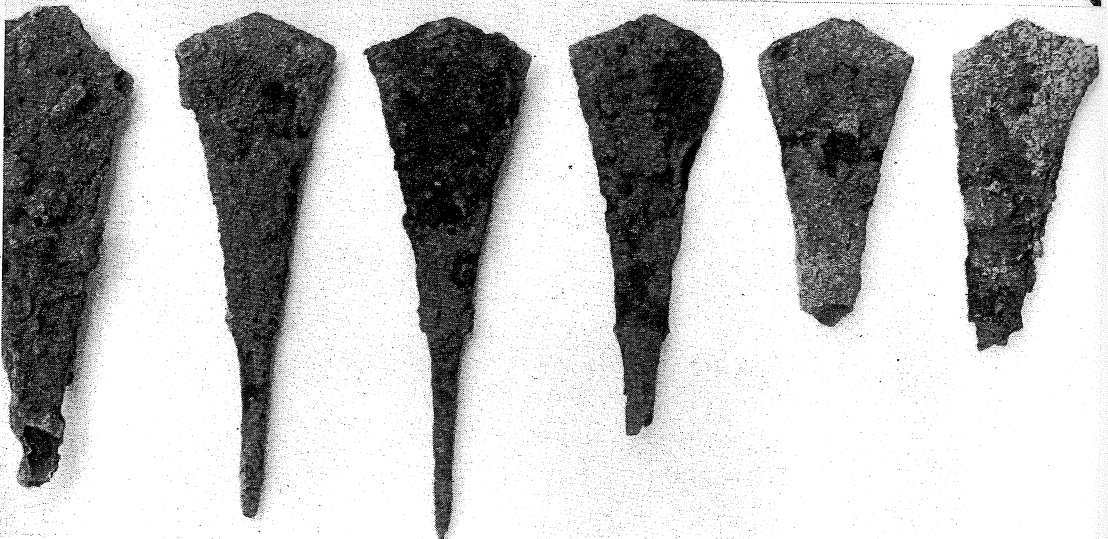
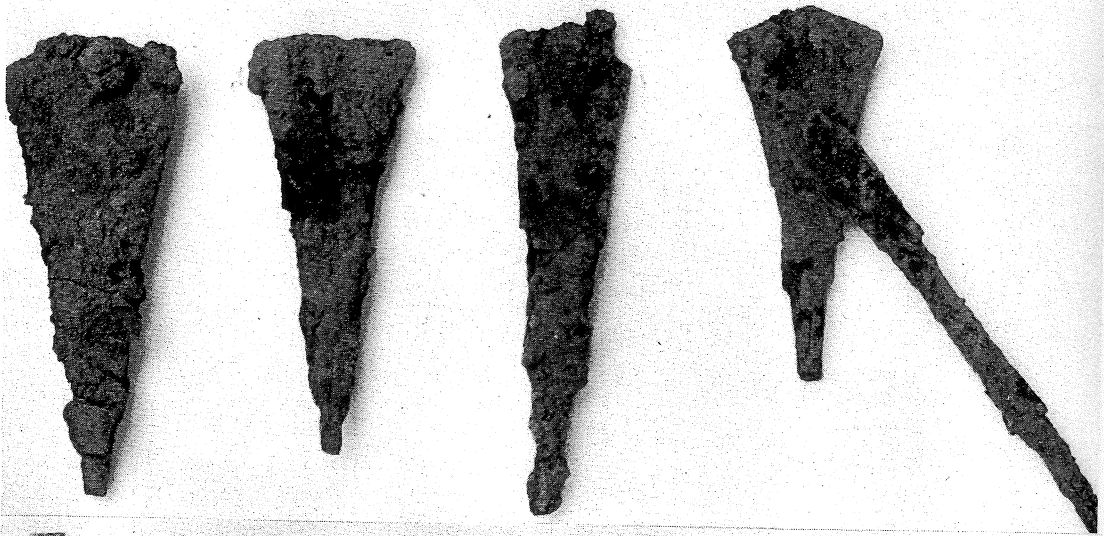
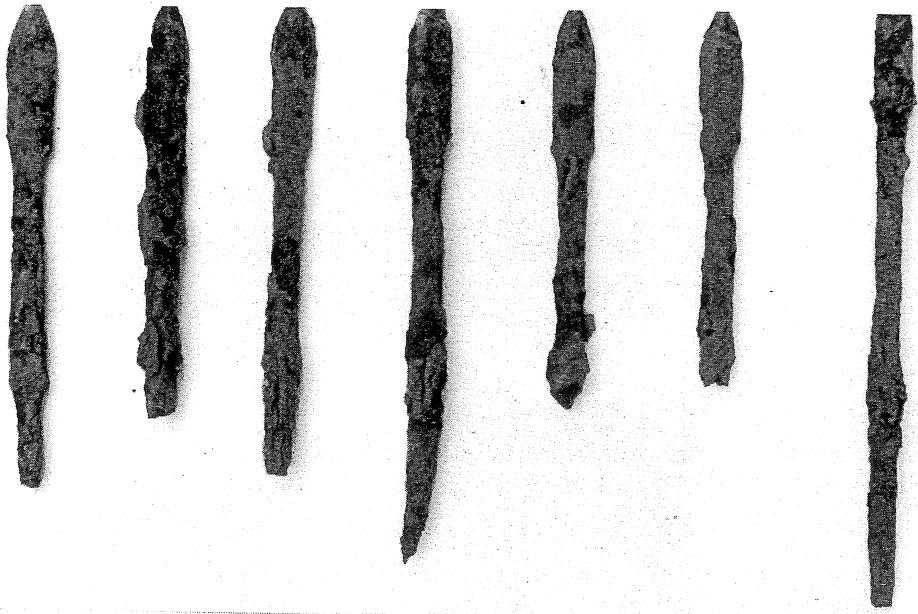
図版第八
釘崎古墳(三)
鉄鏃



A類



C類・D類

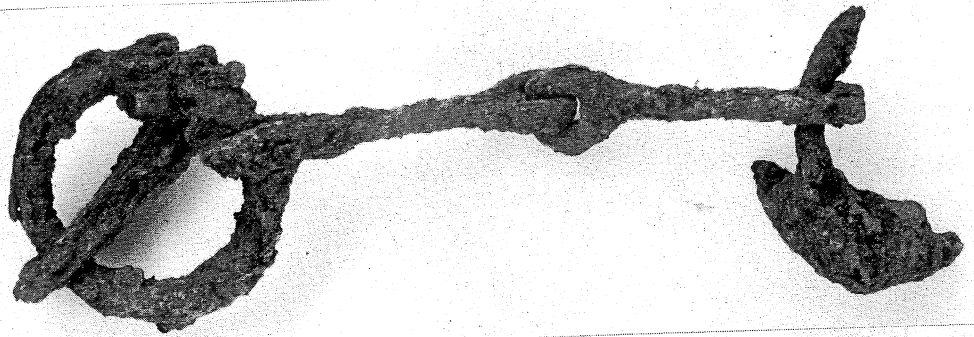
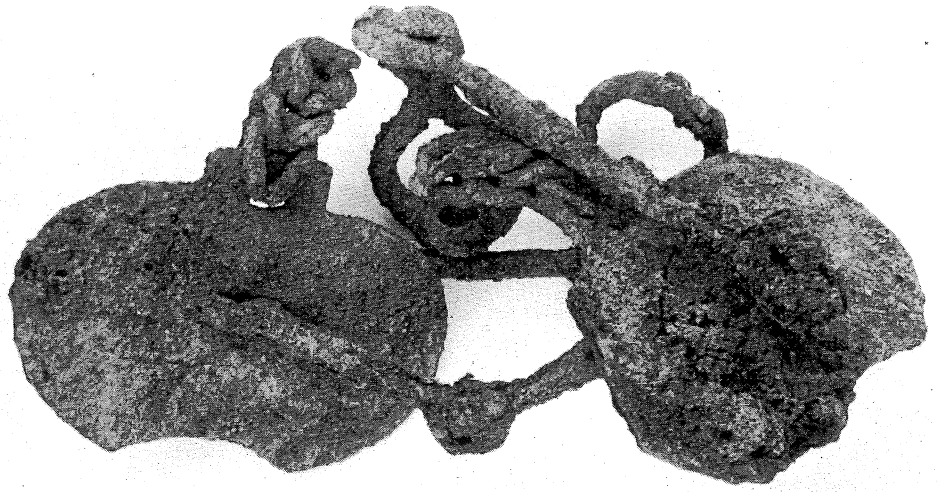


上・B類、中・F類、下・E類

図版第一〇 釘崎古墳(五) 鉄鏃・馬具

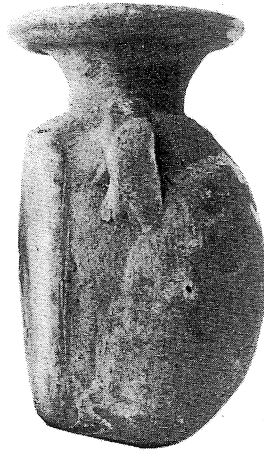


図版第二 釘崎古墳(七) 馬具(轡三種)





1



2



4



3



5

1 ~ 3 · 須恵器、4 · 5 · 土師器

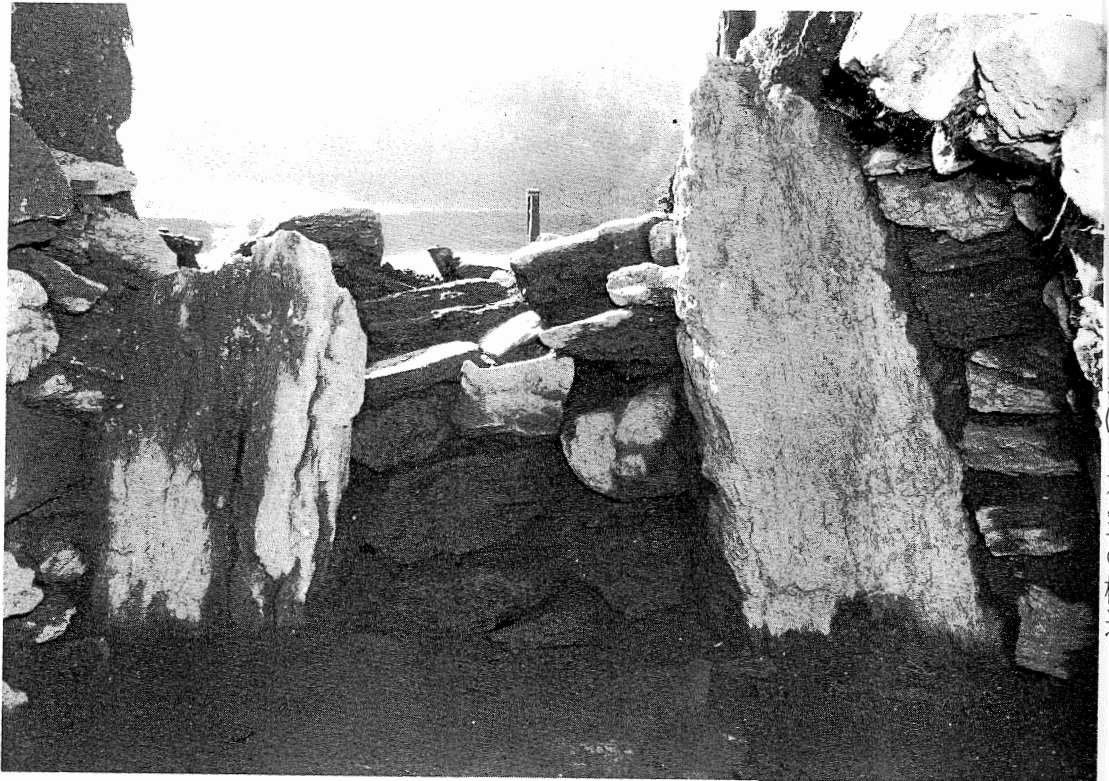
図版第一四 塚ノ谷古墳(一) 石室の構造



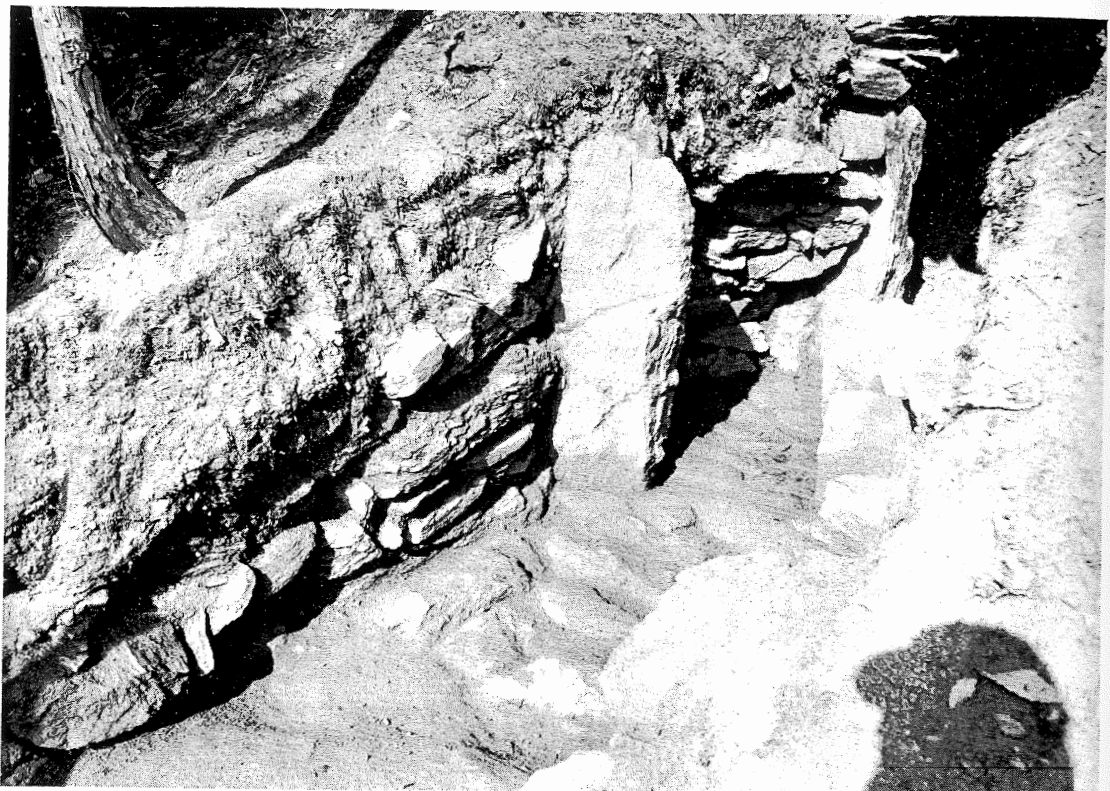
羨道部閉塞状況



前室・羨道の床面敷石の状態



前室、羨道の壁面構築状況

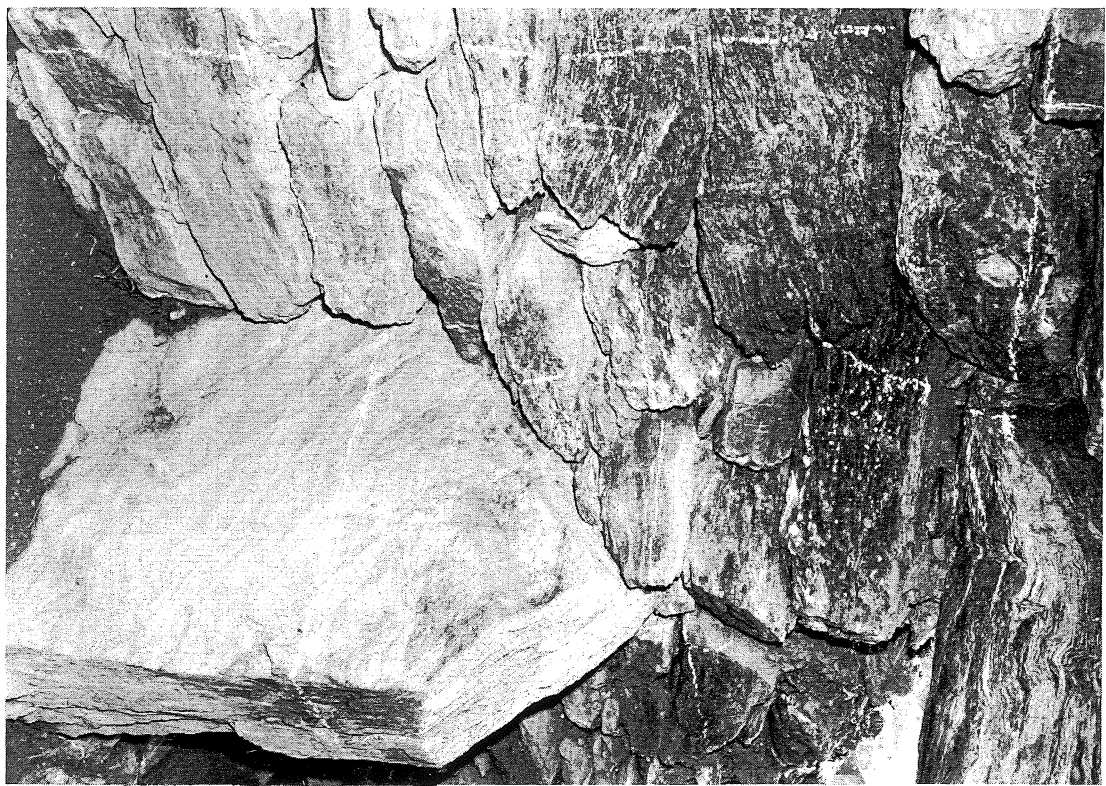


前室内よりみた閉塞状況

図版第一六 塚ノ谷古墳(三) 石室の構造



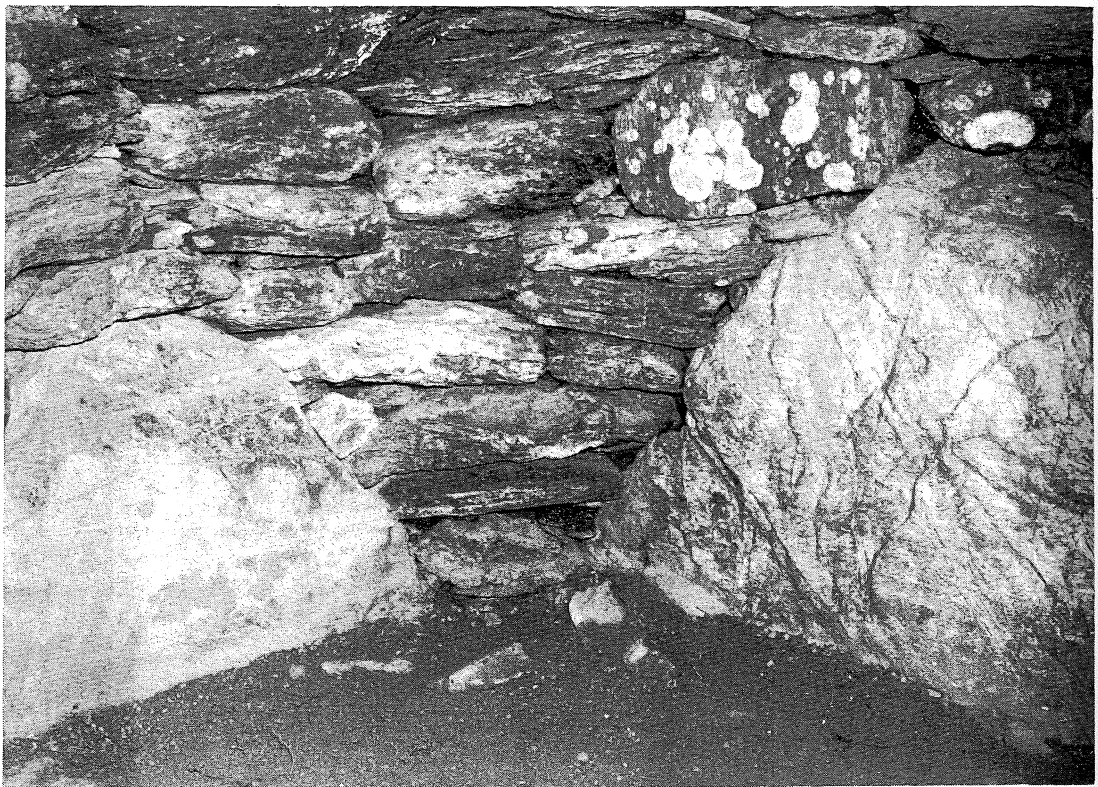
後室奥壁の構築状況



前室西壁と後室袖石の構築状況

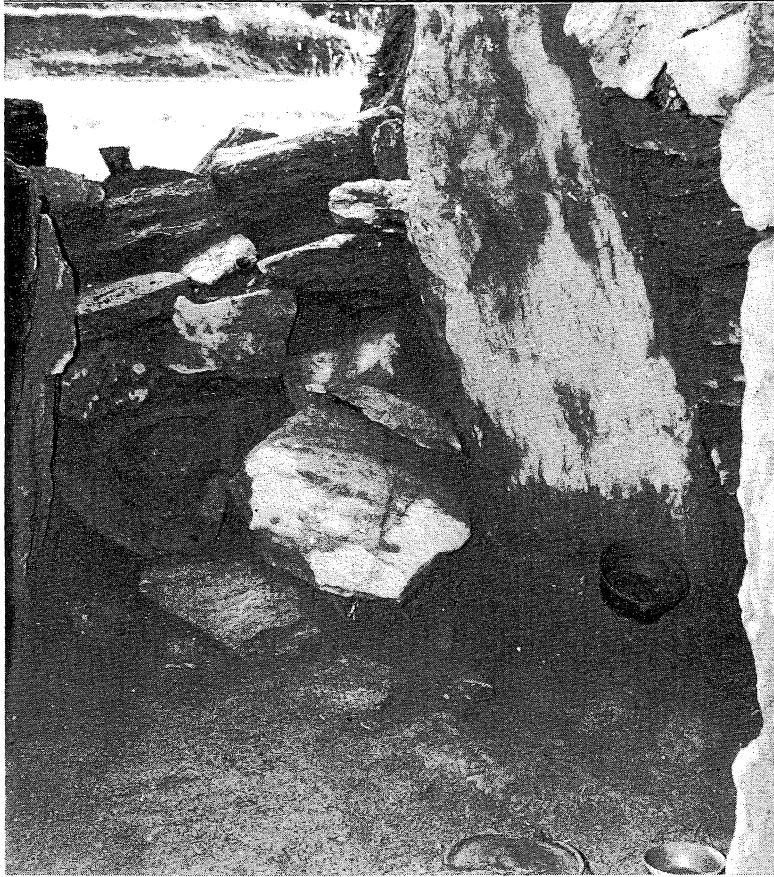
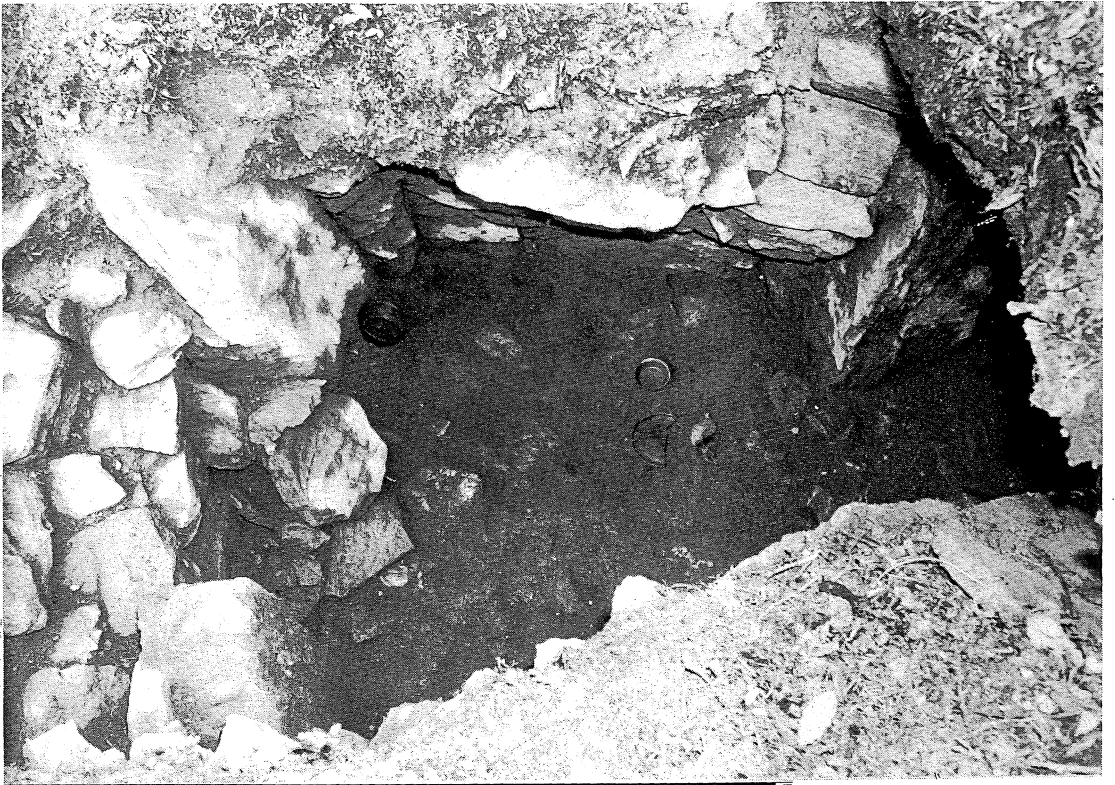


後室、前室の西壁側構築状況

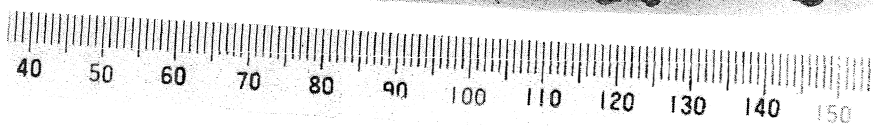
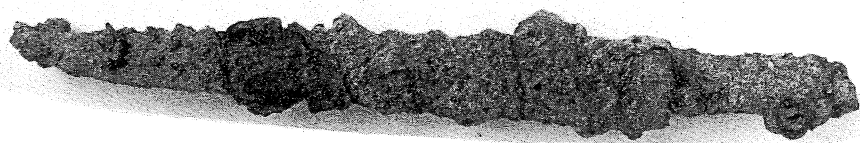


後室、北西隅部の石積構造（右・奥壁、左・西壁）

図版第一八 塚ノ谷古墳(五) 前室遺物出土状態



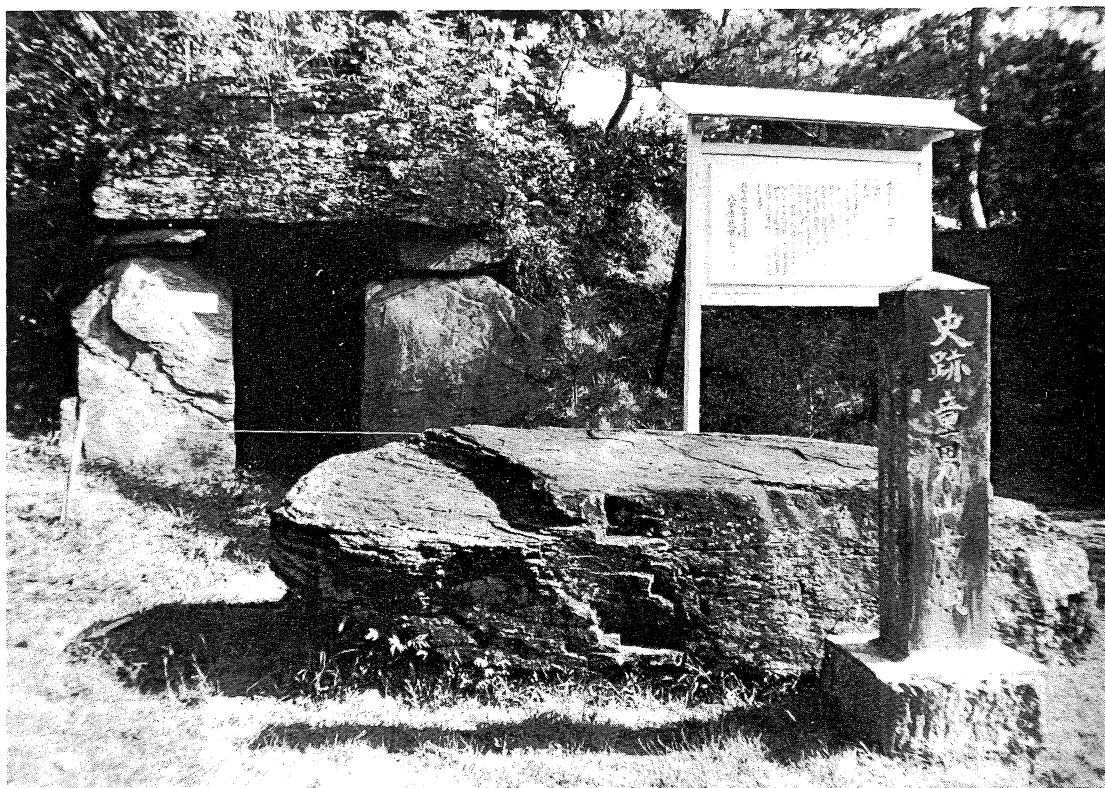
上・上方より望む
下・後室より望む



図版第二〇 童男山古墳(一)



古墳の外観を東側山丘より望む



石室入口付近の景観

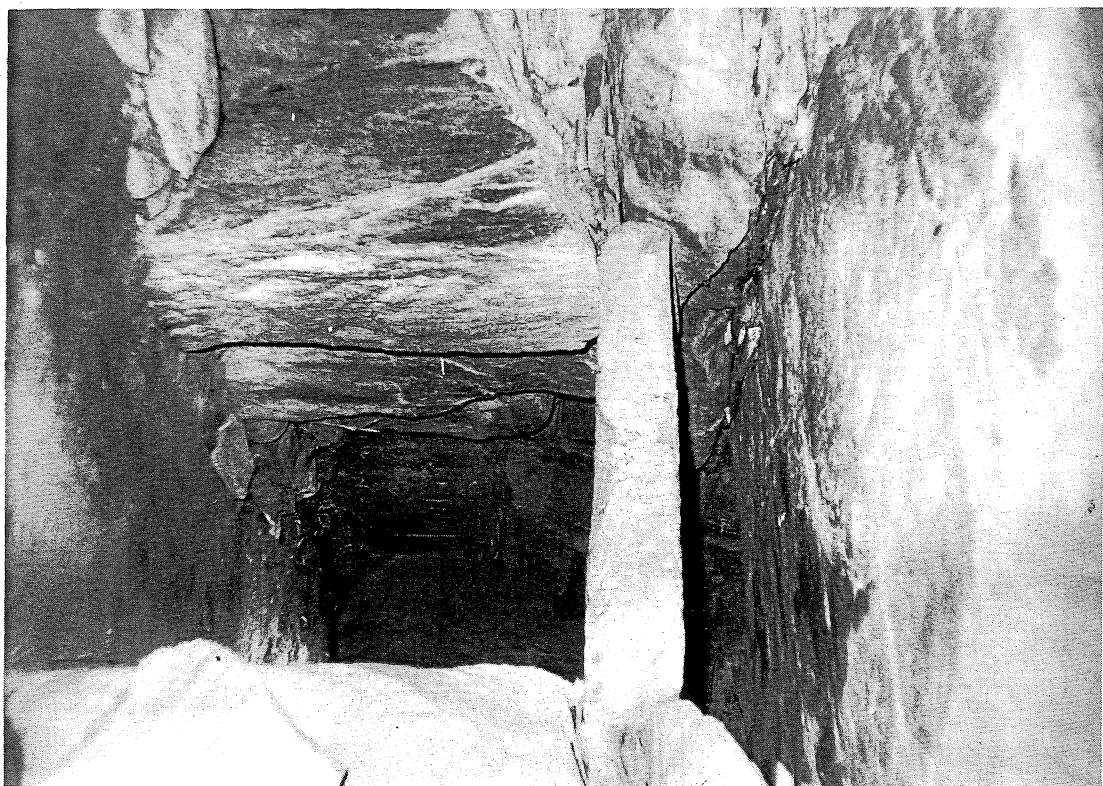


前室正面より後室を望む

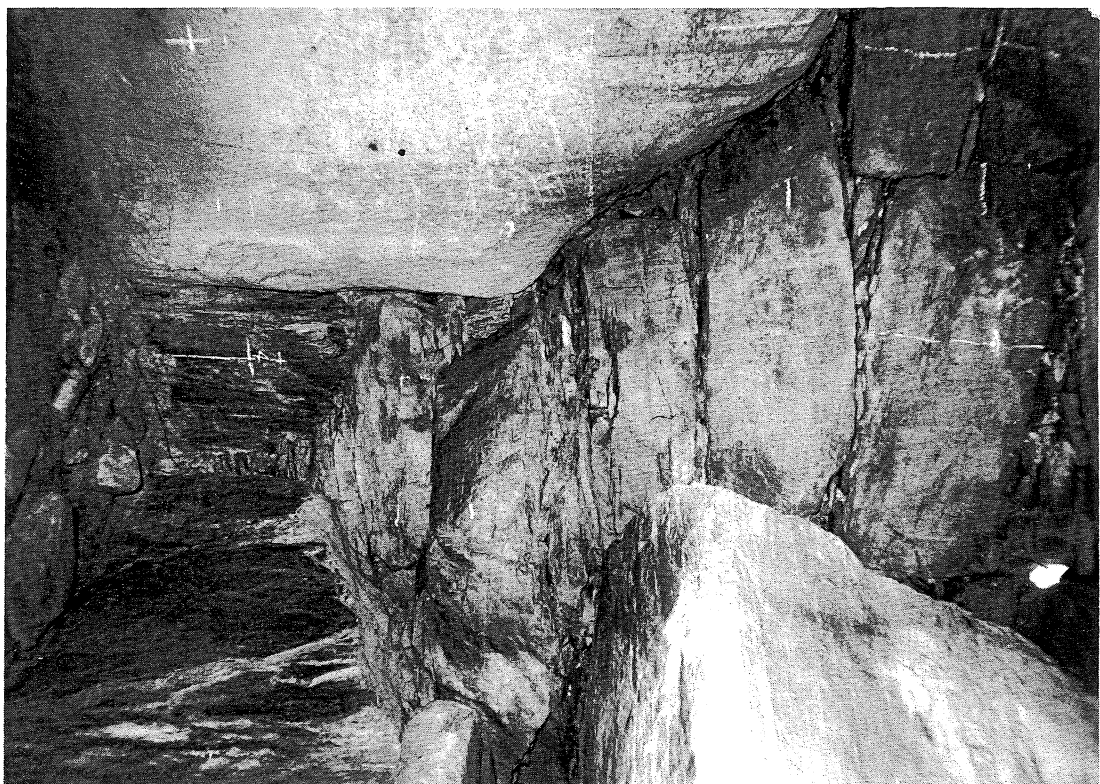


前室北西壁と屍床

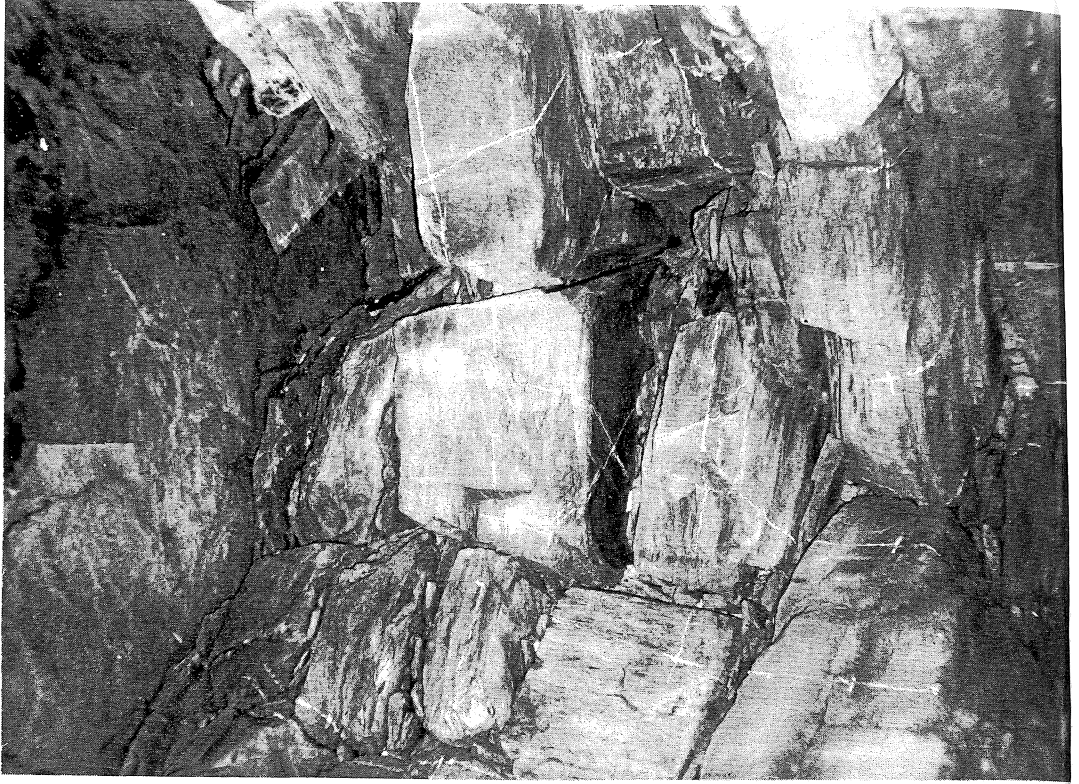
図版第二二 童男山古墳(三)



後室より前室南東部を望む



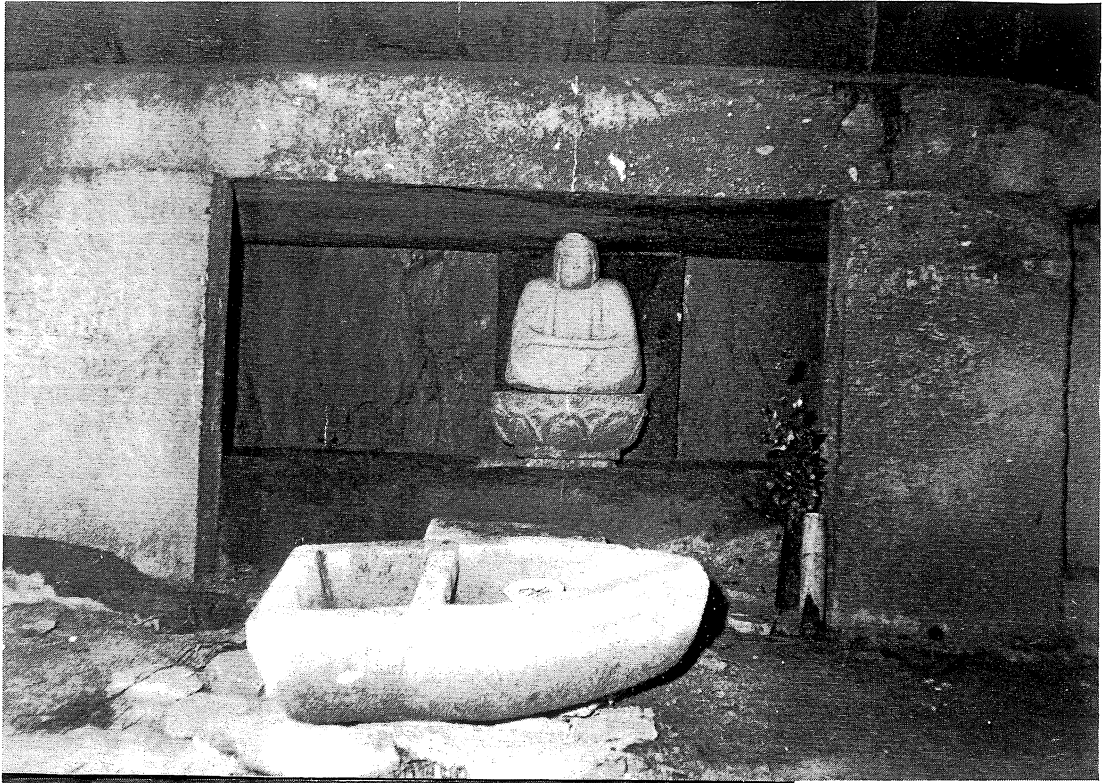
後室南東隅部の石組



後室北東部壁面の上半部から天井までの石組



後室内通路天井石から後室天井までの石組



下・石屋形北西側内部
上・後室正面石屋形全景